

浮き雲に成り代わった
者

白炉丸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

〔第一転生〕 完結済

孤高の浮き雲こと、雲雀恭弥に成り代わった俺。原作時は縛りが多いみたいだけど気にしない。気にしたら負けだ。あとには自由が待っている…はず

原作崩壊全くなし、原作通りにしか進みません。

誤字報告ありがとうございます

番外編は気が向いたら載せていくことにします。

←次作「初代雲の兄弟 霧雲の守護者になった者」

<https://syosetu.org/novel/200089/>

原作知らないと わかりにくいです。第1作目の小説です。

その場のノリ、その場で考えながら 書きました

よろしくおねがいします。

浮雲	浮雲	浮雲	V S ヴァリアー編	浮雲	浮雲	浮雲	浮雲	浮雲	黒曜編	浮雲	浮雲	浮雲
3 2	3 1	3 0		2 9	2 8	2 7	2 6	2 5		2 4	2 3	2 2
141	136	131		128	121	117	113	108		104	100	97

浮雲	浮雲	未来編	番外	浮雲 4 0	浮雲	未来編? ?	浮雲	浮雲	浮雲	浮雲	浮雲	浮雲
4 2	4 1			3 9			3 8	3 7	3 6	3 5	3 4	3 3
			雲と大空 									
207	203		197	192	185		177	169	164	156	152	148

浮雲	浮雲	浮雲	浮雲	浮雲	浮雲	浮雲	浮雲	浮雲	浮雲	浮雲	浮雲	浮雲
5 5	5 4	5 3	5 2	5 1	5 0	4 9	4 8	4 7	4 6	4 5	4 4	4 3

288 276 269 264 259 254 247 243 236 231 225 221 214

雲は漂う	番外編	終わる世界	浮雲	浮雲	浮雲	浮雲	浮雲	浮雲	浮雲	浮雲	来る！	浮雲
	6 4		6 3	6 2	6 1	6 0	5 9	5 8	5 7			5 6
(10年後 大人雲												10年前雲雀
	354		342	337	332	326	322	316	307	300		

雀)



始まつた雲生活

浮雲 1

目を覚ましたら俺は、見たことがない神社の前に立っていた。

え、なんで？

目の前にはそれほど大きくはない神社があつて、俺が立っているとこの左右には、

俺の背の2倍くらいのおおきさの石灯籠いしとうろうが置いてある。

いや！灯籠でかいな。

俺の身長、灯籠の半分とちよつとくらいしかないし…

いや… 周りがデカいんじゃない、俺が小さくなつてるのか！

手を見てみるとそれは、モミジのおおてて（そんなに小さくはないか）と呼ばれるぐら
いの大ききさのものに変わつており、体も自分のものではなくなつていた。

（だつて生まれた時からあつたほくろがなくなつてるし…）「どこで判断してんだよ」

辺りを見渡してみると 多くの木が生えていて、石階段が下の方に続いている。ここはどこかの神社だということは、わかる。

俺は、自分が何故ここにいるかは わからないが、

今のこの状況に読み覚えがある。

そう…今の俺はてん s 「成り代わりじゃ」

…え？「今のおぬしの状況は―転生成り代わり―をし、今 前の記憶が戻った。という状況、状態じゃな。」

可愛い声が聞こえて、神社の方を見てみると、賽銭箱の上に 金髪ツインテールの口りっ子が座っていた。

「可愛いも口りっ子も大歓迎じゃ、

だが、いえすろりーた、のーたっち じゃぞ」

…で？ 今の俺は転生成り代わりで記憶が戻ったばかり と、それはわかった。それでいったい、誰に成り変わったんだ？

「なananん!! かてきよーヒットマン 孤高の浮き雲 雲雀恭弥じゃー」

ああ、知ってるマンガのキャラだ… え、雲雀さん☒ メンド（面倒くさい）。

孤高？俺そんなキャラじゃないし… 原作崩壊 確実だな。

「そののところは大丈夫じゃ。ああ、この世界はちゃんと、カテキョーの世界じゃぞ。

でじゃ、おぬしの中には原作雲雀の心が入っているからのお、群むれが嫌いなのも、咬み殺したくなるのも、雲雀恭弥の物事の考え方も、おぬしの考え方として、一応理解できるようになつとる。

つまり、おぬしは原作雲雀としても行動ができる、というか、原作が終わるまでおぬしは、原作雲雀として物事を進めないといかん。世界がおぬしを縛るのじゃ。これはワシでも変えられん。

まあ、おぬしには転生特典が何かしら付いたはずじゃし、おぬしの記憶と考え方は残る様にしといたから、近くでキャラクター達を見れるということで勘弁してほしいのじゃ」

まあ、元の世界に未練は、マンガの続きが見れないとゆうことしかないから、べつにいいし。

あー、じゃあここは並盛神社か？

地理とか自分の情報とかがわからないから

な。

「そういえばそうじゃの、じゃあ今のおぬしの情報、プロフィールを教えるぞ」

浮雲 2

プロフィール

名前：雲雀恭弥

性別：男

年齢：秘密

誕生日：5月5日（牡牛座）

血液型：秘密

身長：110cm

好きな食べ物：和食、ハンバーグ

好きな言葉：「咬み殺す」「ワオ」

武器：トンファー

+++++

わいてくる感情や考え方は原作雲雀とほぼ同じ

誰も見ていない、聞いていない場所では、意識すれば、自分の言葉で話すことができ

へえ結構強いじゃんか、いいよ　いいよ。

年齢と血液型が秘密ってゆうのは気になるけど、原作雲雀もそこは「不明」だったしな。

「後は…そうじゃな。おぬしに前の記憶が戻る前の雲雀の記憶を思い出せるようにしてっと」

お、わあ、放任主義者　親の顔わからん。　家デケエ　日本屋敷じゃん。へえ、トンファーもう使えるのか。

え、草壁哲矢って「じゃ、もういいかの？」

「ワシは戻るとするわい。おぬしは　おぬしの出来る範囲で好きに生きるんじやぞ。」

原作が終わるまでは、多分絶対　死なないしの」

ああ、わかった。　感謝する。

「気にせんでよい（どうせ、また会うことになるしのお）じゃあな、言葉はちゃんと口に出すんじやぞ」

そう言つて、ロリっ子は一瞬でその場から姿を消した。

話している間に時間が経過し、太陽は沈みかけ、あたりは少し暗くなってきた。

ハア： 初めてロリっ子に会ったな。 いや、そこじゃない。

色々初めてな事がおこったしなあ。

まあ今は、日が落ちる前に家に帰ろう。

そう考え、＜雲雀恭弥＞は、家に帰って行った。

+++++

ここは雲雀家、恭弥の部屋

帰って来て家を軽く見て回ったけど、まあー広い

広いんだけど人が居ないな。 記憶によると、親が帰ってくるのは不定期だ

し、帰ってきたとしても夜中みたいだ。親から用事がある時はメモを置いておくみたい

だし、お手伝いさんが来て、家事をしてくれてるみたいだけど、あまりその人には会わ

ないみたいだな。

自分の部屋は、ここと、隣に和室の寝室があつた。

少し見てみたけど、物は無くて、押入れに布団が入っていたのを確認した。

この部屋も和室で床は畳だ。机はコタツ机、

大きな本棚がありそこには小さい子が読みそうな絵本から動植物図鑑、小説、あとは、医療や心理学、果ては料理の本まである。

いろんな本を詰め込んだみたいなのがする。

他には、服が入っているタンスなど一通りの家具はあつた。

これからどうしようか、
まあまずは晩ご飯か、
食べてこよつと。

浮雲 3

ご飯 美味しかったです。

(ハンバーグが凄く美味しい、味覚も変わってるみたい)

ご飯は時間通りに行けば、すぐに食べれるようになってるみたいだ。

なにこれすごい、気配も感じないし物音もしない、お手伝いさん有能

お手伝いさん最強説 実はお手伝いさんが裏ボスだったり……

さつき、お手伝いさんとはあまり会わないとか言った(考えた)けど、ホントは一回も会ったことないみたいなんだよね。

まあ、それは置いといて、今考えても仕方ないし。

これからどうするか、なんだよ。

記憶が戻る前にしてた事をそのまま続けててもいい感じなんだよね。

起床↓朝食食べる↓トンファ―持って並盛町の見回り(群むれが居たら咬み殺す)↓家に帰って昼食↓読書や勉強をする↓おやつを食べる↓トンファ―持って並盛町の見回り(群が居たら咬み殺す)↓家に帰って晩ご飯↓お風呂入る↓読書や勉強をする↓就寝

と、いう感じ　　まず言いたい、保育園（幼稚園）それか小学校は？　　行つてない、行ったことがないみたいだけど…

ま！いいか、行けと言われれば行く事にしよう、世界の力、げんきよりよく原作力が働いてるから、中学には絶対行く事になると思うし、　それまでは　できる範囲で好きに動こう。

成り代わり、　いいぜ、かかって来い世界！

俺は雲雀恭弥として、この世界を生きてやる!!？

その後　原作終了後！キャラクター達にイタズラしてやる!!？

（注意、この成り代わり主　　Sっ気があります）「それを上手く出せるかはわかりません」

そうと決まれば　イタズラしても仕返しで死なないように鍛えないとな、　原作中は幾ら鍛えても、それを表に出せないみたいだが、原作終了後は違うみてえだしな。

鍛えれば　原作雲雀より強くなれるみたいだしな。

後は、　原作に出てきた場所でも巡ってみようか、　守護者の家とかも見てみようか

な。

(大空、雨、晴　ぐらいか今居るのは)

それと、原作前にイタリア語とかを勉強しておこう、メモ置いて親かお手伝いさんに教材を頼めばいいか…。

じゃ、今日はもういいかな？　眠いし　風呂入って寝ることにしよう。

メモは書いて食卓にでも置いておこう。

~~~~~

お風呂　大きかったです。

(金持ちすげー　ひのき風呂でした)

ってことでね、今、布団ひこうと思つて　寝室に行ったのよ。

したらね、もうね、布団がしいてありました。

・・・お手伝いさんは　凄　これにつきる。

じゃ、おやすみ

そ

+++++

「おーい、戻ったのじゃ」

「あ！ おかえりなさい おば様」

「これ！ おば と呼ぶな！いつも言つとるじゃろ！」

「ああゝ ごめんなさい おば様」 「おい」

「で、どうでしたか？ あの転生者は？」

「そうじゃの、精神的にも魂的にも問題はなかったのじゃ。特神のおくりもの典も魂にしつかりとな

じんでいたしのお。記憶も問題なく、ちゃんと思い出していたのじゃ。」

「そうでしたか、それは 良かったです。一時はどうなるかと思いましたが。」

「まったくじゃ、まさかアレの結果がこうなってしまうとは、魂が無事じゃったのが幸いじゃったな。」

「そうですね。アレがああなるのは想像がつかなかったです。」

「ワシもじゃ。まあ できる限り あやつに都合の良いことになるように 隠れ特典として 運が良くなるものも付加しておいたしのお ま、ほぼ原作通りになるじゃろ  
うな。」

(頑張るんじやぞ。ワシも煎餅片手にたまに見守つてやるからのお)

## 浮雲 4

おはつようございますつと

とくに夢も見ずに目が覚めました。

(こういう 転生とかかって夢に神とかが出てくるのが多いけど、何もでてこなかったな。

昨日 ロリっ子に会ったけどさ)

今日の予定は そうだなあ

まずは 朝食食べるだろ、その後は、並

盛の見回りと称して 観光でもしようかね。守護者の家は今日は置いといて、商店街  
(ラ・ナミモリーヌ)と並盛中学校にでも行ってみようかな。

じゃあ そろそろ朝食でも食べてこようかな。

てことで、カット!!?

+++++

ハイ!!?というこで、朝食食べて 自室に戻ってきました。

(朝食は 焼き鮭と、なめこの味噌汁だった。 寝床にはもう布団が敷いてなかった。

やっぱり うちのお手伝いさんは有能)

じゃあそろそろ、トンファーを持って 並盛の見回りにでも行こうか。

(雲雀さんつてこの頃からトンファー持って見回りしてたんだね… さす流石です雲雀さんヒバだな。)

てことで、出発!!?

+++++

着きました 並盛商店街!!? 「沢田母が人騙し三兄弟(名称忘れた)に騙される回

に リボン達に護衛されながら買い物にきた場所(多分)by作者」

ここに来るまでに 不良系の奴を21、その他を12 咬み殺した。 不良系、と

いうかヤクザだな。そいつらは全て 向こうから仕掛けてきたんだよね。

俺が周りの人に避さけられながら道を歩いていた時に、

「お前がキョウヤだな！」

つて、俺の前に一人、そいつと俺を囲むようにして20人 で、俺の前に居るやつ

がそう言ってきたんだ。

それで俺が、「そうだよ。僕が恭弥、それで君たち なに群れてるの? 咬み殺すよ

？」と言つて、そしたら向こうが、

「俺らはお前に潰された『夜桜組』よぎくらぐみのものだ！俺らはその場に居なかつたんで、お前のようなガキが組を潰したつてのは、俄にわかには信じられんが、俺の舎弟はお前にやられたと、大怪我しながら俺に報告してきたんだ！

よつて!!

俺らはお前に制裁をあたえる！

たとえガキでも容赦はせんぞ!!」

だつてさ、だからまあ「弱いやつには興味がないんだ。」つて言つて咬み殺しておいた。

(雲雀さんは小さくても強かった。)

そんなこんなしているうちに 着きました、ラ・ナミモリーヌ

・・・入りづらい、そうだよなあ、雲雀さんが洋菓子食べてるのは考えつかない

しなく(偏見です)

特に甘いもの食べたいとは思わないし 今日はいいや

じゃあ次は並並盛中学校中にも行こうかな。



# 浮雲 5

ハイ！ 着きました 並盛中学校、  
共を咬み殺した。 着く前に コンビニで群れていた不良

(体が勝手に反応するんじや〜)

門が閉まってるから入れないな。

まあ 今の体(年齢)でここに入ることは少し面倒な事をしないといけないからあまりやりたくないし…

入るとしても10年いかない位 あとになるかな。

(原作の雲雀さんも 今の雲雀成り代わりな俺も、年齢が不明だけど、草壁哲矢より 年上らしいし、その草壁は笹川了平と同じく中3だし…

だがたとえ、雲雀さんでも国の法律を無視はできない…

か もうやってるか？

そうだな 法理って言えば守護者全員破つて  
いや、できるっていう  
それについて！ 以下略！以下略！ 言つてたらきりが無い！) <追加

情報Ⅱ雲雀さんは笹川了平が入学した時には風紀委員長を勤めていたらしい<

まあ、今 並中に入るつもりもないし本能雲雀の心も特に反応してないから並盛こ中学校はひ

とまずおいてこう。

じゃあ、そろそろ昼になるから一旦家に帰ろうか。  
カット!!?

+++++

ハイ！ ということで、特に何事もなく（ヤクザと不良を計13人咬み殺した）<sup>四</sup>家に  
着き、昼ご飯食べてきて 今は自室に居ます。

（昼ご飯は冷たいそばでした。）

今の時間は読書&勉強の時間になるね。

何をしようか？ というより、今なにが必要か、だよな。

絵本は置いておくとして、医療系か 図鑑でも記憶するか

前世の記憶のお陰で、勉強は高校までなら確実にできるし（それに教科書丸暗記すれ  
ばいいよね!!?） 人体の構造でも見て どこを攻撃したら一番痛いとか 拷問  
術でも覚えようかな？

いや… そうだな、それも良いが、 トンファーを改造する為にそういう

物作り系の本でも読もうか、そして 早めにトンファーを改造しよう。

爆発物系は別にいいや ま、仕込みはしないけど、調査方法くらいは覚えておこう、なにかあるかもしれないし。(何かあるんだよ)

後は・・・イタリア語でも勉強しておこうか、それと 中国語とかも一応やっておこうかな? イーピンとかも居るし、役にはたつだろう。

まあ、完全記憶能力だっけか? 特典貰ってるから 本という本を読み漁って見ようとは考えてる。

ああ、今は国語辞典を読んでるよ。凄いな この能力、思い出そうとすると、パツッて思い出したいものが出てくる。

だけど、前世の記憶には適応しないみたいだ。パツとは出てこない、少し考えないといけないな。

まあ、あのロリっ子は、『忘れることはない』と言ってただけだしな。

忘れないって事も便利だし、使えるから、これでいいとしようか。

じゃあ、この時間にすることは決まったし、午後の見回りまでカットしよう。

それでは! おやつを食べて、見回り開始まで

カット!

## 浮雲 6

ではでは、午後の見回りを開始する！

(おやつは ラ・ナミモリーヌのケーキでした。

え、ここまでくると怖いんだけど

…)

今回は、並盛山に行ってみよう。(沢田綱吉を鍛えるのに使った場所で、崖登りや バ  
ジルと組み手した所…のはず。)

+++++

着きましたつと。

そういえば、並盛山つて綱吉がディーノと行った所だったか

な？

ディーノのペットのスツポン

エンツイオ

が巨大化して綱吉が潰されて、綱吉

の足だったかが折れたシーンのさ。

まあいいや、今居るのは 綱吉が登った崖の下で、俺も試しにここを登ってみようと

思う。

と、言うことで、まずは距離稼ぎ

ジャンプでどこまでいけるか、

《left》ググッ、《left》

ヒザを曲げ、力を溜め

「ッ

ホ！」力強く飛び上がる

ダンッ!!

ビュウウ!!?

勢いよく上に上がっていく

もう一度！ 崖を足場にして！

ダンッ！

ビュウ！

「よつと」ガシッ！

岩壁を掴む

フウッ

結構跳んだな。

片手だけで岩壁を掴み 下を見てみる。

そうだなあ、ここはだいたい、学校の三階ぐらいの高さだな。

ヤバイな、身体能力が高い

流星雲雀さんの体だな、それともこの身体能力

は転生特典なのか？

まあ、使えるものは使うだけだしな。

それより、さっさとこ

の崖を登りきるか。

くくくくくくくくくくくく

よつ!!?

フウッ

あんがい簡単に登れたな

太陽

の傾き具合を見るに、それほど時間が経ってないみたいだし。

特にすることないし、帰ろ…

+++++

ただいまっ！（帰る途中に原作で雲雀が桜クラ病をかけられた公園？に行ってみた。不良がたむろしていたから咬み殺しといた。）

じゃあ、晩ご飯食べて、風呂入ってくるさ、

カット！

+++++

ハイ、という事で、今 自室に居ます。

（食べた物をいちいち報告するのメンドイ↑じゃあやるな。 つて事で、もう言わないっす

お手伝いさんが作る料理は全て美味しいって事で 終わり）

じゃ、まあ 寝る前に 昼と同じ勉強？読書？をしてから寝よう。

これからは このループで生活していくつもりだから、何かあるまで カット、という事で…

+++++

パリッ                    モグモグ                    ゴクン                    バキッ                    ポリポリ                    ゴクン

ズズズ                    ろ                    ゴクン                    コトツ

「お、まだ始まったばかりじゃというのに生活が安定してきてるみたいじゃのお

じゃが、イマイチ見えていても面白くないんじゃないやよな                    原作力のせ

いで、原作キャラクターに関われないしのお                    」

「仕方ないじゃないんですか？                    それほどまでに、その世界の原作力というものは

強いものですし。」

「それは                    わかつてるんじゃないやがなあ                    」

「読者がこの小説を読んでいても                    ツマラナイと                    感じるじゃろ                    ただでさえ中

身がなくて、読みづらくて、意味がわかりづらいのじゃから                    」

「読者ってなんですか？」                    「理解できんのならそのままでもいいのじゃ                    」

## 浮雲 7

ハイ!!! 『何か』ありましたよ。

その前に報告、あれから半年ほど経ったんだけど、勉強の方はイタリア語はだいぶ出来るようになった。今は中国語に手を出し始めたばかりで、トンファーは改造済み、原作で山本武の刀を抑えた仕込み鉤かぎと、ディーノの鞭を見て雲雀さんがトンファーに仕込んだ鎖とかを付けておいた。トンファーの総重量がヤバイことになってるけど、重さは特に感じない、何故だ。

(だけど、原作突入時にそれらを使用出来るかは わからないが…)

それだけで、今居る場所は 沢田綱吉の家の近く、そこで群れを見つけて咬み殺していたんだ。

そしたら、見つけてしまったんだ！ 原作キャラを！

だが残念、綱吉ではないんだけどね。

まあ、チラッと見ただけというか、目が合った気がするというか 目はバツチリ合っただけでも。



あれだよね… 目が合った相手がね…ちよつとねえ…

ああ！いいよ！いいよーだ！ どうせ起こったことは変わらないし！

そうですね！勘のいい人は気づいてるかもしれないけど、俺と目が合ったのは、

『その決断は神の采配と謳われる、ボンゴレIX世』

Timoteo

丁

度、車に乗る所だったんだよ！

それと、後ろ姿だったけど、車の扉を開けていたのは 綱吉の父親『ボンゴレファミリーの門外顧問、ボンゴレの若獅子、沢田家光』だよなあれ！

あれか？綱吉の強すぎるブラッド・オブ・ボンゴレを封じた後か？（そのシーンはアニメ版だけのもの）

まあ、俺的には封印やらはどうでもいいんだけどさ、俺はノーノも 家光も好きではないかなあゝ

ノーノは作中でもあったと思うけど、優しすぎる、それもダメな方の優しさだしな。だからXANXUSがあんなになったんだ。保護した後、息子という立ち位置になければよかったんだ、あまいとも言うな、

家光の方は家に帰ってないし（雲雀家も同じか…） 沢田家は、綱吉は置いておくとし

て、沢田奈々 がそのことを気にしてないみたいだしな。(内心何を思ってるか、考えているかは 知らないけど…)

それよりも、ノーノに目をつけられてないといいな。雲雀の感覚的には何かを感じ取ったみたいで、体が『ピクツ』っと、反応したんだけど、ノーノはすぐに車に乗り込んだから 俺は特に行動はとってないんだけどねー。

1番最初に出会う(見かける)のが、9代目(と家光)だったのは少しアレだったけど、

まあ 初 原作キャラクターとの邂逅でした。

## 浮雲 8

9代目(プラス家光)と邂逅したのはいいんだよ、だけどな、俺的にはそいつらに会うくらいなら

綱吉とか、沢田奈々に会いたいんだよな。

まあ、原作力が働いてるから、記憶に

残る出会い方はムリなんだろうけど(会話した後に殴ったりして記憶をとばせばいいのか?)

それと、9代目↓ボンゴレファミリーときて、リングのことを思い出したんだけど、雲と霧属性のリングが欲しいと思うんだよな

雲のリングは 原作始まって少しした後の『ヴァリアー編』の『リング争奪戦』で獲得できるだろうけど、霧のリングはな

『未来編』の10年後雲雀も持つていな

かったはずだし、手に入れられるとしても原作が終わった後かな?

六道骸が嫌い

な雲雀恭弥が霧のリングを持つことはないだろうし、10年後雲雀さんが幻騎士戦で

術士は嫌いって言うていたしな…

霧のリングが入手できてそのリングを使え

るかは諦め半分ではないと思う。

じゃあついでに　山本武の父親（山本剛）がやっている寿司屋でも見てから帰ろう  
と思う。カツト！

+++++

ハイ！　ということで、ノーノ（十家光）との邂逅から1年経ちましたー、転生成り代わりをしてから約1年と半年経ったということになりますな。

今までに咬み殺した人数は500人はこえたと思う。いや、一度咬み殺したやつが仕返しに来たこともあるからそれよりは少ないか…

勉強の方は　イタリヤ語の読み書きはひとまず完了、中国語も訛りとかがなければ大丈夫で、今はロシア語を勉強中、それが終わったら別の言語、それも終わったらまた別の言語と、続けていくつもりだ。

あと、自室にある本はある程度は読み終わったんだよね。応急処置の方法とか昔ながらの薬の調合方法とかも知れたんだけど、薬の調合って使うことあるかな？

使うことがあるのか系で言えば帆船の操作方法とか、様々な物の仕組みが書かれている本を読んだりもした。

そういえば、この1年間で便利な伝つてを手に入れたんだ。

それはある日、見回りをしていたの時だった……

~~~~~

俺は商店街を歩いていた。

「ひ、雲雀さん！」 「え！ あー！」 「お、おはようございます！」 「」

最近はい、咬み殺したことがある不良も、咬み殺したことがない不良も 俺に挨拶してくるようになった。（まあ、群れていたら咬み殺してるけどな）

それで、不良系に会うたびに挨拶されてだんだんイラついてきた時だった、裏路地の方から声が聞こえてきたんだ。

「おい〜おっさん！ ほらほら財布出してもらおうかあ〜」 《left》 ドカツ 《left》
《left》 《left》 グツ！ 《left》 や、やめてくれ !!? 「

「アア〜ン？ ンなこと言っていないでさっさと財布出せや！」 ゲシツ！ 「う！
」

「あ〜 もういい ボコってから金目の物 いただいてやるよ。 お前ら、

ヤレ」 「は〜」 「て〜ことでおっさん！ 大人しくしてろよお」

「ヒツツ」

みたいなことをやってきたから、風紀を実行するためにそいつらに近づいたんだ。

浮雲 9

「ねえ、そこで何してるの？」

「ああ？ なんだ ガキ」

不良達が見たものは、小学校の低学年か中学年くらいの子供で、その手にはトンファーを持っており、服装は白いシャツを着ており、その肩には学ランを羽織っているという凄く珍しい格好をしていた。(学ランの左腕には金色で風紀と書かれた、赤色の布地に金色の装飾がされてある腕章が付いている。)

「あ！この子供は！」 「なんだ？ お前知ってるのか？」 「研^{けん}さん！ 最近もの凄く強いって噂のガキがいたでしょ、そのガキがこのヒバリってやつですよ！」 「はあ？？？ こんなガキがか？」

「ねえ 君たち、僕の並盛で騒ぎは許さないよ。君たちは風紀を乱した。よって、チヤキ！ 　　ここで君たちを咬み殺す。」

「はあ？？？ 何言ってるんだよガキが！！」

「研^{けん}さん！！」

そう言つて、研と 呼ばれる男は恭弥に蹴りかかった。 　　だか、恭弥は下がるどこ

ろか 逆に男に近づき 男の顎あごにトンファーを叩きつけた。

ンファーを顎に叩きつけられた男は脳が揺れ、気を失い 前のめりに倒れこんだ。

バタツ 「「研さん!!」」

「さあ、次は君たちの番だよ。」

「「ヒッ!」」

「僕の前で群れるやつは、咬み殺す。」

「「うわあ!!」」

~~~~~

「風紀を乱すものは 誰であろうと咬み殺す。」

「ドーン!」

「あ、ありがとうございます!」 「?」

そこには 先程不良どもに囲まれていたおっさんがいた。

「先程は助けていただき感謝します! お礼と言うにはあれですが、これを」

そう言っておっさんが差し出してきた物は名刺だった。

「なんのつもり?これ」

「私は並盛中央病院の院長をやらさせていただいています。 ですので、何かありまし

たら ぐご用命下さい 全てお応えさせていただきます。」

「ふうん…(何これ怖) いいよ、必要になったら連絡する。」 「はい!」



「じゃあね」

そう言い雲雀は見回りに戻って行った。

残った院長は・・・

（あの子が雲雀家の御子息、ますます ぐ当主にソツクリになって…）

~~~~~

という事があつて俺は病院の院長という伝を手に入れたんだ（着実に原作雲雀に近づいていつてるな）

連絡先貰つてもな、携帯電話はまだ持つていないし、公衆電話をいちいち探すのも面倒だからまだ電話したことはないんだけどね。必要とも思つてないし、今 咬み

殺してるやつらは見せしめの意味があつて 咬み殺した後は放置してるしさ

まあ、必要になったら使うから今は置いておくことにするよ。

家は相も変わらず お手伝いさんが姿も見せず、気配も無く家事をしている。

それと両親の事だけど今まで一度も会ったことが無いんだ、お手伝いさんに聞いたらしばらく家に帰つてないそうだ。本当に何をしてるんだろうな？ 親という役割りをみたせてない、親つてなんだっけ状態だよ。

浮雲 10

やあやあやあ、伝を入手したと報告してから4年の月日が経ったよ（いきなり飛びすぎだよね）

転生成り代わりをしてから5年と半年が経ったことになるね。（お手伝いさんも両親にもまだ会えていないよ。両親に関してはもう死んでるんじゃないかと考えるけど、俺の超直感に及ぶほどの勘が、死んではいけないと告げてくるから、まだ死んでないんだろうけど）

この4年間、最初の2年間は知識を頭に入れることを重点に行い、後の2年間は並盛町の統治に力を入れた。

不良どもを咬み殺し、咬み殺して、咬み殺しまくったただけけどね。

それとそれと！ 会えたよ！ 会話できたよ！ 原作キャラクターに！（病院の院長は別）

それは最近の出来事で、俺が見回りをしている最中だった、

くくくくくくくくくく

その時は人気ひとけのないビル群の中を歩いている時だった、尾行をされているのに気づい

た俺は 振り向いて尾行をしてくるやつに向かつて声をかけた。

「ねえ、そこにいる君、僕を尾行おっけしてなにがしたいの？」

その時は理由がわからなかったけど、不思議と尾行されていた事にムカつきを感じなかった。

「早く出てきなよ。じゃないと、」

チャキ！ 「咬み殺すよ」

ダツ！ダダダダダ！！？ ザザザツ バツ！

「すみませんでした!!」

走って近づいてきたそいつは、そう叫びながら、俺の前で膝を着き頭を下げた（土下座ではない）

「なに？君、誰？」

「はい！ 私は！雲雀家の分家にあたる草壁家の長男、草壁哲矢くさかべてつやと 申します！」

そいつはそう名乗った、草壁哲矢、それは原作に登場する人物、老け顔の並盛中学校風紀委員会副委員長。髪型をリーゼントにし、草を口に啜すすえており、雲雀恭弥の影となり、サポート役に徹する者。その名を俺の前にいるそいつが名乗った。

これは雲雀が 初めて原作キャラクターと会話をした瞬間だった（院長は除く）

目の前のそいつ…草壁哲矢の髪型はリーゼントではあるが原作より少し短かった、口

にはちゃんと、ちゃんと？草を啜えている。肌も少し色黒、身長は今膝を付いている状態だからわからないが、多分俺よりも大きいのだろう。

俺は草壁哲矢という人物のことを転生時に与えられた前世を思い出す前の記憶にて知っていた。

「あなたのご噂は聞き及んでいます。私は草壁家代々の使命に従い、今より、雲雀家次期当主、雲雀恭弥さまの影となります。どうぞ、御命令を」

「……（原作草壁が雲雀の影になつてる理由つてそういうことだったの!?!? 俺が与えられた記憶には、草壁家は雲雀家の分家つて事だけだったんだけど…驚き桃の木山椒の木だね。まあ、それよりも今は、）それつて君の意志なの?」

「え?」

「その影になるとかは 君がなりたくてなるのつて聞いてるんだよ」

「… ニコツ はい!私、いえ …俺の意志です。俺がヒバリさんに仕えたいと考えているのです!」

とても強い意志を感じた、俺の勘も今此処で草壁を部下にした方が良くと囁いてきた。

浮雲 11

「へえ……僕は群れるのが嫌いだ。」

「……はい、聞き及んでいます。」

「僕の今の目的は、この並盛町の風紀を正すこと、それを成す為に、僕が並盛の秩序になることだよ。 だけど、とても気に入らないけど、それを行うには、僕だけ

じゃ難しい事も理解してる。

今、僕に必要なのは人材だ、僕の命令に忠実な、そ

れを君に集めてもらおう。そしてその人材を使い、風紀委員会を立ち上げる。風紀委

員会を設置する場所は並盛町の中心、並盛中学校。僕はもう少ししたら並盛中学校に

入学するつもりだから、まずは並中を支配する。君には風紀委員会の副委員長を務め

てもらおうよ。

……それと、僕の風紀委員会の副委員長が弱いのは許さないから。」

「……!!? は！ 私、草壁哲矢、風紀委員会副委員長の名に恥じぬよう——」そういうのはいらぬ。」——え、」

「君にはそんな風にへりくだってほしくない。言っておくけど、副委員長、たとえば君で

も、僕の意に反するなら、咬み殺すよ。」

「！はい！わかりました、委員長！」

~~~~~

つて事があつたんだよ、いやあ、驚きの連続だったよ。

(まだ子供っていう感じがしたよね。喋り方とか……)

今、草壁副委員長は次期風紀委員会のメンバーを集めたり 自分自身を鍛えたりして  
るみたいだ。

そういえば、草壁副委員長と会った次の日の朝、食卓に使って下さいと書いてあるメモ  
とともに2つの携帯電話が置いてあつたんだよね。だから、1つは自分で使って、もう  
1つは草壁副委員長に渡しておいた。

あれだね、食卓に置いてあつたメモと携帯電話を見た時、ゾクゾクしてきたね、まあ、そ  
れは内心だけで、表には1ミリたりとも出なかつたけど。

そうだ、この間 身長を測つたんだ、今の俺の身長は150cmだった。それで、平均  
身長を調べたら小6が145.2cm、中1が152.7cmだったのよ。で、原作雲雀の  
身長が169cm、だからどうしたという事なんだけど、俺的にはそろっと 並盛中学

校に入学しようと考えてるんさ

この間、草壁哲矢に学年を聞いたら

小学5年生って言ってたし、草壁と、笹川了平は同じ学年だから、そこから計算すると、原作開始まであと、約2年と半年しかない事になる。

笹川兄が並中に入学した時にはもう、ヒバリが並中の風紀委員長だったと、原作で言っていたから、时期的にも丁度良いと思うし：

じゃ、来年に並盛中学校に入学するって事で決定！

並中の校長という伝はこの5年と半年でもうゲットしたしな。(この小説はその場のノリで書いています。by作者)

という事で、まだ早いけど、入学の手続きの準備でもしておこうか

(どうせ、お手伝いさんが書類とかを準備してくれるんだろうけど、ほんと、誰なんだろうな、あの人って)

# 原作雲雀のプロフィール、草壁の語りを添えて

原作突入前にヒバリのプロフィールを書いておきます。（プロフィールに関しては原作と同じで、ネタバレ?にもなりません。）

プロフィール、原作時

名前・雲雀恭弥

ひばりきょうや

性別・男

年齢・不明

誕生日・5月5日（牡牛座）

血液型・不明

身長・169cm、体重・58kg

好きな食べ物・和食、ハンバーグ

好きな言葉（口癖）・「咬み殺す」「ワオ」（今まで一度もワオって言ってないな）

武器・トンファー（中に色々と仕込まれている。スペアがいくつもあある。）

死ぬ気の炎の属性・雲、霧（雲が強く、霧が弱い）



ポックスへいき  
匣兵器・雲ハリネズミ

(ポルコスピーノ・ヌーヴォー) 名前: ロール

並中指定のブレザーではなく、旧服の学ラン(風紀委員会の制服)を着ており、左腕には風紀と書かれた腕章を付けている。(季節が夏だと、学ランの上着を脱いでいる。)

転生成り代わりだが、原作雲雀の感情がわかる。

体や口が勝手に動く時がある。

並盛愛は本物(僕の恋人は並盛さ)

少し面倒くさがりな性格をしているが 戦いが好きで強い者と戦っている時、表情が出ていれば 瞳孔が開いて口角が上がる。(強者と戦ってる夜兔みたく)「だが、それが表に出ることはないだろう」

世界の力が働いている影響で、幾ら鍛えても、その力を誰かが見ている状況で発揮することができない。

(原作時間の間は 原作通りの力しか出せない)

死ぬ気の炎の量が原作雲雀より多い。だが、その描写が この作品で出る事はない。(比べる対象がこの世界には存在しないため。)

前世の記憶に係する事は、超直感や読心術読心術でも読み取る事が出来ず、白蘭にも他のパラレルワールドがどのと言われることもない(これも、世界の影響か…)

様々な国の言葉を使える。本で知った様々な知識がある。

+++++

ここから下は読まなくても良いです。パッとそういうのもあるかなと思います。のを適当に書いただけです。読みづらく、意味がわからない文になっています。

やめるなら今のうちですよ？

+++++

草壁哲矢 side

雲雀家の当主になる者が並盛町に君臨くんりんする事を目的として行動するのは本能みたいなものだと、父から教えられた時は半信半疑だったけど、強あながちち、間違いではなかったみたいだな……

雲雀家の当主になる為の条件は1つしかない、その条件は並盛中学校を卒業する事、並盛中学校を卒業すれば当主の座は譲られる。

並盛中学校以外の中学校に行ってしまったら当主にはなれない、当主になる者が居なくなってしまうたら 雲雀家は滅ぶ、雲雀家とはそういう宿命を背負った家系だと教えられた。

だけど、その宿命を知る事ができる者、宿命に関して教えられる者は、雲雀家の当主になつた者と、草壁家の人間の雲雀家の者に仕える者だけ、つまり、次期当主という立場の者には教えられない、教えてはいけなと言われた。

そして、雲雀家当主は次期当主が一定の年齢になつたら並盛町から出て行く、それも本能で、自身の意思で並盛町の外に出る

「この事を知っているのは草壁家の者だけ」

そのため、雲雀家の次期当主のほとんどが親の顔を覚えていない。

あとは、雲雀家に生まれた者で本能が強い者は打撃系の武器を好んで使い、群れることが嫌いで、生まれながらに他者より強い、

そういう 生まれながらにして本能が強い者が雲雀家の当主になる者と聞いた。

俺が俺自身が 時期当主に仕えたいと思っているんだ。ヒバリの名に恥じないよう

に精一杯頑張ろう。

## 原作開始 日常編

## 浮雲 12

来たよ来たよ！ 原作が開始したよ！

今日の夕方に風紀委員から報告を受けたんだ、学校の放課後にパンイチで町を走っていた不審者がいたとね。

その報告を聞いた時に、 ああ、原作開始か…… っと思つたね。

原作開始したから、明日は綱吉と剣道部主将の持田との笹川京子を賞品とした勝負になるはず、見には行かないけどね。

俺が並盛中学校に入学してからの事を簡単に説明すると、まず、入学したその日に風紀委員会を立ち上げた（生徒会しか無かったからね）それから 不良共や群れている者を咬み殺して夏休みが終わる前にほぼ逆らう者がいなくなつた。（3年生がグダグダ言つてきたけど） 夏休みにはシヨバ代を回収し始めたし、携帯電話の着うたを

並中校歌にしておいた。 それから いろいろと手回しをして、咬み殺してポロポ

口になつた者は救急車を呼ぶようにした。

sondemonotte 新年度が始まって、草壁哲矢と 笹川了平が入学してた。 草壁

をすぐに風紀委員会副委員長にしたら周囲が草壁のことを尊敬し始めたんだよね（それでリーゼントにする者が増えていった）入ってきた情報によると、入学してすぐにあのヒバリが、風紀副委員長にした者はなんだ、誰だ、スゲー　という感じだった。（入ってきた情報↓スキル：聞き耳によって入手した情報。）

あとは、バイクを買って　私有地でだけだけど乗りまわした。流石にねえ、。原作雲雀が乗っていたから買ったんだけど、遠出することもないし（買ったバイクは　スズキ・カタナ　オートバイ）

そのくらいかな？（並盛山で『ひとりぼっちの運命』<sup>さだめ</sup>や『孤高のプライド』を歌ったりもしたけど…）

そしてまた新年度が始まった。　今度は　沢田綱吉、山本武、笹川京子、黒川花が入学してきた　ということだね。

いやゝ　原作の記憶を忘れないっていいよね。

じゃ、明日から俺が登場するまでをパパツといきますか（これから並盛が荒らされると思うとムカついてくる。）

俺はさつさとディーノにいたずらをした、良い反応をしてくれそうだしね。スペルピ・スクアーロもよさそうだけど、アイツにちよつかいを出すのはXANXUS<sup>ザンクス</sup>とか山本武だから…

「ちよつかいつて…」

+++++

夏休みもあけて季節は秋 今日成全委員会参加の会議がある。

ここは並中 会議室

「プリントにあるように、これが2学期の委員会の部屋割りです。」

「えーっ何これ!?」 応接室使う委員会がある ずるい!どこよ!」

ある女子生徒がそう叫んだ

その女子生徒に隣に座っていた男子生徒がこっそりと注意した

ヒソツ 「風紀委員だぞ!」「ハツ」

「何か問題でもある?」

窓辺に座っている男子生徒が声をかけてた。

「いえ!ありません! す、すいませんヒバリさん!!」

「じゃ、続けてよ」

## 浮雲 13

というのが雲雀恭弥の初登場シーンだね。

ああ カットしたけど、緑化委員会が仲良し委員会してたから風紀委員にボコられた。

(まあ、命じたのは俺なんだけどね)

そのあと あくびをしてたら、俺の勤が誰かに見られていると告げてきてさ、十中八九 リボンだろうけど。

昼休み中に綱吉たちがファミリーのアジトを作るために(本当は平和ボケしないためのトレーニングと、俺ことヒバリとの顔合わせのために)応接室に来るから、俺も応接室に向かおうと思うんだけど： イヤだな〜 W. C って書かれたスリッパで叩かれるのは、レオンの変身だから汚くはないだろうけど、

+++++

ボンゴレ side



ガチャ「へへ　　こんないい部屋があるとはねー!」

「君　誰？」

誰も居ないと思っていた応接室には一人の男が居た。

(「こいつは…風紀委員長でありながら　不良の頂点に君臨する　ヒバリこと雲雀恭弥  
…!!?!」)

「なんだあいつ？」「獄寺　待て…」

「風紀委員長の前ではタバコ消してくれる？　　ま、どちらにせよただでは帰さない  
けど」

「!!　　んだとてめー!」　　獄寺がヒバリに近づく

「消せ」　　ビュッ

一瞬だった、何かが振るわれ　　獄寺が啞えていたタバコが真つ二つにされた  
バツ!　　「なんだこいつ!!?」

獄寺は危険を感じて後ろにさがった。

(「聞いたことがある…　ヒバリは気に入らねー奴がいると、相手が誰だろうと  
込みトンファーでめつた打ちにするって…」)

「僕は弱くて群れる草食動物が嫌いだ　　視界に入ると、　　咬み殺したくなる」

仕

その獣けもののような瞳に獄寺と山本は軽い恐怖をおぼえる。

ゾクツ（こいつ…） （「やっかいなのにつかまったぞ…」）

そして、その場に何も知らない綱吉が入ってきた。

「へー はじめて入るよ応接室なんて」

山本が叫ぶ 「まで ツナ!!」 「え?」

ガツ!! 「一匹ひき」

そう言いながら ヒバリは 綱吉の左頬にトンファーを叩きつける。

ドザアツ トンファーを叩きつけられた綱吉は部屋の窓ぎわまで飛んでい

く

「のやろお!!?」 バツ 「ぶっ殺す!!」

獄寺は攻撃をしかけようとする

が、ダイナマイトに火を着ける前にヒバリに攻撃される

ガツ!! 「2匹ひき」

「てめえ…!!?!」 友達がやられて山本は怒る

チャキ…ン ヒバリは2本目のトンファーを装備し 山本に攻撃する

ビュ ビュビュ ビュ バツ 山本はそれを避けるが

「ケガでもしたのかい? 右手をかばってるな」

「!」

「当たり前」ドツ!!

ドザツ!

「3匹<sup>びき</sup>」

山本は蹴りをくらい、壁に頭を打ちつけ気を失った。

「あー いくつか……」綱吉が目を覚ました

「!」  
ごっつ……獄寺君!!? 山本!!?

なっなんで!!??」

「起きないよ 2人にはそういう攻撃をしたからね」

「え~~え~~っ!!?」

「それって……つまり……」

この人1人で2人を倒しちやったつてことー

!!?)

「ゆっくりしていきなよ 救急車は呼んであげるから」

「ちよっ それって!」

「え~~え~~ーっ ETCHAKUCHAPINTCHU!!?」

「そんなーっ なんでこんなことになってんのー ただみんなで応接室にきただ

けなののにー!!?)」

「!」 「んなー!!??」 そこに窓の外からリボーンが銃を構えながらやってきた。

「死ぬ」ズガン! リボーンが綱吉に死ぬ気弾を撃ち込んだ。

モコツ バカッ! 「うおおおっ!!」 死ぬ気でおまえを倒す!!!」

死ぬ気タイムになり 額に<sup>だいたい</sup>橙色の炎が灯<sup>とも</sup>り 白目、パンツ1枚の姿になった綱吉

がヒバリに殴りかかる。

ビュッ！　だが　その攻撃は避けられ、カウンターで顎あごに攻撃をくらう

「何それ？　ギャグ？」

ガッ！！　ドッ　綱吉は倒れてしまう

「アゴ割れちやつたかな。　さーて　あの2人も救急車にのせてもらえるぐら

い　グチャグチャにしくちやね。」

ぐぐ…　「ん？」　「まだまだあ!!!」　ゴッ！！　綱吉

は起き上がりヒバリに殴りかかった

ピヨーン　パシッ　レオンが綱吉の手元に飛んでいき　むによりスリツパに変身

する

「タワケが!!!」　パカアン!!!　スリツパで思いつきりヒバリの頭を叩く

フラ　フラ…「……」

「ねえ…殺していい？」　ヒバリから不穏な気配を感じたとき、

「そこまでだ」リボーンが声をかけた

「やつぱつえーな　おまえ」

「君が何者かは知らないけど、　僕、今　イラついてるんだ。」

「横になってまっててくれる。」

ヒバリがリボーンに攻撃する。

だが… キインツ!

その攻撃は リボーンの持つ十手じってに防がれる

「ワオ すばらしいね君」

リボーンはサングラスをかけ 爆弾を取り出し

「おひらきだぞ」チヂチヂ「!!?」

ドガアン!!! 爆弾は爆発し、応接室からは黒煙が上がる。

綱吉たちはその隙に応接室から脱出した。

## 浮雲 14

ヒバリスィde

応接室にあるソファアの背凭せもたれれに腰をおろしていると足音が聞こえ、扉が開けられた。

ガチャ 「へへ　　こない部屋があるとはねー！」

（「来たか…」）「君　誰？」

「なんだあいつ？」「獄寺　待て…」

（「警戒してるな。この状況　少し楽しい」）

「風紀委員長の前ではタバコ消してくれる？　　ま、どちらにせよだだでは帰さない

けど」

「!!　　んだとてめー！」　　獄寺がヒバリに近づく

「消せ」　　ビュッ

トンファアを振るい、獄寺が啞えていたタバコを真つ二つにする

バツ！　　「なんだこいつ!!？」

獄寺は危険を感じたのか後ろにさがった。

(「反応するのも さがるのも遅いな…」)

「僕は弱くて群れる草食動物が嫌いだ 視界に入ると、咬み殺したくなる。」

2人に向けて軽く殺気を放つ

(「これだけでビビるんだからな…」)

その場に何も知らない沢田綱吉が入ってきた。

「へー はじめて入るよ応接室なんて」

山本武が叫ぶ 「まて ツナ!!」 「え?」

(「飛んで火に入る夏の虫」)

ガッ!! 「一匹<sup>びき</sup>」 そう言いながら 綱吉の左頬にトンファーを叩きつけ

る。

ドザアツ トンファーを叩きつけられた沢田綱吉は部屋の窓ぎわまで飛んでいっ

た。

「のやろお!!?」 バツ 「ぶっ殺す!!」

獄寺隼人は攻撃をしかけようとしてきた。

ダイナマイトに火を着けられる前に攻撃する

ガッ!! 「2匹<sup>ひき</sup>」

「てめえ…!!?!」 山本武が怒る

チャキ…ン 2本目のトンファーを装備し、山本武に攻撃する。

ビュ ビュビュ ビュ バツ 山本はそれらを避けるが

「ケガでもしたのかい？ 右手をかばってるな」

「！」

「当たり前 (右足の蹴り!!?)」ドツ!! ドザツ!! 「3匹<sup>びつ</sup>」 山本武は

蹴りをくらい吹き飛び、壁に頭を打ちつけ気を失った。

「あー いつつ…」 沢田綱吉が目を覚ました

「！」 ごっ…獄寺君!!? 山本!!? なっなんで!!??」

「起きないよ 2人にはそういう攻撃をしたからね」 「え~~ん~~っ!!?」

「ゆっくりしていきなよ 救急車は呼んであげるから」

「ちよっ それって！」

するとそこに、窓の外からリボーンが銃を構えながら現れた。

「！」「んなー!!?」 (「流石最強の赤ん坊 気配に気がつけなかった。」)

「死ぬ」ズガン！ リボーンが沢田綱吉に死ぬ気弾を撃ち込んだ

モコツ バカッ！ 「うおおおおっ!! 死ぬ気でおまえを倒す!!!」

死ぬ気タイムになり 額に橙<sup>だんだいろう</sup>色の炎が灯<sup>とも</sup>り 白目、パンツ1枚の姿になった沢田

綱吉が殴りかかってきた。



ビュッ！ その攻撃を避け カウンターで顎あごに攻撃をする。

「何それ？ ギャグ？」

ガッ！！ ドツ 沢田綱吉は倒れる。

「アゴ割れちやつたかな。 さーて あの2人も救急車にのせてもらえるぐらい グチャグチャにしくちやね。」

ぐぐ… 「ん？」 「まだまだあ！！」 ゴッ！！ 沢田綱

吉は起き上がり殴りかかってきた。

ピヨーン パシッ レオンが沢田綱吉の手元に飛んでいき むによゝスリッパに変身する。

「タワケが!!!」 パカアン!!! スリッパで思いつきり頭を叩かれた。

フラ フラ… 「……………」

「ねえ……………(本気で)殺していい？」

本気で殺そうかと思ったとき、

「そこまでだ」リボーンが声をかけてきた。

「やつぱつえーな おまえ」

(「リボーン…」君が何者かは知らないけど、 僕、今 イラついてるんだ。)

「横になってまっててくれる。」リボーンにトンファーで攻撃する。

だが： キインツ！

その攻撃は リボーンの持つ十手じってによって防がれた。

「ワオ すばらしいね君」

リボーンはサングラスをかけ 爆弾を取り出し

「おひらきだぞ」チヂチヂ「!!? (忘れてた!!?)」

ドガアン!!! 爆弾は爆発し、応接室からは黒煙が上がる。

+++++

フィ〜 あつぶねえ〜 イラついて少しの間 我を忘れてた。

ここは風紀委員会室、応接室とは別にある風紀委員会が使用する部屋〔生徒会室的なもの〕

応接室はしばらく使いものになりそうもないな・・・そうだ、最後はこう言うんだっ  
たか：

窓辺に近づき左肘を机につき、顎を左手のひらに置き、流し目で外を見ながら、

「あの赤ん坊 また会いたいな」

## 浮雲 15

ボンゴレ10代組との初邂逅が無事( )に終わり、次の接触は体育祭の棒倒しで、というところで 原作開始してからの俺が知ることができた出来事を簡単に言うと、

綱吉パンイチ告白↓綱吉vs持田↓球技大会↓根津銅八郎解任↓山本武自殺騒ぎ↓  
夏休み開始↓学校再開

という感じかな。

原作開始から「大きな音が」と言う報告が、風紀委員会に多く寄せられはじめた。

(学校を傷つけられてると思うと気分が悪い・・・ グラウンドが崩壊した時とかさあ

・・・)

ああ、草壁副委員長も、とてもとても頑張ってくれている。彼もこれからどんどん巻き込まれていくんだなあ

じゃ、体育祭までカッ！

+++++

ここ並盛中学体育祭では、縦割りでつくられたA・B・C組の熱き戦いが繰り広げられていた。

1年生Ⅱ A組 B組 C組

2年生Ⅱ A組 B組 C組

3年生Ⅱ A組 B組 C組

合同Ⅱ A組 v s B組 v s C組

俺こと雲雀恭弥は体育祭に参加せず、並盛町の見回りをしていた。騒がしいのは嫌いだ。

時は体育祭のお昼休み

みーどーり たなーびくー なーみーもーりのー

携帯電話がなった。相手は風紀委員のメンバーだ。

ピッ「なに？」

『すみません、体育祭の棒倒しに問題がおきてしまいました、B組C組の総大将がA組総大将の策略によって棒倒しに参加できる状態ではなくなりました、今各チームの3年生代表を集めて審議をおこなっているのですが、』

「そう、A組の総大将って誰？」

『1年の沢田ツナと言うそうです。』

「ツナ？・・・僕も今 学校に戻るよ。」

『はい わかりました、お願いします。』 ピツ

（災難だね沢田綱吉、さすが主人公

れていないから さっさと向かおう）

ここから並ん中までは それほど離

+++++

スピーカーから声が流れる。

《おまたせしました。 棒倒しの審議の結果が出ました。

各代表の話し合いによ

り、今年の棒倒しは A組対B・C合同チームとします！》

《男子は全員 棒倒しの準備をしてください》

「B・C連合の総大将 誰にする？」「サッカー部の坂田だろ？」「レスリング部の川崎も

強いぞ」「ー！」

「僕がやるよ。」

ザワツ 「ヒバリさん!!」

（騒がしいな・・・ 群れるのは嫌いだけど これは仕方ないか、学校の行事だし）

周りに居る奴らを足場にして棒に登っていく

ドカ ドガツ！ 「ぎゃ！」 「ぐふっ」

「あつ 制服のままでっ」「うわああつ！」

ガン！ガン！ガン！！？

気に留めずに登っていく

バサアツ

頂上にたどり着き学ランが風にたなびく

「向こうの総大将とあいまみえれば赤ん坊に会えるかも知れないからね」

「(そうだ) 倒さないでね」

ビクッ！！

「「はいいい!!!」

「」

《それでは棒倒しを開始します。位置についてください！》

ワーワーワーワー

《用意！！？》

開始！！

《 棒倒しが始まった。》

オオオオオオオオ！

絞め技

掴み技

殴るのも髪を引っ張るのも

アリな取っ組み合い。

人数の差でA組が不利なのは 火を見るよりも明らかで、A組の総大将 沢田綱吉が蹴られ殴られ、棒が倒れそうになったその時に、

ズガン！

最近耳に入る事が多くなってきた音が聞こえた。

「空中復活！！」

沢田綱吉は 死ぬ気タイムになり、額に炎が灯りパンイチに。

死ぬ気タイムになった沢田綱吉は 人の上をピョンピョンと 飛び移りながら B・C 連合の棒に向かって行く。

途中、笹川了平・獄寺隼人・山本武が騎馬きばになり、その騎馬に沢田綱吉が乗りこむ。

「ゆけー！ 目指すは総大将!!」 うおおおおおお!! ドガ！ドガ！ドガ！

近づく者を吹き飛ばしながらどんどん どんどん進んで行く

「ありやあ 重戦車じゅうせんしゃだ!!?」「あんなの止められない!!」 連合組は弱音を吐く

「そこなくつちや（一般人との力の差が激しいなあ。俺もこれぐらい簡単に出来るがな、吹き飛ばすくらい簡単にできるがな。）」

まだまだ離れている実力差に少しがっかり気味な俺。

騎馬に動きがあった（「あ、仲違いなかつがしてる」）

獄寺隼人と、笹川了平がぶつかり合い、騎馬が崩れてしまった。

しーん （一）…… （二） 予想外の結果にあたりが静まりかえる。

勝負は決した。A組の自滅

敗軍の大将が敵陣のど真ん中に居て、ただで帰れはしなかった。

棒倒しの最後は乱闘で終わった ……

俺は白けて  
そのまま帰った。



## 浮雲 16

体育祭から数週間後の日曜日 雲雀の携帯電話に、非通知で、一通の電話がかかってきた。

みーどりたなーびくーなみもーりのー

ピッ 『もしもし オレだぞ』 「赤ん坊かい？ 僕になにかようかな？」

かかってきた電話はリボンからだった。

『取り引きしねーか？』 「取り引き？ 内容は？」

『今、ツナの家には死体があるんだが、それを見つからないように処理して、情報操作して殺し自体を無かったようにしてほしいんだぞ』

「・・・(原作か…) ふうん 対価は？」 『そっちで決めていいぞ』

「じゃ、いまは貸しーつって事でいいよ」 『わかったぞ』

「それじゃあ 今から向かうよ。」

『ああ、待ってるぞ』

ピッ 電話をきった。

どうやって電話番号を知ったかは気にするべからずつかか…

確か、ボンゴレの特殊工員・殺され屋のモレッティだったか？ 使う技はアツさディょうオなら 自分の意志で心臓を止めて仮死状態になる。つまりは死んだフリ。マフィアの世界では顔を変えて影武者要員として重宝するだろうな。まあそれはいい、沢田家はここから少し離れてるからバイクに乗って行こうか。雲雀は、バイク、スズキ・カタナに乗って沢田家に向かつて行った。

ヴオオオオン!!

+++++

ヴオオオオン!! キキツ!

沢田家の前にバイクを止める。

バイクから降りて扉に足をかけ家の一階の屋根に飛び乗り綱吉の部屋の窓を開け、声をかける。

ガラツ「やあ」「ヒバリー!!!」

「お、三浦ハルだ、初めて会うな。綱吉に??な天然少女だったか。」

「今日は君達と遊ぶためにきたわけじゃないんだ。赤ん坊に貸しを作りにきたんだ。ま、取り引きだね。」

「待ってたぞヒバリ」

ゴロ：… 死体を足蹴にする。

「ふうん やるじゃないか、心臓を一発だ。（本当に凄いな、これが死んだフリだなんて… 死んだフリだと知っていても本物に見える…）」

「うん、この死体は僕が処理してもいいよ。」

「なっ!!はあく!!? 何言ってるの!!?」

「死体を見つからないように消して 殺し自体をを無かったことにしてくれるんだぞ。」

「いろんな意味でマズいよそれは!!」

「じゃあ あとで風紀委員の人間よこすよ。」

「風紀委員会でもみ消してんの〜!!?」

「(しばらく来ることはないか) またね」

シユツ 窓から飛び降りて帰える。

「いや! !ちよつ! ! あの!!?」

綱吉が窓から顔を出す。

「10代目!!? どいてください!!?」

ねえ!!」

あいつだけは やり返さねーと気が済ま

ビシユツ! !「果てろ!!」

獄寺がダイナマイトを投げてきた。

「そう死に急ぐなよ」

チャキンツ仕込みトンファーを取り出し、ヒュツ！ダイナマイトを全て弾き返す。

「ゲ」「うそーっ!!」

!!!!  
ドガン!!!!

室内でダイナマイトが爆発した。

（「よく死なねーよなこれで、リボンから電話かかってくるだろうが、もうやることねーから かーえろ」）

## 浮雲 17

ちわつス！ ベットの从上からこんにちは

いやさ、原作力つて時よりすごい力を発揮するとうか…

今 俺がいる場所は並盛中央病院、風邪をこじらせて入院中なのさ。。。

今まで風邪をひいたことはなかったし、風邪をひく要因は何もなかったと思うんだけど、いつのまにか入院してた、入院するまでの記憶がまったくないというね… 何があつたと言いたい。

え？これも原作力のせい？怖

ま、俺が風邪をこじらして入院した。という事は、綱吉が足を骨折して入院することになるということで、退屈しのぎにゲームをしながら待ってたら病院中が騒がしくなつてきて、看護師を呼び止め、理由はほぼわかっていたけど聞いてみた。

そしたら「新しく入ってきた患者が騒ぎ過ぎるから退院してもらおうとしてた」と言つてた。

俺が居る病室に連れてきてと言つておいたから もうすぐ来ると思う。

ああ、ほら 来たみたいだ。

~~~~~

綱吉 side

ある患者のご好意？でその人と相部屋になる事で退院をまぬがれた綱吉
看護師主任に案内され、その人の病室に行く

「ここです。では私は……これで……」？」

病室に着いた途端 そそくさと戻って行った看護師主任に疑問を持ちながら 部屋
の中を見る。

「やあ」「ヒバリさん!!」

その病室に居たのは予想もしていなかった人物、雲雀恭弥だった。

「うそー!!?」 え!!?」 なんで病院に!!?」

「カゼをこじらせてね。 退屈しのぎにゲームをしていたんだがみんな弱くて……
ベットに座っているヒバリの足下には 人が3人重なり合って倒れている。」

「んなー!!?」 (何があつたのー!!?)」

「相部屋になった人にはゲームに参加してもらってるんだよ。ルールは簡単だ、僕が
寝ている間に物音をたてたら」

「咬み殺す」ヒバリさんはトンファーを構える。

「ガンン！」一方的ーっ！　!??　　ってか病院じゃありえない状況だー!!!（この部屋ムリ!!　　ここにいるんだったら家の方がマシー!!?）」

「あ、あの僕　もうすつかりよくなつたんで、たつ…退院します!!?」
 そう言い、後ずさつたが、

「だめだよ　医師の許可がなくちゃ」　!?!?」

突然、後ろから声をかけられ驚いてしまった。

「やあ　院長」「え×××　いんちよー!!?」

「こうして安心して病院を運営できるのもヒバリ君のおかげ、生け贄でもなんでも　な　なりとお申しつてください」

院長?は、ヒバリさんに向かって頭を下げた。

「ガンン!」（「病院ぐるみ!!!」）

ふあく…「じゃあ　そろそろ寝るよ。ちなみに僕は　葉が落ちる音でも目を覚ますから。」

「なっ!」

「では失礼します」ガラガラ　ピシヤッ

院長が部屋から出て行ってしまった。

「えっ うそ!!? ゲームスタート?!? (マジスカ〜?!?)」

だが、ゲームが始まってすぐ、

ガラ… 「?」

扉が開く音がし、見てみると そこにいたのは、

ニツコリ(「イーピン?!?」) と うるさい奴 来たー!!?! 「イーピン&ランボ

だった。

「ガハ…んむむ」うるさくするだろうと思ひランボの口をふさぐ

(「しー…!!」 声 出すなー!!?!)」

(「!」 OKOK)「?」

「どかん?」ランボがグレネードのピンを抜く(「ちがーう!!」)

ランボを連れ 急いで病室の外へ、病室から離れた窓からグレネードを投げ捨てる。

!!ドガァン!!

「おまえはオレを殺す気かー!!」 今部屋でさわぐと恐ろしいことになるんだぞー

!!「?」

「あそこにはおつかねー人がいて…?!?」

病室の入り口に目をやると イーピン部屋の中を見ていた。

「イーピンの奴 なに立ちつくしてんだ？」

そう思っていたら、イーピンがこちらを振り向いた。

「!! 筒子ピンズ時じげん限ちようばく超爆のカウントダウンだー!!」

「うそ なんでー!?」 イーピンが照れるような事は何も・・・ はっ まさか

… ヒバリさんに惚れてるー!!」

イーピンの目はハートになっていた。

（「あー もー もー」）

今度はイーピンを窓から投げる。

「バカー!!」
!!!!ドオオオオオ!!!!

パラ パラ… パチ

結局 魔ヒバリさんが目王を覚ましボコられるはめになった綱吉だった。

浮雲 18

オパリオ!

今日は 2月14日 バレンタインデー
学校生活の中で風紀が乱れる要因
のひとつ

この日も学校にチョコレートやお菓子を持ってきてはいけないという規則を作っても良かったんだけど……と言うか、俺が風紀委員会を創った年にその規則も作って、その規則を遵守させようと思っただけだよ

女子生徒が徒党を組んで風紀委員会に抗議しに来たんだよな……

あの時の女子生徒達の目の中には 一種の狂気を見たよ……ハハツ……

その抗議期間中 風紀が乱れまくって大変だった。

(何故、こういう風に風紀が乱れたかは想像にお任せするよ。GKガクBRブル)

そんな事があつてからは、チョコレートを持ち込みの禁止という規則を廃止する事になった。

一応、俺も毎年 バレンタインデーには 女子生徒達からチョコレートを渡されるが、直接手渡しするのは禁止、というルールが女子生徒の間で作られているそうだ。

チヨコレートはファンクラブが一旦集めて箱に入れ、応接室の前に置く事になってる。

(他にも幾つかルールがあるそうだが、俺には関係ない。そして、ファンクラブは草壁副委員長などのもあるみたいだ：全部でいくつのファンクラブがあるんだろ：)

だけどもまあ、俺は学校で渡されるチヨコレートを一度も開封したり、口にした事が無い、触れたことも無いな。

そんな、大して親しくも、話したことも、多分、ない奴の、安全も確認されていない、何が入ってるかわからないものなんか口にするわけないだろ。

食べないチヨコレートは処分しても良いんだけど、食べられる食べ物をそのまま捨てたりしたら、もつたいたいばあ、や、もつたいたいおばけが出現する可能性があるから出来なくて、

だから、チヨコレートは、草壁副委員長以外の風紀委員が持ち帰ったりしてた。

(草壁副委員長は自らの意思でチヨコレートを食べていない。べつに俺はそんな事を強制するつもりはないしな)

前に、俺に渡されたチヨコレートを食べた風紀委員の奴がヤバイ感じに泡吹いてぶつ倒れ、救急車で運ばれていった事があって、それからは、食べれる食べれないを認してからにしてるようだ。

(そんな事するなら食べなければいいじゃんか、そこまでしてチヨコレートが食べたい

のか：食べたいんだな…。俺も、前だったら欲しいとは思ったはず…

俺は毎年 草壁副委員長やお手伝いさんにチョコ系のお菓子を貰ったりしている。

というか、べつに バレンタインデーではない日にもその2人からはお菓子類を貰ってるから これといって特別な日という認識はないんだよね。

そうだ、話は変わるけど 生活パターンが変わっているからその報告おぼ

前のパターンは、起床↓朝食食べる↓トンファ―持つて並盛町の見回り（群が居たら咬み殺す）↓家に帰って昼食↓読書や勉強をする↓おやつを食べる↓トンファ―持つて並盛町の見回り（群が居たら咬み殺す）↓家に帰って晩ご飯↓お風呂入る↓読書や勉強をする↓就寝

だったけど、今は、起床↓朝食食べる↓早めに家を出て見回りをしながら学校に登校↓風紀委員会の仕事、並盛町の見回り↓ 昼休み昼食、読書や勉強をする↓風紀委員会の仕事、並盛町の見回り↓家に帰って晩ご飯↓お風呂入る↓読書や勉強をする↓就寝
あまり前と変わってないね。 風紀委員会の仕事は俺に回ってくるのが少ないから楽で良い

（草壁副委員長が色々やってくれているみたいだ。ま、暇な俺は気づかれないように書

類などを横から搔っさらってこなしている。
紀委員の中で広まっているそうなの……（笑）

） 応接室には妖精が出るといふ噂が風

浮雲 19

今日一日は 晴れの日 日曜日！

俺は雪の積もっている中、何故か たまつてる風紀委員の仕事を片付けに学校に向かっている。

(ちよくちよく かたずけてるはずなんだけどな)

あ、今 学校の校庭に『星の王子が見てきた動物 2万2126匹のうち 凶暴性でかさ ともに1位』のスポンが見えたから少し接触してくるよ。

~~~~~

特殊雪合戦終盤の沢田綱吉 side

ブイイイ ε || ε || ε || ε || ε || ε ! ( , ω ) !

「あ!! いた! レオンTURBO!!?」

勝つために レオンを追いかける。

「こんなんで勝っちゃっていいのにな」

後で恨まれないかな…?」と考えな

がら走っていたら

ズルっ！「うわっ！」

雪で足を滑らせ転んでしまう 「いででくっ!!」

と、そこで、 ぼしっ レオンが誰かにつかまる。

「何これ？ あと そのでかいカメ」

「ヒバリさん!!」

レオンをつかまえたのはヒバリさんだった。

「いや、あの、（なんでヒバリさんが日曜日にくっ!）」

「せっかくの雪だ、雪合戦でもしようかとね。」

（「ヒバリさんもくっ!?!」）

「といつても、群れる標的に一方的にぶつけるんだけど。」

（「なんでこの人捕まんないのー!?!」）

「ここで会ったのも何かの縁だ。今日は君を標的にしようかな。」

そう言つてヒバリさんは、まん丸になったレオンを構える。レオンもヒバリさんの

理不尽さがわかつたのか 喉がなり 冷や汗もかいている。

「え! そ…そんなつ つか レオン投げてくんのく!!?!」

ビッ! ヒバリさんが レオンを投げようとする。

「ひいつ!」 バッ 防御体制をとるが一向に衝撃がこない。

「……………?」

「と、思ったけど風紀委員の仕事がたまってる。またね。」

ヒバリさんはレオンを放り捨ててどこかに行った。

「た…助かった… ん?無意識に何かをタテに…」

タテにしたもの それは残り三筒<sup>サンビン</sup>状態のイーピンだった。「うそー!」

「イーピン ヒバリさんに惚れてるんだった!! ああ!爆発する!!あと二筒<sup>リヤンビン</sup>しかー!」

カチンツ「あ」<sup>イーピン</sup>一筒に変わり

ドオオオオオ… 爆発

沢田ツナ 行方不明により リタイア

雪合戦 リボーン 優勝

+++++

雲雀恭弥 side

ブイイイ ε||ε||ε||ε||ε||ε! ( , ω , ) !



「あ!! いた! レオンTURBO!!?」

レオンを追いかけ沢田綱吉が近づいてきた。

「こんなんじゃ勝っちゃつていいのかな」 後で恨まれないかな…?」

（「気配は消してないんだがな・・・ 視界に入っているはずだろうに 何故気づかない  
…」）

ズルつ!「うわっ!」

沢田綱吉は雪に足をとられ転ぶ 「いでで〜っ!!」

ばしっ 足元に来たレオンを捕まえる。

「何これ? あと そのでかいカメ(スッポンだけど)」

「ヒバリさん!! いや あの」

沢田綱吉は青ざめている。

「せっかくの雪だ。雪合戦でもしようかとね。(自分で言つてあれだけど どんな  
言い訳だよ)」

「といつても、群れる標的に一方的にぶつけるんだけど(嘘つきました。 そんな事  
一度もしたことないよ。)」

「ここで会つたのも何かの縁だ。今日は君を標的にしようかな。(俺 これ知ってる  
理不尽って言うんだよね。)」

そう言った後に　いつのまにか丸型になっていたレオンを沢田綱吉に投げようと思える。

「えー！　　そ…そんなつ　　つてか　レオン投げてくんの…!!??」

ビツ！　レオンを投げようと　腕を動かす。

「ひいつー！」　バツ　　沢田綱吉は防御体制をとる。

だが投げようとした腕が動かなくなる。

（「！…　原作力が働いたか、投げられないな…。あと、イーピン何処から出てきたし…

」）

「……………?」

沢田綱吉は衝撃がこないことに気づいた。

（「ハア　原作力めんどい」）

「と、思ったけど　風紀委員の仕事がたまってる。　またね。」

レオンを放り捨てて応接室に向かう。

・・・何か忘れてる気がsドオオオオオ…

爆発



## 浮雲 20

♪ 桜 咲く 舞い落ちる 何も無い ぼくの手の上

儂くて 優しくて 壊れそう きみみたいな花 ♪

今日は、花見をしなれば!! という使命感に追われ お花見に来た 俺こと雲雀

恭弥デス。

今は風紀委員に桜並木一帯の花見場所を全て占領させ、静かな中で花見中。

今回以降、桜をゆつくり見ることができなくなるかもしれないからさ、

本当に残念だ： 桜は好きな方だから。 散っている時が1番ね・・・フフ

フ

~~~~~

雲雀恭弥 side

桜見中 ガヤガヤ

声が聞こえてきた。

「ハア、厄災どもが来たみたいだね。」

声が聞こえる方に向かうと 沢田綱吉、獄寺隼人、山本武の後ろ姿を見つけた。
 どうやら 風紀委員（モブ）がやられた後みたいだ。
 人に声をかける。

桜の木に背を預け 3

「何やら騒がしいと思えば君達か。」

3人がこちらに気づき 沢田綱吉が俺の名を叫ぶ

「ヒバリさん!!」 あ、この人 風紀委員だったんだ!」

「（今気づいたのか…）僕は 群れる人間を見ずに桜を楽しみたいからね。 彼に追いついて貰っていたんだ。」

そう言いながらモブに近づく

「でも、君は役に立たないね。あとはいいよ、自分でやるから」

「い…委員長」モブは顔を青ざめさせ震えながら俺のことを見上げている。

（「いつも通りにやるだけだ。」）

「弱虫は、土にかえれよ。」

ガッ! 「がはっ」 トンファーで殴りつける。

「! 仲間を」

トンファーに血が付着してしまった。

「見てのとおり、僕は人の上に立つのが苦手なようですね。」

しかばね
 屍の上に立つてる方

が落ちつくよ。(本当に：落ち着くよ。)

そう 無表情で言うヒバリに 3人は軽い恐怖をおぼえたようだ。

するとそこに CV勝矢かつやの声が聞こえてきた。

「いやー絶景！絶景！ 花見つてのはいいいねー♪ つかーくやだねー男ばつ
かっ！」

桜の木の陰からデロンデロンに酔っぱらったシャマルが現れた。

(「雲雀が桜を嫌いになる原因！」)

「Dr. シャマル！」「まだいやがったのか!!? このやぶ医者 ヘンタイ！ スケコ

マシー！」

「オレが呼んだんだ。」「リボンも！」

桜の木の枝の上に、花咲爺さんの変装をしたリボンも現れた。

「赤ん坊 会えて嬉しいよ。(そういえば、アッテイー才使いが来た時に作ろうとした貸し、あれ 無しになったんだよね。わかってはいたけどさ、)」

「オレ達も花見がしてーんだ。 どーだヒバリ、花見の場所をかけてツナが勝負

すると言ってるぞ」

「なっ なんでオレの名前出してんだよー!!?」

「ゲーム… いいよ、どーせ 皆みんなつぶすつもりだったしね。じゃあ、君達三人とそれぞ

れサシで勝負しよう。 お互いヒザをついたら負けだ。」

「ええ！それってケンカ!?？」

沢田綱吉達が色々話しているのを聞き流していると、シヤマルがこちらに近づき話しかけてきた。

「へー おめーが暴れん坊主か、おまえ姉ちゃんいる?」

「(酒臭い)消えろ」バキッ 「ふぎやーっ!!?」

トンファーでシヤマルを殴りつける。

そして、 プーン(「!」)

俺は小さな羽音に気づいた。

(「トライデントモスキート…桜クラ病…。か、かかりたくねえ…」)

「てめーだけはぶつとばす!!」

獄寺隼人がダイナマイトを持ちながらこちらへ向かってきた。

「いつもまつすぐだね。わかりやすい (あれ?今 ひとりぼっちの 歌が頭をよぎったな)」

ビッ! トンファーを上から叩きつけるように攻撃するが、

避けられる。

「!」 獄寺隼人はトンファーを避けながら、俺の周囲にダイナマイトをバラまく。

「果てな」!!ズガアン!!

ダイナマイトが爆発する。

俺はその爆風をトンフアーで防ぐ。

(これで完全に防げるのが不思議なんだよな…)

「で…?」 続きはないの?」

声をかけトンフアーを使い煙をちらす。

「なっ トンフアーで爆風を!?」

「二度と花見をできなくしてあげよう(できなくなるのは俺だけども…言つて悲しくなった…)

獄寺隼人に走り近づき、勢いよくトンフアーで攻撃をする。

獄寺隼人はその攻撃をしゃがみこむことによつて避ける。

「獄寺はヒザをついた。 ストツプだ」

「やだよ」

リボンが止めるが、俺は攻撃することをやめない。

続けて獄寺隼人に攻撃しようとすると、 キーン!

「次、オレな」 「山本!!」

山本武がその攻撃を刀で防いでくる。

「……………」（防がれた：力が入らなくなってきている。 原作力か、病気のせいかな…）」

「これならやりあえそーだな」「ふうん」

防がれたトンファーを押し返す。

「どーかな？」攻撃を続け 打ち合う

ギツ！ 山本武の攻撃をトンファーで防ぐ

「（ここかな？） 僕の武器にはまだ秘密があつてね。」

「？ 秘密…!?？」

「（桜を見に行く時はこのトンファーも持ち運ぶようにしてるんだよね。）」

ガキ！ 仕込み鉤を使用し刀をとらえ、 ブンツッ！ 勢いよく押し飛ば

す。

「ぐわっ」

仕込み鉤を元に戻す。（俺は山本武を倒した。 経験値は貰えなかった。

よわーい」

「デイスるな！」

ズガン！！ 銃声が聞こえた。

「復^{リ・ボーン}活死ぬ気でヒバリを倒す！！」

死ぬ気タイムになった沢田綱吉が、「はたき」に姿を変えたレオンで攻撃を仕掛けてきた。

それをトンファーで防ぐ。

バチッ！ぽふっ

「うおお!!」

沢田綱吉は大声をあげながら 「はたき」で攻撃してくる。

「君は変わってるね。強かったり弱かったり。よくわからないから・・・殺してしまおう。」

激しく武器を打ち合う

バチ！バチ！バチ！ぽふぽふぽふ

互角に打ち

合い続ける。

(「一々 いちいち はたき 」の先端が当たってうざいんだが...) (

シユウウウウウ「い 」!!?」

5分が経ち 沢田綱吉の死ぬ気タイムが終わったが、かまわず攻撃する。

「わっ ちよっ まって!

ひいっ!」

どさっ! 「!」

(「・・・今か.....」)

俺は足の力が抜け、両ヒザを地につけてしまった。

「い 」!!?!

えー!!? うそっ!!? オレがやったの?!!?」

「イヤ俺は今のお前にやられるほど弱くない」

「ちがうぞ 奴の仕業だぞ」

「そうだぞ あの呑んだくれのせいだぞ」

「あ×××　　ふらつくんじゃあ×××」

ふらつきながらも立ち上がる。

「ヒバリさん！」

「約束は約束だ。　せいぜい桜を楽しむがいいさ（俺が楽しめなくなった桜をなああ

!!）」

フラフラフラ：　俺はふらつきながらその場を離れる。

「今日はもう家に帰ろう：桜が無い道はリサーチ済みだよ。」

浮雲 21

おはこんばんにちは！ さあ、新学期が始まったよ。

……俺、並中4年目だ……なんでだろ……なんでだろ……

なにしてんだろ……

ま、それは置いておくとして……

今日は新入生が入ってくる日 イコール 俺に逆らう者も入ってくるということだ、

今、俺の足下には咬み殺したばかりの肉塊が落ちてるいるんだよね。

今日みたいな風紀が乱れる日には、咬み殺したものを一旦集めてから救急車を呼ぶようにしてるのさ。

じゃ、これも運ぼうかな。

(この肉塊は、俺のお気に入りの場所を汚したから咬み殺した。)

~~~~~

運んでいる途中

「ちやおっス                   ヒバリ」 「！ (リポーン！)」 ピラミッド<sup>ホー</sup>パワーが現れた。

「君は？                   並中は関係者以外立ち入り禁止だよ (どうやって飛んでるんだこれ?)」

「それはわかるかつたぞ。                   だが、伝える事があるんだ。」

「伝える事? (の前に                   そのフワフワ浮いてるのが気になるんだけど。)」

「ああ、2年A組の沢田と内藤が風紀委員会に入りたいと言つてたんだぞ。」

「へえ、確かに聞いたよ。                   それだけなら僕はもう行くよ。これを捨てにいかない  
といけないからね。」

そう言つて持つている方の手を少し揺らし、その場から離れる。

(「読心術<sup>音</sup>が俺に効かなくてよかつたな」)

〃

「やあ」 少し歩いたところで沢田綱吉を見つけ、                   先程の聞いたこともあるので声  
をかける。

「ヒバリさんも3年…でしたっけ…?」 沢田綱吉は何故か、顔を青ざめさせながら聞いてくる。

「僕はいつでも自分の好きな学年だよ。」

ひきずっていたものを放り捨てながら答える。

（「俺って今年生だっけ？ 授業を受けた記憶ががg」）

「沢田ちゃん オレもバイト断つちつた！ せつかくなら一緒にいいもんね！」そう

言いながら内藤ロンシヤン<sup>バ</sup>がやってきた。

「きいたよ。君達 風紀委員に入りたいんだろ？（内藤ロンシヤン…心に闇<sup>病み</sup>を抱えて  
そうなんだよな…）」

「えー！ 誰がそんなことをー！?!？」

「彼に聞いたよ。」

そう言いながら、まだ後ろに居たりポーンに指をさす。

「おつ いいじゃん！いいじゃん！ やろーよ 沢田ちゃん！ いやー どもども！

トマゾ8代目 内藤ロンシヤンです！」

「なにいつてんの！ オレはいいよ!!？」

（「うるさい奴だな… あ！ そういえば…」）

！ズガン!! 銃声

キイン!!? （「…撃たれるんだったな、」）

嘆き弾を防いだ。

「何のマネだい？　殺し合いするなら気軽に言ってくればいいのに。」

獲物を見る目で2人を見る。

！ズガン!!　また銃声　内藤ロンシャンが倒れる。

「ロンシャン」

モコツ　「もうお先まつ暗コゲ：過去もまつ暗コゲ：」

嘆き弾を撃たれ、なげき小僧を額から出した内藤ロンシャンが体育座りしながら現れた。

「テルミ!!?　なぜ着信拒否なんだ!!!うおおお」

「うん　いい鳴き声だ。　すぐく咬み殺したくなってきたよ。」　そう言い　トンファーを用意する。

！ズガン!!またもや銃声

次は　沢田綱吉が倒れる。

「オレにまつ暗コゲとか：　どーでもいいよ：　煮るなり焼くなりどーにでもす

ればいい：」

「!??」　「これは確か、嘆きの境地だったか：　死ぬ気のゼロ地点に少し似て

る：…かな?」

「人生　ダメがこんで嘆くことが多すぎると：　どーでもよくなる……」

「……死を覚悟した人間を倒すことほど、つまらないものはない……」  
「とは思わない。」      ぎや    ぐはっ！      ボコリまくる。

（「うっせーな      日常編はもういいんだよ！ さつさと黒曜編に行けやゴラ

！」）



## 浮雲 22

ちよりつス！

季節は早々に夏へと変わり、俺は暇しているところだ：

今、俺は綱吉が修行した崖の上にいる。

いや、ホントついさつきまで崖の下にいて、久しぶりに登ってみようという考えのもと崖登りを開始したんだけど・・・本気を出さずにこの崖を1分で登ってしまったね、：、  
「そ、そんなに鍛えたつもりはありませーん!!」

ハイスペック? そんな言葉で表せないだろこれは!!

何? 原作力で力がセーブされてしまうのに、これは意味がないだろーが!!

え? 原作終了したら暴れていいのか? このままだと俺、破壊神と化すよ?

うおおお!! 本っ気で暴れてえくくく!!

今までの生活でわかつたけど、俺も戦闘狂の気があるみたいなんだよな。。。

いずれ強い奴と戦うつてのを考えると、体がゾクゾクして気も高ぶって口角も少し上がってしまうんだよね。

そういう時は、咬み殺す対象を探しに出て、気を落ち着かせようとするけど、逆に不

燃焼になることの方が多いのな。

・・・思った・・・今の俺は確実に原作雲雀さんより強い、とてつもない差がある・・・  
 ・・・・あれ？俺が満足できる程 戦える奴っているのか？

原作も壊せないし・・・よし！考えないことにしよう。その時はその時だ。現実逃避ともいう。

こういう時は歌を歌う。 うん それが良い

「『ファミリア』

♪ ファミリア 限りある出会いの中で人生の一部の人

ファミリア 携帯の着信履歴をいつも埋めてくれる人

ファミリア 時にケンカして離れたり でもいつの間にかそばにいたり

ファミリア 何かあるとすぐ駆けつけてくれる人よ

♪ 理由もなく孤独だと思うのは

ひとりじゃないと感じるためにあなたがくれた気持ち

♪ 「

・・・歌って悲しくなっちゃった……

理由？ 理由はね

ファミリア 限りある出会いの中で人生の一部の人

(出会った奴「会話した奴」をほぼ咬み殺してる。)

ファミリア 携帯の着信履歴をいつも埋めてくれる人

(俺に電話してくるのは草壁副委員長が殆どだよ。偶に風紀委員が電話してくる)

ファミリア 時にケンカして離れたり でもいつの間にかそばにいたり

(ケンカはした事がないな。そばにいくるのは草壁副委員長が殆ど)

ファミリア 何かあるとすぐ駆けつけてくれる人よ

(連絡すれば草壁副委員長や風紀委員はすぐにくるよ)

♪ 理由もなく孤独だと思うのは

ひとりじやな

いと感じるためにあなたがくれた気持ち

(俺、憶えている中で両親に会ったことがない。俺 自身は孤独だとは思ってないよ。

草壁副委員長もいるしね。)

・・・く、草壁副委員長！

お前への好感度は高いぞ!!! うん!!

## 浮雲 23

ヨヨイノ ヨイ！ヨイ！

夏祭り 1日目飛ばして 2日目デス

2日目ってことで今日は綱吉達が祭りに来る日だったか。

やはり祭りと言えば ショバ代集めだよな!!

祭りはいつも2日連続で開催されるから、ショバ代は2日目に回収することにしてる。

俺がショバ代回収をしていなかった時期があるんだけど、その間もショバ代が回収されていたらしくて、俺が初めてショバ代回収をした時に出店の人達がコソコソしてたのが聞こえてき。

それが「今日から次期当主が回収に来るのか」とか言う内容で 『今日から』という言葉葉に疑問を持ちながらも ショバ代を全て回収し終えて家に帰ったんだ。

家に帰ったら食卓にメモと通帳が置いてあって、通帳の名前が 雲雀恭弥 って書いてあったから開いて金額を見たら思わず 「ワオ」 って出てしまうくらいの金額が記帳されていて、

メモの方には、

『恭弥様がお祭りのシヨバ代回収を行っていないなかった時に回収した分のお金と、雲雀家現当主にして 恭弥様のお父上にあたるお方から 恭弥様にお渡しするように命じられたお金を このメモと共に置いてある通帳に入れておきました。 そのお金は恭弥様のものになります。ご自由にお使い下さいませ。』

と、書いてあった。

うん、金はありがたかったよ。市販のパソコン買ったり、パソコンのパーツを買って自分で組み立てたり、トンファアの改造をするためのパーツを買うのに使ったり・・・でもね、親からの金は、何を今更って思ったね。

ま、感想はそれだけなんだけど、俺は 使えるものは何でも使うつもりだよ。

あれだね、雲雀恭弥のキャラソン『ひとりぼっちの運命』の歌詞に 「愛なんて知らない 愛シカタわからない」 っつのがあるんだけど、今ならわかるかもなこの意味。。。

けども、パラレルワールドは無数に、IFもしもの分だけあるから一概には言えないんだけどね。

ま、長々と話してるけどあれだ、俺はしばらく前に大金と パソコンを手に入れていたってことだね

じゃあそろそろ ショバ代回収に行きますか

~~~~~

夏祭り会場 ヒバリside

(「結構回収できたな」)

俺は今、ショバ代を回収しながら夏祭りを見ている。

(「お、綱吉達見つけ、ショバ代回収にまいりました」)

「ここらを取り締まってる連中に金を払うのが並盛の伝統らしいっす。ここはスジを通して払うつもりっす。」

(「ホウ、ならキチンと払ってもらおうか。」)

ザッ 「来た!」

「5万」 「ヒバリさん!!?」

「てめー 何しに来やがった!」

「まさか」「ショバ代って風紀委員にー!?!」

「活動費だよ。 払えないなら屋台をつぶす。」

そこに「待ってください!」

数軒隣の屋台から声が聞こえる。

「やっぱり払います！払いますから!!」

ドガツ！ガツ！バキツ!!？

そこでは実際にシヨバ代を払わなかった屋台が

つぶされている。

くく

「たしかに」沢田綱吉達からシヨバ代を回収し、その場から離れていった。

（「あとは、ひったくり犯達を咬み殺すだけか…」）

浮雲 24

そろそろかな？と、暫く時間が経った後、
ひったくり犯を咬み殺すために神社の方に向かう。

居た、これまた群れてらっしやる……

トンファーで、端に居るナイフを持った金髪男の側頭部を殴る。

バキッ!! 「うわ!!」

声に反応して 全員の視線が俺に集まる。

「うれしくて身震いするよ。」

トンファーに付いた血を振り落としながら

「うまそうな群れをみつけたと思ったら、追跡中のひったくり集団を大量捕獲」

「ヒバリさん!!」 沢田綱吉が名前を呼ぶ

「んだっ こいつは」 「並盛の風紀委員だ」

集団がざわめく

「 集金の手間がはぶけるよ。 君達がひったくってくれた金は風紀が全部いただく

」

「俺の所持金とは別で 委員会の金も必要だからな」

「ムカツクアホがもう一人。ちょうどいい、中坊一人しとめるために 柄の悪い後輩を呼び過ぎちまつてな。」

ゾロゾロ：ゾロゾロ：ゾロゾロ： と、周囲から様々な武器を持った奴らが集まってきた。

「やつら 力もてあましてんだわ。」

「何人いるのー!?」(「100くらいか?」)

集団のリーダーが叫ぶ

「加減はいらねえ!! そのいかれたガキもしめてやれ!!」

(「こー見ると、俺って知名度がまだ低いよな」)

ズガン!! いつも通りの銃声

「復活!!! 死ぬ気でケンカー!! オラア! 来やがれ!」

「余計だな(俺一人でも十分過ぎるくらいだ。)」

「たかが中坊二人だ! 一気に仕掛ける!!」

!ドガン! 神社の入り口で爆発が起こった。

「10代目!!?」 「助っ人とーじよー」

そこにいたのは、獄寺隼人と 山本武。

「気に入わねーガキどもがゾロゾロと」

「冗談じゃない ひったくった金は僕がもらう」

「なあ?」「やらん!」「当然っス」

・・・それじゃ、役者も揃ったところで、始めようか!!

「うわあ!!」「こいつら本当に中坊か!?!」

(「さっさと俺に・・・咬み殺されろおお!!」)

~~~~~

ある程度時間が経ち 不良どもを全て咬み殺した。

いつのまにか三人が居なくなっていたのに気がついた。と言っても 神社の裏に気

配があるから そこに居るんだろうけど

俺は後始末を風紀委員に任せ、始まった花火を見ながら家に帰った。

+++++

夏祭りが終わったから 次は漸く黒曜編に突入か…

・・・♪

♪羽根がない天使は ぼくに言った

家へと帰る 地図をなくした

非力なぼくは 絵筆を執って 乾いた絵の具に 水を注す

この目が光を失っても ぼくは描いてみせる

この手が力を失ってでも ぼくは描いてみせる . . . ♪

リボン Ⅱ 羽根がない天使

俺に的にあいつは天使より墮天使っていうかんじだな（スーツと 強さが目立つせい  
か？）

## 黒曜編

## 浮雲 25

並盛中学校前 雲雀side

「風紀委員だ!!?」「あそこにも…!」

沢田綱吉トリポーンが来た。

「そりゃあ あんな事件が多発してるんだ。ピリピリもするぞ」

「やっぱ不良同士のケンカなのかな…」

「ちがうよ」

的外れなことを言っている沢田綱吉に声をかける

「ヒバリさん!!」 「ちやおっス」

「いや…ボクは通学してるだけで…」

沢田綱吉は俺を見て顔を青ざめさせる。

「(何も知らない者からすれば)身に覚えのないイタズラだよ。もちろん、ふりかかる火の粉は元から絶<sup>た</sup>つけどね。(迷惑なんだよなあ。今回は俺、やられ役だし…)」

『緑くたなびく 並盛のく 大なく小なく 並ぐくいいく』電話だ…

ピッ 『委員長 草壁です。 3年A組の笹川了平がやられ、並盛中央病院に運ばれました。』

「・・・そう、わかったよ」ピッ

離れようとしていた沢田綱吉に話しかける。

「君の知り合いじゃなかったっけ。 笹川了平……やられたよ。」

「！ お兄さんが!!」

「今は並盛中央病院に居るみたいだよ。」

「わ、わかりました！ ありがとうございます!!」

沢田綱吉は病院へと走って行った。

・・・よくもまあ、俺の目の前で堂々と学校をサボれるものだね。

ま、それが仲間思いの沢田綱吉だからな。 俺はそろそろ、黒曜ヘルシーランド

に向かうとするか

くくくくくく

ハア・・やだなく行きたくないなーっと思ったら頭痛が!!　ウグツ  
ヤベ!  
行く!行くから!  
：そう考えると頭痛が治まった。

フウ・・・原作力が　痛みを与えてきやがった……。  
このやろう・・原作力、あとで絶対に咬み殺す……

！　黒曜ランド発見

骸が居るのはたしか、ポーリングができる所だよな、

+++++

雲雀 side

雑魚どもを咬み殺し、建物内に入る。

返り血を飛ばしすぎたな　……

パリ……

辺りにはガラス片が散乱している。

感じる気配は2つ、1つは手前に、もう1つは奥に

(「奥にある気配が骸だな。」)

手前にある気配が動く

「オラアア!!」

男が飛び出し、斧を振り下ろす。

(「遅いし大振り」)

斧を避け　トンファーを男の胴体にくらわせ、そのまま吹っ飛ばす。

ガシャーン！　男は　ガラスの壁を壊しながら吹っ飛んでいく

奥の部屋に進むと、ソファーに座っている人影が目に入る。

「やあ　(クフフのサンバ君)」

「よくなりましたね」

「ずいぶん探したよ。　君がイタズラの首謀者？」

「クフフ　そんなところですかね。　そして　君の町の新しい秩序」

「ねぼけてるの？　並盛に　二つ秩序はいらぬ」

「まったく同感です。僕がなるから君はいらぬ」

ジャキツ　ジャキツ　「それは叶わないよ」

トンファーの仕掛けを発動し、棘とげを出す。

「君はここで 咬み殺す。」  
「並盛町は僕俺のものだ」



## 浮雲 26

「座ったまま死にたいの？」骸に問う

「クフフフ 面白いことを言いますね。立つ必要がないから座ってるんですよ。」

ム 「…… 君とはもう口をきかない（この頃の骸はDディモンに似てるから 少し気に入らない……）」

「どーぞお好きに ただ、今 喋っておかないと二度と口がきけなくなりますよ。」

ぞく…… 「!!? (きた……!）」

「んー？ 汗がふきだしていますが どうかなさいましたか？」

「黙れ (よく言うよ、)」

「せっかく心配してあげているのに、ほら しっかりしてくださいよ。」

フラ…… 「僕はこっちですよ。」

「!!! (……スゲーグラグラする、)」

「海外からとりよせてみたんです。 クフフフ 本当に苦手なんですネ……」

カチツ 六道骸がボタンを押す。

ペアアツ 部屋が明るくなり周りが見えるようになる。

「・・・桜・・・」

部屋の天井付近には

沢山の桜が咲いていた。

~~~~~

ガツ!! 攻撃され 体が傾くが、

「おっと」 髪を掴まれ 倒れることを阻止される。

顔も体も構わず攻撃される。

外傷は見た目だけで それほどでもないが、骨や内臓に響く攻撃ばかり。ヒザをつき、体を腕で支えなければ、体が横になってしまう状態。

「なぜ、桜に弱いことを知っているのか? って顔ですね。」

「・・・」 無言で 六道骸を睨みつける。

「さて、なぜでしょう」

「……………」

「おや? もしかして、桜さえなければと思っっていますか?

それは勘違い

ですよ。君レベルの男は何人も見てきたし、幾度も葬ってきた。

地獄のよ

うな場所ですね。 さあ、続けましょう」

ゴツ！ ドカツ！

~~~~~

(一) …… ツ！ (二) 目が覚めた。

六道骸にボコられた後、四方を壁に囲まれた場所に閉じ込められたらしい  
体の具合を確かめてみる。                    まだまだ全然動ける、この調子でも今の六道骸

を倒すのに1分も要らないな。

・俺は骸にやられたんじゃない、原作力のせいだ。

さつきは何度言葉を訂正しようかと思つたか…

桜を海外からとりよせた？                    あの桜は幻覚だろ、元からそこに有つたのならあ

の部屋に入った時にフラつくだろうよ。

あと、お前に俺の心が読めるわけないだろうが、てか 誰にも読めねーよ！                    原作  
力のおかげでな！

ハァー                    それとこの部屋、壁の一つに横長方形の覗き穴らしきものがあるが、

この壁、幻術か？ 違和感がある。

獄寺がダイナマイトでこの壁を壊したときは 普通に壊れたけど、

城島犬は雲雀が此処にいるってことを知らなかったみてーだが、今の骸に有幻覚が使えるとも思えないしな……

ま、どうせ原作力のせいであつたから出ることができねーし

バーズの

鳥が来るまで座って待つことにするか……

ああ、そうだ 俺の携帯電話がお陀仏になつたから ここから出たら新しい携帯

電話買わねえ・と・な・

## 浮雲 27

「ヤラレタ！ ヤラレタ！」「ん？」

高い声が聞こえ、目を開けると そこには 一羽の小鳥がいた。

「君…（ヒバード）」 「ピチチチチ」

さえずりながら近づいてきた。

（「…愛でておこう」）

指先でヒバードをなでる。

（「癒しだ… 校歌を覚えさせようか」）

「チチチ」 「ほら、緑ーたなびく 並盛のー 大なく 小なく 並がいいー

」

「ピチチ ミドリービクーナミノーミノ」

「違うよ。 緑ーたなびく 並盛のー 大なく 小なく 並がいいー だ

よ。」

「チツ」 （「！ 舌打ち …だと…」）

「ミドリーたなびく ナミモリのー ダーイなくーシヨウなくーナミがいいー」

「そうだよ（覚えるのが早いな…）」

「ピチチチ」バサツ バササササ

ヒバードは何処かに飛び去っていった。

（「ヒバードが来たってことは、バースがやられたってことで、それじゃあ、あとは獄寺が来るまで待つてようか・・・ノドがかわいたな…。一応、原作力のせいで骨も数本折れてるし、さっさと骸を殴って帰りたい。」）

+++++

獄寺隼人 side

建物内には入ったが、どこの階段も壊されていて上の階に上がれなくなっていた。

（途中でヒバリの物らしき、壊れたケータイを見つけたが、着うたが校歌ってダサすぎだろ。）

そのあと、上の階に上がるための階段を探し回って、やっと見つけたのは非常用のハシゴだった。

だが、ハシゴがあつた部屋には、メガネヤローが待ちぶせていた。

オレはメガネヤローの相手をすることにして、10代目とアネキには先に骸のもとに

進んでもらった。

（副作用の激痛なんてどうでもいい。オレは10代目が骸のいる場所にたどり着けるように ここに来たんだからな）

戦いが始まる。

メガネヤローの武器、ヘッジホッグから飛ばされる毒針を避けながら、トリツキーな方法で戦っていく。

「障害物のある地形でこそオレの武器は生きる。ここで待ちぶせた時点でおまえの負けだ」

と、ダイナマイトを食らわせる。

・・・だが、突如 激痛がオレを襲った。

「うがあああ！　くそっ　こんな時に…!!？」

激痛に気を取られていたオレは 背後（外）から来るもう一人の仲間に気づかなかつた・・・

オレはそいつの鋭い爪に胸を抉られ 大ダメージを負ってしまった・・・

階段状になっている数段の段差から落ち、仰向けに倒れる。

（「体が…動かねえ…」）

バササ　「ヤラレタ！　ヤラレタ！」

1羽の鳥が、どこからか来て 壁に空いている穴にとまる。

〔くそう…ヘンタイヤローの鳥まであざ笑ってやがる。何が10代目の右腕だ…〕

何の役にも立つちやいねーじゃねーか… くそっ…くそっ…くそっ…！〕

〔ミドリーたなびく、ナミモリのー　ダイイなくーショウウなくーナミがいいー〕

鳥が歌う

〔へへ…（ここに居たのか）〕

一本のダイナマイトに火をつけ　鳥がとまった壁にむかつて投げ転がす。

ー！ドガアン!!　ガラガラガラ　壁が崩れる。

〔へへっ…：…　うちのダツセイ校歌に愛着もってんのは…　おめーぐらいだぜ…〕

〔ヒバリ〕



# 浮雲 28

雲雀恭弥 side

「ドガアン!! ガラガラガラ

壁が崩れていく。

(「……ようやく出番か」)

「……元氣そーじゃねーか」

崩れた壁の前には 胸に傷を負い 仰向けに倒れている獄寺隼人が

「ヒヤハハハハ もしかしてこの死に損ないが助っ人かー!？」

その奥には邪魔者がいる。

「自分で できたけど、まあいいや。 じゃあ、このザコ2匹はいただくよ。」

「好きにしやがれ」

「死にぞこないが何ねぼけてんだ? こいつはオレがやる」「言うと思った。」

「徹底的てくてきてきにやつからさ」 カシヤン 牙をつける。

「百獣の王 ライオンチャンネル!!! ガルルル……」

姿が変わった

「ワオ 子犬かい?」

「うるへーアヒルめ!!」

四足歩行で走り こちらに向かってくる。

(「俺の名はヒバリだよ。」)

俺は 落ちていているトンファーを蹴り上げ カガツ掴みパシ パシッ 叩きつける

ヒュッ!

それは避けられてしまうが、勢いを殺さずに もう片方のトンファーで攻撃する。

ガッ!!

その攻撃でそいつは 窓ガラスを割りながら外に飛んでいく

「犬<sup>けん</sup>!」 片割れが叫ぶ

「次は君を… 咬み殺す。」

「……」

そいつはヨーヨーを構え 攻撃しようとしてくるが、そのままに近づき、そいつも

さっきのやつと同様に外に向かって殴り飛ばす。

(「次は…六道骸 。。 獄寺を連れ、さつさと上に行くか… 先に病気の薬もらわ

ないとな。」)

~~~~~

悲鳴が聞こえた。

「ひいひい!! やめて! 助けて!!」

沢田綱吉の声だ。

六道骸の姿を見つけ、片方のトンファアを投げつける
ル!
ビツ!
ギョルルル

が、弾かれる キン! カラカラカラ

「トンファア!?」

「10代目……! 伏せてください!」

! ドガガガ!!

獄寺隼人が投げたダイナマイトは 沢田綱吉を囲んでいた蛇を吹き飛ばす。

「おそくなりました。」

「ヒバリさん!! 獄寺君!!」

「(ここまで連れてきたんだ) 借りは返したよ」 ポイ 「いでっ」 肩

を貸していた獄寺隼人を捨てる

「これはこれは、外野がゾロゾロと、千種は何をしているんですかね?」

「へへ メガネヤローならアニマルヤローと下の階で仲良くのびてるぜ。」

と、話が話しているうちに 俺は原作力のせいでフラつきながらも、先程投げたト

ンフアーを拾いに行く

カラン：　　チャ「覚悟はいいかい？」

トンフアーを構える。

「これはこれは 怖いですねえ。　だが今は、僕とボンゴレの邪魔をしないで下さい。

第一^{だいいち}君は 立っているのもやつとのはずだ、骨を何本も折りましたからねえ」

「遺言はそれだけかい？　（それぐらいで動けなくなるような柔な体はしていないよ。全て原作力のせいだ）」

「クフフフ　面白いことを言う　君とは契約しておいてもよかつたかな？」

仕方ない　君から片づけましょう」

ヴウ：ン　六道骸の右目の数字が四に変わる。

「一瞬で終わりますよ。」

ダツ　六道骸が三叉^{さんさそう}槍を手にしながら走りよつてきた。それを迎え撃つ

ガッ！　キキキンツ　ガギキキキキ！　キキキンツ　ギンツ!!？

どちらとも、攻撃し　防ぎを繰り返す。

「君の一瞬でいつまで？　（左肩攻撃されたけど　少しは躲せたな）」

ばっ！　互いに距離をとる。

「やっぱり強い！ さすがヒバリさん!!」

「こいつらを侮るなよ骸、お前が思っているよりずっと伸び盛りだぞ。」

「なるほど そのようですね。 彼がケガをしてなければ勝負はわからなかったかもしれない」

ブシユツ 「!」 左肩から血が吹き出た。

（「原作よりもキズは浅いぞ! 原作だと ブシユウ だったからね」）

「そこまで覚えてるのか主人公…」

「クフフフフ… 時間のおムダです。 てっとり早くすませましょう」

ヴウ…ン 六道骸の眼の数字が一いちに変わる。

サアア 天井付近で桜が咲く

「さ…桜!? まさか ヒバリさんのサクラクラ病を利用して…!」

フラ……

「クフフ さあまたひざまづいてもらいましょう」

「そんな! ヒバリさん!」

（「心配無用 ・油断大敵」）

縮地しゆくち簡単にいうと、一歩で二歩分進める歩法、高く飛ばない前に行くスキップを使い、一瞬で六道骸の懐に入り 攻撃する。

油断していた六道骸には簡単に大きなダメージを与えることができた。

六道骸の口からは ツー つと血が出る。 内臓がきずついたのだろう

「へへ… 甘かったな。 シヤマルからこいつをあずかつてきたのさ サクラクラ病の処方箋だ」

獄寺隼人が内用薬の袋を取り出しながら語る。

（「いらんこと言うな、そこは黙っていた方が動揺を誘えるだろ」）

俺は攻撃をたたみかけながら考える。

（「そっういえば、無意識には戦ってないな どうなるんだ？」）

六道骸を殴り飛ばした。

「ひ…ヒバリさん 大丈夫ですか？」

沢田綱吉が近づいてくる。

フラ ばたっ！ 倒れる。 （「痛い ここでも原作力か

！」）

「大丈夫ですかヒバリさん！」

「こいつ 途中から無意識で戦ってたぞ よほど一度負けたのが悔しかったんだな」

「ヒバリさんすげー…」

（「 何言ってるの!? 意識あつたよ！ てか今もあるよ！ ガンガンあるよ！

うわあ げんさくりよくうー ㊦

「クフフフ Arrivederci」

また会いましょう

！ズガンツ！！

どき

（「あ、いつのまにか骸が憑依弾使ってた。ここから俺の出番ねーし、寝てようかな。原作力 あとは任せた。」）

浮雲 29

ピツ 「契約すると言ってますがね。」

「…起こされた。時間たつてねーじゃねーか。言ってますがね、じゃねーよ。あ、骸何か入ってきた感じがする。」

「ま…まさか!!?」 沢田綱吉が少し後退する。

ゆら… 俺の体がかつてに下を向きながら立ち上がる

「ヒバリさんの中にまで!!?」

「だよな〜 こーなるよな〜 働け原作力、俺の体倒れろ〜」

バキツ!! 「がつ」 俺の体が勝手に動き 沢田綱吉を攻撃する。

が、 どさつ! 俺の体は倒れた。

「おや? この体は使いものになりませんね」

どうやら 俺の体に入った六道骸は立ち上がれないようだ。

「これで戦っていたとは恐ろしい男だ。雲雀恭弥……」

「お、骸が出て・どさ・痛い。ひでえ、寝てたところ憑依して 攻撃一発だけして使えないならあとはどうでもいいと出て行きやがった。例えると、寝始めて少し経ったこ

ろに電話がかかってきて、その電話に出たら『よ！　お前の自転車借りるな・・・あ、

大きき合わねえからやつぱいいや』って言つて電話を切るつて感じたな。その間、俺は一言も喋つてない・・・その後自転車みたら鍵がさしつぱなしになつたままだつたしよ、なつたままと言えよ。これ、契約されたままになるのか？それとも、骸の闘気が浄化されたら契約が無効になるのか？いや、でも、黒曜が終つた後に一般人の子供に骸が憑依してゐる描写があつたな、またいづれ、つてさ。ま、これも今考えても仕方ないか、また寝ることによつと」

+++++

あれから一ヶ月後

今、俺は、ヒバードとともに学校の屋上で寛いでいる。

「委員長!!?　本日は野球部、秋の大会です!!?」

リーゼントの風紀委員はそれだけ言つて、屋上から去つていった。

ふあゝあゝ：
いい天気だ。

あの戦いのあと、目を覚ましたら病院のベッドで寝ていて、治療もされた後だった。

携帯電話が無く、日にちも分からなかったし、いつのまにかそこに居たという事と、雲雀の心が骸にいいようにされていたという事に、ムカつき度がガンガン上がり、体が勝手に動き、病院から脱走することになったが、まあ、うん

入院していた病院は、並盛中央病院、何故か替えの服があったからそれを着て窓からGO！をした。

まあ、そこらへんはどうでもいいんだけどね。

・・・次は：VSヴァリアー編、並盛が荒れるし壊れてしまう　　気に入らないな：

だけでもまあ、制限されている力を使う最大値が上がるのはいいね。ディーノとも戦えるしな、

リング争奪戦じゃ、足をケガしちまうだけで、いいように戦えないからさ

ま！ その不満をディーノにぶつけてやる。まあ、戦ってる時も本気をだすことはできないだろうけど、

じゃあ、ハーFRINGが届くまで待とうかね。

V S ヴァリアー編

浮雲 30

∴ V S ヴァリアー編に突入しようだ。

日曜日にシヨツピングモールが破壊されたと報告をうけた。負傷者死者はいないぞうだ。

(いるけども、いるけども！)

建物をなおすのは誰だと思っっているんだか・・・俺じゃないけど、

それだけで、今日、今、応接室にある俺の机に 雲のハーフボンゴレリングが置いてあったから手にとってみたというところで 疑問というか不安がわいた・・・

雲のリング、というより 雲の守護者の使命は、「なにもものにもとらわれず 我が道をいく浮雲」

・ ・ 原作力による強制力や 原作雲雀Ⅱ他人と同じように生きている、生きてしまっている俺に 雲の守護者がつとまるのか・・・

ハア、 未来編までに 僕ではなく俺が、俺自身が覚悟を決めないとな
・ ・ ・ 俺の覚悟、か。。。

~~~~~

## 雲雀恭弥 side

ここは応接室、ソファーに座りながら日誌を読んでいたときだった。

ガラ： 「！」 ノックもなしに出入り口の扉が開かれ 2人の男が入ってきた。

「おまえが雲雀恭弥だな」 「(来たか) ……誰……?」

「オレはツナの兄貴分でありボーンの知人だ、雲の刻印のついた指輪の話がしたい。」

「ふーん、赤ん坊の… じゃあ強いんだ。」

そう言いながら日誌を横に置き、ソファーから立ち上がる。

「僕は指輪の話なんてどーでもいいよ。 あなたを咬み殺せば…」

「なるほど 問題児だな。 いいだろう その方が話が早い」

話しかけてきた彼、跳ね馬デューノはムチを構える。 それに合わせて俺もトン

フアーを向ける。

(「あなたが応接室に、俺のテリトリーの一部に無断で入ってきたのがいけないんだ。

だ、やっと強者と戦える。わくわくするね。」  
ここでやると後始末が面倒だから屋上でやろう。やっと

~~~~~

ギユ

チャカツ

それぞれの武器を構える音がする。

「学校の屋上とは懐かしいな 好きな場所だぜ。」

「だったらずつとここにいさせてあげるよ。 はいつくばらせてね」

「ダツ！ と、本気とは程遠い、だが常人にとつてはだいぶ速いスピードで接近し、攻

撃する ヒュンツ！ ビビツ!!?

だが 相手は1マフィアのボス、これぐらいはものともせずには避けていく

ヒュツ 下からアゴへ 攻撃を仕掛ける。

が、 ガツ！ その攻撃はピンと張ったムチで遮さえぎられてしまう。

(「原作通りだな…」)

「その歳にしちや上出来だぜ。」

「何言ってるの？ 手加減してんだよ。」

攻撃を再開する。 ビュツ！ 顔を狙った攻撃は頭を引かれ避けられる。

それを気にせず、勢いそのままに攻撃を続ける。

少しすると、跳ね馬がムチを振るってきた。

「甘いね。死になよ（たしか、腕を取られるんだったか）」

そう考えながらもそれを避け、攻撃する為にトンファーを引く

ガツ！ 引いたトンファーは腕ごとムチで絡められてしまった。

（「・・・どうなってんだか、物理法則無視だろ…」）

「おまえはまだ井の中の蛙だ。こんなレベルで満足してもらっちゃ困る。」

「……………（されどその深さを知る。俺は並盛から出た事は黒曜を除いて無いが、ずっと

ここに居る事で面白いことを知ることができてるけどね。俺にとって、だけど。）」

「もつと強くなってもらうぜ 恭弥。」

「（命令されるのが）やだ 「なっ」

ビュツ！ ガツ！！

俺は捕えられていない方のトンファーで攻撃した。

「てつてめーなあー！」

（「やっぱ 直撃は避けられたか。というか、少し離れたところに気配を感じる。これ

はたしか、沢田家光……ま、あいつはどうでもいいか。今は、俺を手懐けようと思つてゐるはずの跳ね馬を咬み殺すだけだからね。」

浮雲 31

次の日・学校の屋上

今 屋上にいるのは、俺こと雲雀恭弥、そして、キャバツローネファミリー10代目ボス 跳ね馬ディーノと その部下のロマーリオ

「よう 恭弥。今日は戦う前に指輪の話をしてえ、騙してるみてーでスッキリしねえからな。」

「いいよ興味ないから。……あなたをグチャグチャにすること以外（グチャグチャ^{イコール}）血まみれだからな、）」

「つたく、困った奴だぜ。」

「（いちいち言葉がうざい）ねえ、真剣にやってくれないと、この指輪捨てるよ?」

そう言い、雲のハーフボンゴレリングを取り出す。

「なっ まて! のやろ〜っ」

跳ね馬は動揺し、その背後では跳ね馬の部下が笑いをこらえている。

「わーったよ じゃあ交換条件だ。真剣勝負でオレが勝ったら おまえにはツナのアミリーの一角^{いっかく}を担ってもらうぜ。」

チャキツ

ビツ!

俺はトンフアーを

構え、跳ね馬はムチを構える。

ヒユウウウウ 風が吹き始め、止まったと同時に

ダツ!! 攻撃を開始する。

俺はトンフアーを使い、近距離で攻撃をするが避けられる。少しでも距離が空けば、跳ね馬がムチを使い中遠距離で攻撃をしてくる。

戦いはすぐには終わらず、時間が過ぎて行く

+++++

あれから五日後、リングを手にしてから六日後、ヴァリアーが並盛に来た 次の日の朝である。

俺は、まだヴァリアーが来た事を知らない跳ね馬と並中の屋上でバトっていた。

戦い始めてから、双方 休息を全く取らず、傷の当てもしていなかった俺達は 血まみれになりながらも向かいあっていた。

屋上も所々壊れており、壁が削り取られていたり、手のひら程の大きさの円状のへこみやヒビが入っていたりと周りの被害も大きくなっていた。

そんな時、デイーノの部下が報告があると声をかけてきた。

それをきっかけに戦いは一時休戦となった。

おおかた
大方、ヴァリアーが来た事と、争奪戦の舞台が並中になった事についてだろう。報告が遅いな。

・・・そうか、リング争奪戦は今日からか…

俺は応接室にて そんな事を考えながら自身の傷の手当てをする。

消毒をし、ガーゼを当て 包帯を巻く。

跳ね馬の部下の治療は大ざっぱだったはずだし、自分でやった方がいい。

医療〔応急手当〕を覚えておいてよかった。

今日の対決は 晴、そのあとは 雷↓嵐↓雨と続いていく、

という事は、今日から俺は 嵐戦の日まで跳ね馬に連れられ修行の旅に出ることになるのか…

お、俺の並中くすまねえ、すまねえな

窓ガラスやら校舎の三階、あとは校舎B棟と体育館の屋根が破壊されるんだったな……仕方ねーか、

~~~~~

着替えや食事をし終わり 応接室で休息をとっていると、包帯を巻いた跳ね馬が部屋に来了。

そして、「屋上だけじゃなくいろんなシチュエーションで戦ってみよーぜ。その方が より強くなれるからな。」と言って俺を連れ出した。

移動には車を使った。群れるのが嫌いという事を配慮してくれたようで、車には俺、跳ね馬とその部下だけだった。

(3人からは群れの認識だが俺は我慢して車に乗った。俺！ えらい！(部下さん(口マリーオ)が できる限り気配を消してくれていたのが大きい。)

跳ね馬は助手席で寝ていた。俺も半分寝てしまった。少しでも大きめの音がするごとに目を開けてあたりを確認してたが：

ヒバリの心がこんな所じゃ眠れないと、俺の睡眠の邪魔をしてきた。警戒心高いなおい。

(知ってるけど、いつも通りだけど…)

今日までの跳ね馬との戦いで、俺も使える力を少し上げる事が出来るようになったから、この旅でのケガも減るだろう。

次の俺の登場は嵐戦の終了時か・・・

## 浮雲 32

リング争奪戦3日目

今宵は嵐の守護者戦 ベルフェゴールVS獄寺隼人

フィールドは校舎の3階全てでおこなわれる。

時刻は 11時20分 勝負開始が11時過ぎ。

勝負に使われるハリケーンタービンは試合開始から15分後に爆発して行く

勝負の説明が11時に始まったので、移動の時間も含め もうじき爆破が開始されるだろう。

俺は並盛に帰ってきてすぐに跳ね馬を無視して並中に向かった。

並中が見えてきた頃・・・

！ドガガ：ン！！

と爆破が始まった。

急いで並中に向かう その間も爆発は止まらない。

学校近くに住んでいる住民はこの爆発に気づかないのかと思っただが、幻術で学校を覆ってると思い出す。

俺に幻術の効果が及んでいない？・・・原作を知っていて何が起こっているか知っているからか？それとも守護者だからか？

そう考えながらも学校に到着、爆発が起こっている3階へ向かう  
(爆発が始まって1分以内で到着した俺スゴ)

+++++

雲雀恭弥 side

3階へ向かおうとしてすぐ、黒服を着たやつらが襲いかかってきた。  
不法侵入者は咬み殺す。

ガツ！「ギャツ！！」                   ガシャアンツ！！

階段下へ叩き落とす。

ビッ！                   どささささっ！

ああ、あちこちに血が飛び散っちゃった。血の汚れつて落とし難いんだよね。ルミノール反応だったかが出ちまうし。

ザコどもを咬み殺しながら3階に到達し、最後の1人を咬み殺す

「ぐああつ」 どしやつ！

3階は あちらこちらがボロボロになっており、その原因だろう奴らも居た。

「……………」

「ヒバリさん!!」

沢田綱吉が俺の名を呼ぶ、君の最初のセリフはいつもこれだ：

「ヒバリさん… 来てくれたんだ。 本当にリング争奪戦に加わってくれるんだ：

あの 最強のヒバリさんが…!!?」

「俺は、最も強いわけではないんだがな… 校舎への不法侵入及び校舎の破損 連  
帯責任でここにいる全員咬み殺すから」

その言葉に、沢田綱吉側はヒバリはヒバリだと改めて思い、ヴァリアー側はそれぞれ  
別々の感想を抱く。

チエルベツ口の片割れが俺に話しかける。

「あなたは沢田氏側のリング保持者ですか？ でしたらこのような行為をなされては

…」

だがそれをレヴィ・ア・タンが遮る。

バツ！ 「どけ チエルベツ口 奴はただの 不法侵入者だ!!」

バ！バ！バ！バツ！ 電気傘に電気を纏わせ突っ込んでくる。

「俺にしてみたら、お前達の方が不法侵入者だからな。」

ムツツリの攻撃は、出せる力が上がった今の俺には簡単に対処できる速さだった。俺はムツツリの突撃を避ける。

その際に足を引つ掛け ムツツリを転かす。ムツツリは顔面から転び倒れる。

「まずは君から 咬み殺そうか（疑問形ではない）」

「なに!？」

「おーおーかっこいいねえー」

V S ヴァリアー編以降 全く出番がなくなる指名手配犯がほざく

「作者は不覚にも、不覚にも、こいつの事をかっこいいと思った事がある。」

「あのバカ出てくるなりメチャクチャしやがって」

「でもやっぱりすこいよ ヴァリアーの攻撃をいとも簡単に」

「ああ さすがだな。」

「できる……! 何者なんですか?」

チエデフのバジリコンの質問にリポーンが答える。

「奴は、うちの雲のリングの守護者にして 並中風紀委員長 雲雀恭弥だ。」

「雲ということはゴーラ・モスカの相手だね。」



「マーモン、奴をどう思う。」

と、双方で俺に関して話している。

（「暇：帰りたい眠い：休ませろ、どうせ戦えないんだから」）

そう考えていると、スペルビ・スクアーロが吠えてきた、

「ぐおおい!! 貴様 何枚におろして欲しい!!」

「ふうん 次は君?（やるよ?俺殺るよ? チエルベツロが止めても関係ないよ?

原作力が働かなければ今にでも俺はお前をやつてるよ?↑眠いとこうなります。）」

山本武が俺を止める。

「落ちつけてヒバリ 怒んのもわかっけどさ。」

「邪魔だよ。僕の前には 立たないでくれる。」

そう言いトンファーを振るう。

だが、どんなにイラついていても原作力が働き、攻撃が遅くなってしまう。

そのため、山本武はそれを簡単に避け、俺の背後に回り トンファーを掴み 抑える。

「そのロン毛はオレの相手なんだ 我慢してくれって。」

「……（我慢?）…邪魔する者は何人たりとも、 咬み殺す」

殺気は無いが、ゴゴゴゴゴ という効果音が聞こえてきそうな程のイラつき

を 山本武達は感じているだろう。

そんな俺に リボンが声をかける。

「ちやおっス ヒバリ！」

「赤ん坊かい？ 悪いけど今、取り込み中なんだ。」

「ここで暴れちまってもいいが、でっけえお楽しみがなくなるぞ。」

「！ 楽しみ…？（何だっけ 眠くて思考が…）」

「今すぐってわけじゃねーが、ここで我慢して争奪戦で戦えば、遠くない未来、六道骸とまた戦えるかもしんねーぞ。」

「ふうん 本当かな」

俺は問うが、リボンは俺を見つめるだけだ。

（「！言つてない！本当だとは言われていない!!かもしれないと言われただけ!うわ!うわ!自分がやるのは良いがそれをやられるのはイラつく!!くそ!くそ!くそ!くそ!」）

一旦 そのイラつきを抑え、チエルベツコに問う。

「校舎の破損は完全に直るの」

「はい 我々チエルベツコが責任をもつて。」

「そう… 気が変わったよ。」

僕とやる前にあそこの彼に負けないでね。

じゃあね。」

山本武にそう告げ、俺はその場を去る。

〔六道骸：俺自身も、あいつとまた戦いたいと考えている。あの勘違い野郎をボコりたい。・・・六道骸じゃなくても良いけど、誰かと、本気で戦いたいな・・・〕

## 浮雲 33

家に帰りぐつすり寝た次の日の夜 今日には雨の守護者の対決

リング争奪戦の話は昨日、並盛に帰る前に跳ね馬に聞いておいた、というより、話を聞いたから帰ってきたんだけどね。

俺は今、校舎の屋上にある給水タンクの上に座っている。ここから争奪戦を見る予定だ。

もう少しで戦いが始まる・

ふああ… 「皆殺しにすれば早いのに」

結果を知っているため 暇していた時（今日は昼寝したから起きていられるよ）

サアアアア… 「霧きり…？」 辺りに霧がかかった。

（「この霧は…クローーム罫はこと風かぜに憑依中の六道骸が発生させたものか。居る場所は体育館の上だったはず。ま、今はいいか、さて 山本武、俺に

時雨蒼燕流しぐれそうえんりゅうをみせてくれ。」

+++++

雨のリング争奪戦は山本武の勝利で終わり、スベルビ S・スクアードは鮫によって水中に：

次の日の放課後　　並盛の見回りをしていたときだった。

「お久しぶりです。また　強くなったようですね。」

話しかけられた？　　振り向くが気にとまるものは無く、そのまま見回りを再開し

た。

内心では：（「骸だよ！クロームだよ！　骸INクローム髑髏　どうせ

勝つだろうが霧戦ガンバ）　　骸あいつ、なにアルコバレーノに圧勝してんだよ。

この争奪戦、ヴァリアー全員手加減してんじゃないかねーのかと思うぐらいの勝ち方

だよな。　　そういうもしもIFもあるだろうけど。（）

~~~~~

見回り後、河川敷にて

この河川敷には全く人が来ず、前々から俺がゆつくり出来るところだった。

「 飛び回る 優美な羽で 咲き誇る 僕のプライド

鳥の様に 自由に 遙か彼方の空飛んで fly

雲の波間漂い 巡り着いた場所 それが未

来 「

「 朝つゆかがやく並盛の 平々凡々並でいい

いつも気負わぬ 健やか健気

ははく ともに笑おう 並盛中

「

「 言葉は要らない 覚悟があるのなら

突き放されても 迷うことがあっても ついて来い

「

とまあ、なぜか、（絶対原作力のせいだろうが）河川敷から出られないので時間を潰

していたら日が暮れ、もうじき日付けが変わるといふ時間になった。

その間何度も、何度も、河川敷から出られるか試したがムリだった。

(げ、原作用う)

俺がとてもとてもイラついていると、

「よっ おまえの勝負は明日あすになりそーだぜ 調子はどーだ？」

そう言いながら、何も知らない跳ね馬が河川敷に現れた。

「試してみなよ。(俺今、ものすごくイラついているからストレス発散させてよ。)」

「いや！ もう今日はいいだろう！」

跳ね馬は少し焦りながら両手を俺に向けてくる。

「……まあ、もう深夜で、午前中にもやりまくったしな……」

「じゃ、じゃあ俺はもう行くぜ。 また明日あしたな！」

そう言い残し跳ね馬は帰って行った。

「あれ……俺ってこのためだけに何時間も待たされたのか……？」

浮雲 34

次の日、今日の戦いは雲戦 俺の戦い

・ ・ ・今回は足をケガするはめになるのか……。まあいい、やってやるさ、なるようになるれ！ だ。

夜になり、並中に向かう

目に入ってきたのは、獄寺隼人、山本武、笹川了平の3人

「君達…… 何の群れ？」

そう声をかけると、それぞれが答える。

「んだとてめー！」「まーまー、えーとオレ達は……」「応援に来たぞ!!」

「ふうん…… 目障りだ 消えないと殺すよ」

「なんだその物言いは!!」 極限にプンスカだぞ!!」

「まーまー 落ち着けて、オレ達はぐーぜん通りかかったただだから気にすんな ヒバリツなっ」

山本武が他2人をおさえていると、ヴァリアーが降り立った。

「そうか…あれを 咬み殺せばいいんだ(さっさと終わらせる)」

~~~~~

場所を移動した

「(……)が……」

「そう、これが雲の守護者バトルの戦闘フィールド・クラウドグラウンドです」

「何ということだ…運動場が!!?」「ガ…ガトリング!??」

フィールドを見た沢田綱吉側の守護者がざわめく

「雲の守護者の使命とは、何ものにもとらわれることなく 独自の立場からファミリーを守護する孤高の浮き雲…ゆえに、最も過酷なフィールドを用意しました。」

四方は有刺鉄線で囲まれ、8門の自動砲台が30m以内の動く物体に反応し攻撃します。また地中には重量感知式のトラップが無数に設置され、警報音の直後 爆発します。」

チエルベツロがフィールドについて説明する。

「早く始めたいな。あいつ（ザンザス）は強い部類だから、戦ってみたい」

「ぶはーはっはっ!!そいつあ楽しみだ!!」

大声でXANXUS<sup>ザス</sup>が笑い出した。

「……（あいつらが挑発でもしたか？

まあいい、開始まで待つか

）」

~~~~~

「それでは始めます。

雲のリング・ゴーラ・モスカVS雲雀恭弥・

バトルかいし
勝負開始!!」

ガシャンッ！　！ドウツ!!

始まってすぐ、ゴーラ・モスカ、暴食がジェットを使い飛び、こちらへ突撃、

！　ズガガガ!!？　右手指先から銃弾を撃ってくる。

俺は銃弾を避けながら前進し、持っていたトンファーを使い、暴食が突き出していた右腕を折り　ついでとばかりに顔の右側をへこませた。

それらの衝撃で　暴食は仰向けに倒れる。攻撃により、左腕も取れかけている。

ピシピシピシピシ… と暴食は音を鳴らし

!!ドオン!!! 大爆発 黒い煙を上げた。

「……………」

カチ… 俺はそれを見向きもせず、リングを一つにする。

周りのやつらは早々の決着に ぼーっとしている。

（「暴食のことはどうでもいい」）

「これいらぬ」「へ？」

近くにいたチエルベツ口にリングを渡す

「あの…」

何か言いたげなチエルベツ口を無視し、俺は憤怒に話しかける。

「さあ、おりておいでよ。 その座つてる君。 サル山のボス猿を咬み殺さない

と帰れないな」

挑発していくく…

浮雲 35

XANXUS が動く、不敵な笑みを携えながら

フィールドを仕切っている有刺鉄線を飛び越え、ヒバリを踏みつける。

ヒバリは、それをトンファーで防ぐ。

ダ　ンツ！　　　XANXUS は空中でひるがえり着地した。

「足が滑った。」

「　だ　ら　う　ね。　」

「ウソじゃねえ」

ピーッ！　　　ザンザスが着地したところには　フィールドトラップがあつたよう

で警報音が鳴る。

！ドオン！！　　トラップが発動し　爆発がおこるが　ザンザスは軽々避ける。

ザッ！　　　「そのガラクタを回収しにきただけだ。　　オレ達の負けだ。」

「ふうん　　　　そういう顔には・・見えないよ。」

ダッ！　　　　俺はぎに向かつて走り、攻撃をしかける。

ビュ！ビュッ！　　避けられてしまうが　それでも攻撃を続けていく

ウイイイ…ン ガガガガ!

砲台の射程距離に入ったようで撃たれ始める。

「ドントツ!!ドオン!!」

いくつものトラップも反応し 爆発していく

「安心しろ、手は出さねえ」

「好きにしなよ どのみち君は咬み殺される」

「…攻撃が当たらない、それと、モスカにスッゲー観察されてるのを感じる…」
しばらくの間 攻撃を続けていると、

「!」 コオオ…

XANXUS は手に憤怒の炎を纏わせる。

「バチツ!!! 炎を纏わせた手とトンファーがぶつかり合い 大きな音を出す。

「手……出てるよ? (やつと当たった)」

「くっ チェルベツロ」

「はい XANXUS様」

ザンザスは俺からの攻撃を避けながらチェルベツロに話しかける。

「この一部始終を忘れんな オレは攻撃をしてねえとな」「!!?」

XANXUSは何かを見てニヤリと笑う

「! 来るか!!」

そう思ったとき・・・　ブオン!!　　ゴーラ・モスカから放たれたビームが左脚を深く掠めた。

ブシユツ

ガクツ

足から血が噴き出し痛みに片膝かたひざをついてしまう

「グツ・・・イテエ・・・やっぱり、完全には避けられなかったか…、だが、原作のキズよりは浅いと思いたい」

！ドン！　！ドドン!!!

大きな爆発がいくつも起こり、それぞれの守護

者達もその被害に合う

「……なんてこった。オレは回収しようとしたが、向こうの雲の守護者に阻まれたためモスカの制御がきかなくなっちゃった」　XANXUSが白々しく語る。

ガガガドシユドシユドシユツブオ！ガガガガガガ!!？

暴走したゴーラ・モスカは　あたりかまわず攻撃していく

ド！ド！ドン！

ギユオオオ

ブオン！　!!ドガン!!

「…フフ…ぶはーはっは!!

こいつは大惨事だいさんじだな!!!」

XANXUSは爆炎の中で大笑い。

ゴーラ・モスカは暴走を続ける。その攻撃は、雲のフィールドの仕切りも壊していた。

そのせいで、クローム髑髏がフィールドに入ってしまった、トラップや砲台がクローム髑髏を、そして、クローム髑髏を助けに入った城島犬と柿本千種を襲う。

・・・！ドウツ！！
くった沢田綱吉が現れた。

3人を守るように大きな炎の壁が、そして、その壁をつ

(「 やつと来たか：」)

ゴーラ・モスカはそれにかまわず、あたりにミサイルを射出する。

沢田綱吉は、グロープに死ぬ気の炎を灯し、空を飛びながら射出されたミサイルを全て、誰にも被害がないように破壊する。

そして、ゴーラ・モスカへ 一瞬で飛んで行き、ゴーラ・モスカの取れかけていた左腕を引きちぎる。

「おい、デクの棒。 おまえの相手はオレだ。」

そう言い、引きちぎった腕を炎を使い完全に壊す。

ゴーラ・モスカは、沢田綱吉に標的を絞る。

ゴーラ・モスカから射出されたミサイルは全て、沢田綱吉を狙う。

沢田綱吉は、ゴーラ・モスカから放たれたビームを避け、空中へと飛び上がるが、飛んだ先にはゴーラ・モスカが先回りをしていた。ゴーラ・モスカがビームを放つ前に沢

田綱吉は、ビームの射出孔しゃしゅつこうを炎を纏った拳で 殴り壊す。

その衝撃により吹き飛ばされたゴーラ・モスカは、地面に叩きつけられ、！ドゴツ！！と、大きな音を上げる。

沢田綱吉は地面に降りた。叩きつけられたゴーラ・モスカは煙を上げている。

「XANXUS……一体これは」

沢田綱吉は、何かしらの違和感を感じたようだ。眉をしかめている。

！ポファツ！！ まだ動けたのか、ゴーラ・モスカはジェットを使い、沢田綱吉に突進する。

それに気づいた沢田綱吉は、片手で、突進してきたゴーラ・モスカを止め、もう片手に炎を纏わせ、手刀の形にし、ゴーラ・モスカを真つ二つに焼き切る。

ズンツ！ ついに、ゴーラ・モスカは動きを止め、ヒザをついた。

ズ………ッ ゴーラ・モスカの中から 何かが出て、地面に落ちる。

「な……なんと……中から人が……！！」

ゴーラ・モスカから出てきたのは人。それも、ボンゴレファミリー現ボスのボンゴレIX世9世だったのだ。

9代目は、ゴーラ・モスカの動力源にされていた。沢田綱吉のゴーラ・モスカへの攻撃が貫通し、9代目の胸は血に染まっていた。

9代目にはまだ意識があつた。口から血を流しながらも、沢田綱吉に話しかけ、想いを伝えようとする。

9代目は指先に死ぬ気の炎を灯す。だが、その炎はどんどん小さくなり、終いには消え、9代目は倒れる。

XANXUSがほざく

「よくも9代目を!!」 9代目へのこの卑劣な仕打ちは、実子であるXANXUS

への。そして、崇高なるボンゴレの精神に対する挑戦と受け取った!!」

「な??」

「しらばつくれんな! 9代目の胸の焼き傷が動かぬ証拠だ!!? ボス殺しの前に

は、リング争奪戦など無意味!!? オレはボスである我が父のため。そして、ボンゴレの未来のために。 貴様を殺し、仇を討つ!!?」

ボスとなると同時に独裁体制をつくるための、XANXUSが仕掛けた罠。

その罠にかかってしまった沢田綱吉……

「XANXUS そのリングは……返してもらおう……。おまえに9代目の跡は、継

がせない!!」

沢田綱吉は決意した。そして、それに伴うように、沢田綱吉の守護者達は武器を取る。

「10代目の意志は、オレ達の意志だ!!」

「個人的に」

「くるかガキ共!!」「いいねえ」「反逆者どもを根絶やせ」

・・・だが、それをチエルベツロが止める。

9代目の弔い合戦は我々がしきると、我々にはボンゴレリングの行方を見届ける義務があると、周囲まわりがどう言おうが関係ない。チエルベツロは、勝利者が次期ボンゴレボスとなる。大空のリング戦の開催を決定する。

「それでは明晩、並中にみなさんお集まり下さい。」

「フツ　明日あすが喜劇の最終章だ。せいぜいあがけ」

そう言い、XANXUSは　大空のリングの半分を沢田綱吉に向かって弾き飛ばす。

そして、目くらましとして死ぬ気の炎を使い、その光に乗じて、ヴァリアー　そしてチエルベツロは姿を消した。

そこに、「遅かったか!!？」

「跳ね馬!!」

跳ね馬ダイノが部下を引き連れてやって来た。

「おまえら!!？」　9代目とケガ人を!!？」

跳ね馬の命令で部下が動く。9代目を担架に乗せ、病院へ運ぶ者、金属探知機を使いトラップを探す者。

俺はそれを横目に見ながら帰ろう動く。

足のキズは 布を巻くなどの応急処置を施したが、早く家に帰り、きちんとした処置をおこないたいと思っていた。

病院へ行かないのかって？ 明日もあるのに『入院しろ』なんて言われたらたまつたもんじゃない。

ま、そうなったら抜け出すんだけどね。

そう考えていると、山本武、獄寺隼人が話しかけて来た。

「大丈夫かよヒバリ！」 「めずらしく大人しくしてたじゃねーか。」

「この状況が、あの草食動物の強さを引き出しているのなら まだ手は出せないよ。」

（ここは、ターニングポイント。原作通りなら、彼が大きく成長できる場所。彼の成長を俺が止めるわけにはいかないからね。・・・原作力が働いてて、元から俺は動けないけども…）

さて、今度こそ帰ろうか。

俺は、綱吉がリボンに蹴られたのを見て帰路についた。

誰も見ていないその口元は、うっすらと笑みを浮かべていた。

浮雲 36

こんにちはっス!!

この入り方、久しぶりな気がする。

俺は今、町の見回りをしている。

・・・いや、な。 今日一度、学校を見に行っただけだし・・・ほら、昨日の戦いでボロボロにされたからね。

ま、見た目は、チエルベツコの術士がコーティングしていたから 普通の人から見たらいつも通りの校舎に見えるんだろうけど・・・俺が校舎を見たとき 何故か違和感が半端なくて、とても気持ち悪く感じたんだよね：

だから今、こうして見回りに出ているんだけど・・・かれこれ6時間くらい・・・目が遠くの方を見てしまうよ・・・

そうだ、ついさつき、人気のない場所を歩いていたらチエルベツコが来てね。『今日の夜行われる戦いには、守護者は必ず並ん中に来てください』と言われた。 そのあと、すぐに去っていったから、そのまま見回りを再開した。

日が暮れる前に 一度学校に戻って、仕事が少しあったからそれを片づけてから、家に帰った。

(違和感や気持ち悪さは我慢したよ。早く直してほしいよまったく…)

それから、家では早めに夕ご飯を食べて、足の包帯を巻き直して、軽めの準備運動をしていた。

そういえば・・・毒を、デスヒーターを注入されるんだよな・・・絶対、早めに解毒してやる、絶対にな!

あとは、時間が来るのを待つだけか、またちゃんと戦えないのは不服だけでも。

~~~~~

夜、時間まであと少し… 俺は、並中にやってきた。

「用件は何？」

「ヒバリさん!! 用件？」 「オレ達と一緒だな。」

「守護者は必ず来るように、チエルベツロから…」

クローム髑髏がそう、沢田綱吉に教えると、チエルベツロが肯定する。

「そうです。命ある守護者全員に、強制招集を発動しました。」

「強制招集……?」

沢田綱吉はよくわかっていないようだ。

「奴もいるぞ」

リボーンが 沢田綱吉に教えるように、ヴァリアー側を指差す。

そこに居たのは 鎖で雁字搦めにされた鳥かごのような檻に入れているマーモ  
ンが・・

声が聞こえた方を見て見ると、そこにはベッドに縛りつけられたままのオカマが居  
た。

そして、ヴァリアー側の守護者が連れてこられているということは、こちら側もとい  
うことで…

「沢田氏側の雷の守護者も来たようですね。」

「!?」 ランボ!! な…なんでランボまで!?? 意識取り戻したばっか

りなんだぞ!!」

移動用の酸素ボンベをつけられた仔牛も連れてこられていた。

「強制招集をかけたのは他でもありません。 大空戦では、6つのリングと守護者

の命をかけていただくからです。」

「リングと、守護者の命をかける…?」 「そうです」

「ちよっ 何言ってるの!?? ランボはケガしてるんだぞ!!?

ランボを返せ

!!

「下がってください、状況はヴァリアー側も同じです。」

「そーよ。ガタガタ言わないの！ 招集がかかったら、どんな姿だろうと集まる。

それが守護者の務めよ！」

「その通りだよ。僕もXANNXUS様の怒りがおさまって、力になれる機会をうかがっていたのさ。」

「ししし、よつくゆうよ。つかまつたけど殺されずにすんで、饒舌になってやんの」

「ムッ」「お黙りベルちゃん!!？」

山本武が おそるおそる問う

「スクアーロは……？ いねーのか……？」

「雨戦の顛末はご存知のはずです。スクアーロの生存は否定されました。」

「……………」

「では、大空戦を始めましょう」

「えっ ちよつと待ってよ！ まだ納得は……できなければ失格とし、XANNXUS様

を正式なリングの所持者とするまでです。」

「ぐっ」「のやろー」

それからチエルベツロは、守護者のリングを回収し、守護者達にリストバンドを配った。

リストバンドを配られた守護者達はそれを装着し、チエルベツロの指示に従い、自身の守護者戦を行ったフィールドに移動することになった。

沢田綱吉側の守護者は、フィールドに移動する前に円陣を組むことにした。俺やクローム髑髏は円陣を組まなかったが、笹川了平の極限ルールによって円陣に入ったとみなされた。

その後、沢田綱吉側の守護者達も移動を開始した。いや…若いっていいね。アオハルしてるよ…



## 浮雲 37

自身が戦ったフィールドに到着した。

フィールドには、ポールが設置されており、その頂上にはリングが置いてある。

「ただし、できればの話ですが。」

チエルベツコの意味深な言葉のすぐあとに、グサツ と、小さな音を立てて、装着していたリストバンドから毒を注入された。

注入された毒はデスヒーターと呼ばれ、この毒は瞬時に神経をマヒさせ、立つことすら困難にする。そして、全身を貫く燃えるような痛みは徐々に増してゆき、30分で絶命させる。

それを回避するには、装着しているリストバンドに、それぞれの守護者に合ったリングを差し込み、内蔵されたデスヒーターの解毒剤が投与しなければならぬ。

そして、重要な大空戦の勝利条件は、ボンゴレリング全てを手に入れること。

さあ、これより、大空戦の幕が上がる。

その頃、俺はというと、デスヒーターによる神経マヒでうつ伏せに倒れていた。

・ ・ ・ 痛いよこれは……正直、ここまでとは思わなんだ…… だけど、立てないほどじゃない。

どうせ助かると、気を抜きすぎていたな。これは。 ・ ・ ・ 今まで通りに、原作力が働き続けるとい保証はどこにもないのにな……

認識を改めないとダメだ。俺は今、ここで生きているんだから。俺が雲雀恭弥じゃない、この雲雀恭弥が今の俺なんだ。

だから ・ ・ ・ 俺は俺として、今を生きる！ 今更感があるけどね。

俺は、フラつきながらも起き上がる。そして、毒二モマケズの意味で、！ドゴオツ！ガツ！ゴツ！と、ポールを倒す。ポール自体は簡単に倒れ、リングが落ちる。

落ちたリングを拾い上げ リストバンドの凹みに差し込む。するとすぐに解毒剤が投与された。

・ ・ ・ まだ少しフラつくけど、これくらいなら全く問題ない。じゃあ、雨の所に向かう、途中でベルフェゴールにあうことになるのか、ワイヤー避けて良いかな？ ……ダメ？、ダメか？ ……ちくせう！

~~~~~

移動中、リストバンドのモニターを見ると XANXUSが、嵐と雷のポールに向かって銃を撃っている映像がちょうど流れた。

XANXUSが撃ち出した死ぬ気の炎を蓄積させた死ぬ気弾は、嵐と雷のポールを倒すこととなり、計算していたのか、嵐と雷のリングはどちらとも ヴァリアー側の守護者に渡ることとなった。そして、ヴァリアー側の守護者は、リングを使い解毒し、それぞれ行動を始めた。

雷の守護者 レヴィ・ア・タンは、沢田綱吉側の雷の守護者ランボを殺すために、嵐の守護者ベルフェゴールは、沢田綱吉側の嵐の守護者 獄寺隼人は、毒によってもがき苦しみ死ぬと、自分からは手を出さず、リングを持って、校舎の3階から飛び降りた。

原作力が働いたからか、それともタイミングが良かったのか、すぐ目の前にベルフェゴールが降りてきた。

骨折してから5日目で その回復力は凄いなと思うよ。俺も人のこと言えないけど…

「こっからだと言えど雨が近いか」

そいつがそう口にした時、俺は攻撃をしかける。ベルフェゴールは事前に気がつき攻撃を避けるが、俺の目的は他にもあった。

ベルフェゴールが持っている嵐のリングを上に、3階の、獄寺隼人が居る場所に向かつて弾き上げる。

「……………おまえは…」

「ふうん　よくかわしたね。　君……………天才なんだって？（跳ね馬が争奪戦の説明をしてたときに口にしたよ。）始めようか、天才君。」

雷のことは嵐に任せ、俺は俺の好きに戦う。跳ね馬が言っていた外の世界で、天才と
言われている彼に興味がある。俺も存外、戦闘狂だからさ…

「オレもおまえ知ってるよ。エース君だろ？」

「ちがう、一文字もあつてないよ（確か、山本武が雲戦で言ってたんだったか…）」
「……………しし、変な奴……………でも何だか一気に、楽しくなってきた。」

そう言い、ベルフェゴールは数十本のナイフを自分を囲うように、宙に漂わせる。

「ふうん…曲芸でもするのかい？　足ケガしてる分のハンデをあげようか。」
「ごケツコー、だつておまえも足ひきずつてん…じゃん」

その言葉とともに、両者とも戦いを開始する。

最初に動いたのはベルフェゴール、自身を囲っていたワイヤーナイフを操り、360°全方位にナイフを飛ばす。そのいくつかが俺のもとへも飛んでくるが、それは全て叩き落とす。

数を撃つても意味ないよと、ナイフでキズつけようと思つて行つた行動ではなく、それは、攻撃するための下準備としての行動。ナイフの動きも直線的で、簡単に叩き落とせた。

俺はこの行動の意味を知っているので、自分が動きたいときに 思うように動けなくなる原作力はとて厄介だと、改めて思った。俺も何かに縛られる事は嫌いだ。行動を制限され、一方的にキズつけられると分かつているところに行く事も嫌いだ。俺はキズつけられて喜びを感じる人間じゃないもんでね。そういう人間がいる事は知っている。俺的には、いてもいなくてもどっちでも良い、というかどうでもいい。俺の害にならないなら、という言葉はつくけども。

話が逸れた・・・俺が叩き落とした以外のナイフは、俺の後ろ側に建っている校舎に突き刺さった。ベルフェゴールは笑う。

ブシャツ と、俺の左頬と左肩から血が吹き出る。ナイフには当たっていない。

ベルフェゴールは追加のナイフを俺の左右に投げる。俺は移動するために右方向に動くが、そこにもすでにワイヤーが張っており、右側の頬と腕の数力所から勢いよく血

が吹き出てしまう。

流れ出た血で滑り、持っていたトンファーを手放してしまった。そして、足のケガと出血によりバランスが崩れ、後ろに倒れるように座ってしまった。

「ししし、天才の勝ちー つーかオレ負けなし？ そりや王子だもんな。

バイバイ」

そう言い、ベルフェゴールはトドメのナイフを投げってくるが、俺はその数本のナイフを指で挟むように全て受け止める。

「ー」

「へえ、なるほど、ナイフに糸がついていたんだ。まるで弱い動物が生き延びるための知恵だね。そういうことなら・一本残らず撃ち落とせばいいね。」

俺は立ち上がり、トンファーの仕込みを発動させる。

トンファーの持ち手とは離れている方の先から出たのは、先端に尖っている重りが付いている鎖くさり。

トンファーを回すことで鎖も回る。遠心力で強化されたそれは、いとも簡単に壁をも砕くことのできる武器となった。

「や……やっべ……」

「覚悟はいいかい」

今度はこちらの番という意味を込めて攻撃をするが、

「つと…… パース!!」

ベルフェゴールは後ろに下がることでそれを回避する。躲かれた攻撃は校舎に当たってしまい、ドゴオツ!と、音を立てて、校舎の壁の一部が壊れてしまった。

「パスいち! 自分の血ちいーみて見て本気になんのも悪くないけど、今は記憶飛ばしてる場合じゃないからさ。だつてこれ、集団戦だぜ? 他のリング取り行こつと。それに

それだけダメージ与えれば勝ちみたいなものな、バイビ」

そう言い、ベルフェゴールは最後に俺にナイフを投げつけて、その場から離れた。投げつけられたナイフは弾いておく。

「口程にもないな。」

まあ、彼もまだ本気じゃなかったみたいだけどさ……

腕を振って、邪魔な血を落とす。意外と右腕のキズが深く、出血が多い。

貧血になったのか、体がフラついてしまう。倒れてしまわないよう、壁におつかかる。

・血が止まらない……これは、早く止血しないと。ん? ああ、空中で沢

田綱吉とXANXUSが戦ってるのが見えるな。

俺も空中戦してみたいな……いずれ、ロールを足場にして空中移動できるようになるか? まだまだ先は長いな……

そうだ、さっさと止血しないと、確かポケットに入れといたはず……お、あつたあつた。これを腕に巻いて、結んでつと……

止血が終わった時、!!!ドドドン!!! と、とても大きな音が連続して聞こえた。音のした方向を見ると、夜にはふさわしくないほどに明るくなっていた。

XANXUSの技だったよな…… 上手くいってれば、沢田綱吉が死ぬ気の零地点を突破できたことになるか。

なら俺は、そろそろ雨戦のフィールドに向かうとするか。

浮雲 38

ガラツ

雨のフィールドに到着した。

当たり前だが、水は全て抜かれていた。

「ぐっ…ハア、ハア、」

居た、山本武。

毒にやられて倒れているのを見つけた。

「ハア、ハア、！」

ヒバリ… おまえ…」

山本武の声は無視し、ポールを倒す。リングは山本武の方へ転がるように計算した。

「べつに張り合ってるわけじゃねーから」

山本武は手元に転がってきたリングを、リストバンドに差し込む。

これで雨の守護者は動けるようになったな。

「ハア、ハア、 ふ〜 いやーまいった… サンキュ！」

「校舎で死なれると風紀が乱れるんだ。死ぬなら外へ行つてもらおう。」

「あはは、なんだそりゃ」

「…（事実だろ）」

フラ フラ どんつ と、出血は止まったが、貧血なことは変わらないので体がフ

ラつき壁に肩が当たってしまった。

「おい、大丈夫か？」

「何のことだい？」

「……………」

山本武が少し呆れているのを感じるけど、弱みは見せたくないからね…

「交代だ！こつからはオレが引き受けた。」

「…勝手にしなよ。」

「おう！じゃ、行つてくる！」

そう言つて、山本武は走つていった。

…少し、休むか… あ、体育館がブツ壊れる事忘れてた…今更か…

XANXUSが解凍されるまで休めるな。休憩休憩つと。

~~~~~

沢田綱吉は、零地点突破初代<sup>フーリスト</sup>エディションでXANXUSを凍らせた。全身を氷に包まれたXANXUSは、冷凍仮死状態になった。もう、これが溶けることはない、

沢田綱吉は言う。

だが、その場に マーモンが大空以外のボンゴレリングを持って現れ、リングの秘められた力を使い、XANXUSを包んでいた氷を溶かした。

沢田綱吉が持っていた大空のリングはベルフェゴールに取りられ、ヴァリアー側に、全てのボンゴレリングが渡った。

沢田綱吉側の雲以外の守護者も その場に来た。

「受け継がれしボンゴレの至宝よ。若きブラッド・オブ・ボンゴレに大いなる力を！」

大空のボンゴレリングはXANXUSの指にはめられた。

大空のボンゴレリングが、そして他の守護者のリングが共鳴するように光り輝く

「……これは……!!?」

力だ!!! とめどなく力があふれやがる!!! これがボ

ンゴレ後継者の証!! ついに!! ついに叶ったぞ!! これでオレはボンゴ

レの10代目に……」

そのとき、ドクン! という音をXANXUSは耳にした。瞬間、

「!!がっ!!」 !ゴパツ!!?

XANXUSの全身から、おびただ夥しい量の血が噴き出した。

リングがXANXUSの血を拒んだ。その結果がこれ。

XANXUSは9代目と血が繋がっていない。ブラッド・オブ・ボンゴレなくしては後継者として認められない。

その事実を知ったXANXUSは、怒り、決意した。9代目をひきずりおとし、ボンゴレを手に入れると、そのために起こしたクーデター・・・

「9代目は、血も掬も関係なく、誰よりおまえを認めていたはずだよ。9代目はおまえのことを、本当の子供のように・・・」

XANXUSは、沢田綱吉から伝えられる、その言葉は欲していない。だから叫ぶ。

「気色の悪い無償の愛など!! クソの役にも立つか!! オレが欲しいのはボスの座だ  
けだ!! カスはオレを崇めてりやいい!! オレを讃えてりやいいんだ!!」

血で滑り、XANXUSの指から大空のリングが抜け落ちる。

「XANXUS様! あなたにリングが適正か 協議する必要があります。」

「だ…だまれ!!? 叶わねーなら道連れだ!! どいつもぶっ殺してやる!!」

「大人さんせーだボス」「当初の予定通りだよ」

XANXUSの言葉にヴァリアーが追従する。

「どこまで腐ってやがる。やらせるかよー」

沢田綱吉側の守護者はそれを止めるために動こうとする。

俺も、よろめきながらもそこに合流する。

この場では2対5、沢田綱吉側が有利に見えた。だがヴァリアーは、総勢50名のヴァリアー隊が到着する、お前たちは死ぬと言った。

外部からの干渉を認めるわけにはと発言したチエルベツ口をベルフェゴールが殺した。

その結果、チエルベツ口はヴァリアー側を失格と言い、観覧席の赤外線を解除するボタンを押したが、ヴァリアーに細工されてしまっており、観覧席に居た者達は外に出ることが出来なかった。

するとそこに3人のヴァリアー隊が現れた。

「ナイスタイムミング 待ってたぜ。」

だが、様子がおかしい

「報告します。我々以外のヴァリアー隊全滅!!」

3人は息を切らし、ヒザをつく者、倒れる者がいる。

「奴は強すぎます!!鬼神のごとき男がまもなく・・・」

「暴蛇裂覇!!」  
ぼうじゃれつぱ

巨大な鉄球が飛んできて、ヴァリアー隊を吹っ飛ばした。

「取り違えるなよボンゴレ。」

オレはおまえを助けにきたのではない、礼を言

いにきた。」

ヴァリアー隊を全滅させたのはランチアという男。かつて、六道骸に操られ沢田綱吉達と戦った事があつた者だつた。

ランチアが現れたことによつて 不利になつたと感じたのか、ベルフェゴールが沢田綱吉にナイフを投げた。

そのナイフを山本武が防ぐ。

「おっと、そーはいかねーぜ」

クローム髑髏は幻術を使い、幻觉の火柱でマーモンを攻撃する。

「逃がさない」

俺はトンファーから鎖を出し、攻撃する姿勢をとる。

「ねえ、決着つけようよ」

笹川了平も拳を構える。

「いかせんぞ」

獄寺隼人は沢田綱吉の前でダイナマイトを構える。

「10代目！おケガは！」

守護者達は、ベルフェゴール、マーモン、倒れているXANXUSを囲む。

それを見て、ベルフェゴールはナイフを捨て、両手を上げる。マーモンも、もう諦めたようだ。

「役立たずのカス共が……　くそ！　ちくしょう！　てめーら全員!!!呪い殺してやる!!!」

チエルベツロがXANXUSに近づき会話をしている。XANXUSは気を失い、話し終えたチエルベツロが宣言する。

「お疲れ様でした。それでは、リング争奪戦を終了し、全ての結果を発表します。XANXUS様の失格により、大空戦の勝者は沢田綱吉氏。よって、ボンゴレ次期後継者となるのは、沢田綱吉氏とその守護者6名です。」

これにて、大空戦そしてリング争奪戦の幕が閉じた。

皆が勝利の余韻よゐんに浸ひたる中、ただ一人だけは、もうすでに次の戦いに目を向け、ほんの少しだけの期待感、緊張感、恐怖心を心の中に浮かべていた。



## 未来編？

## 浮雲 39

やあ、おはよう

大空のリング戦が、ヴァリアー編が終わり、雲のボンゴリングは今、俺の指にはまっている。

俺は今、とてつもなく、「何かが違う」と感じていた。

違和感と言えば良いのか：こうじゃない感をすごく感じている。

そしてその原因は、約一ヶ月後に理解した。

V S ヴァリアー編が終わって一ヶ月後と言ったら、原作ではもう未来編に入っている時期で、

並中生、つまり沢田綱吉達2年生組が行方不明になっているはずんだけど、どういうわけかそんな事は起こらずに、皆いつも通りの日常を過ごしていた。

ここまですればもう、薄々勘付ける。

そう、俺が居るこの世界は、原作の世界軸では無いという事を。

それと同時に俺の勤が働いた。この世界は、原作で沢田綱吉達が行くこととなる、未  
来世界へ繋がる時間軸だと、

つまり この世界で俺は、原作雲雀さんより強くなれないのだと！

god damn!!

・・・まあ、いいか：                    どんな世界だろうと、俺は生きてくだけだし、

ミルフィオーレという、好きに咬み殺しても良い奴らが   わいてくるとわかってるし  
な。

逆に面白いだろ、この未来世界では一体どんな事が起こるのか、沢田綱吉らはどんな  
成長をして行くのか：楽しみだ

+++++

あれから半月はんつきも経たないうちに、ボンゴレに敵対しているファミリアが徒党とどうを組んで  
並盛町に攻めて来るといふ情報を掴んだ。目的は、時期ボンゴレボス沢田綱吉とその守  
護者の抹殺まつせつ。

その情報を事前に掴んだでいたこちら側は、その敵対ファミリア集団を迎え撃つため

にそれぞれ鍛えることになった。

守護者には各々家庭教師が付き、守護者達はぐんぐん成長していった。

そして、敵対ファミリー集団襲撃日

沢田綱吉とその守護者達、そして家庭教師をするために並盛に来ていた跳ね馬スベルビノとS・スクアアロ、マーモンも手を貸し、俺も、敵対ファミリー集団の並盛への攻撃に制裁を加えるという目的で、共に戦った。

並盛在中組には沢田奈々や笹川京子、三浦ハルなどの戦力外の近くに居てもらい守ってもらっていたようだ。沢田家光どこ行った……

敵対ファミリー集団を無事、大なり小なりケガはあるものの倒すことができ、今回の戦いは終わった。

この戦いの後、ちよくちよくとヒットマンが送り込まれてくるが、それを風紀委員会で片づけるはめなるのはまた別の話。

並盛中学卒業後、俺と草壁、笹川了平は 共に並盛高校に入学した。

並高に入った初日に並高の風紀委員会を乗っ取り、俺は風紀委員長の座の草壁は副委員長の座に就き、並高の頂点にも、当たり前のように君臨した。

風紀委員会の服装はいつも通り学ラン一択いったく。

そして俺の年齢は草壁、笹川了平と同一年という認識になった。

俺ですら自分の年齢がわかってないんだけどな…

あとは久しぶりに、お手伝いさんからの置き手紙を貰って、その内容は、俺が並中を卒業したから雲雀家の当主の座が俺に譲られたということ、その手紙を読んだとき、まず思ったのが「何故に?!？」というのと「当主になつたら何かしなしなきやいけないのか？」だった。まあ、使えるものが増えたと考えることにしたよ。

高校生時は、並盛にちよくちよく来る敵対ヒツトマンを片しながら、風紀財団を立ち上げる準備をし、高校卒業後、並盛中学風紀委員を母体とした、秘密財団（まだ地下はつかない）を立ち上げた。

その頃にはもう、死ぬ気の炎を利用する者、匣兵器ボックスへいきを使う者も徐々に増えていった。そいつらに対抗するために俺は、死ぬ気の炎を灯せるリングと、匣兵器ボックスへいきを集めることに力を注いだ。

そして、リングと匣ボックスを集めるのと並行して、匣ボックスの研究と調査も始めた。

持て余している金を使い、日本、そしてイタリヤに研究施設を建設した。俺が動くとき々と目立つから、施設の件は他の風紀委員に命じた。

そして俺は、オリジナルのボルコスボルクス・ヌーヴヌーヴオラの匣と、死ぬ気の炎を灯せる

トンファアの匣を見つけ、持ち歩くようになった。  
（匣ボックスのレプリカを造る技術は まだ持っていない）

それから数年後、沢田綱吉は高校を卒業してすぐに、ボンゴレボスの継承式をすることにいった。（沢田綱吉らも並盛高校だった）

本当は、沢田綱吉が中学校を卒業したら継承式を行う、という事だったそうだが、それをリボンと跳ね馬が止め、期間が伸び、高校を卒業までという事になったと聞いた。

沢田家光どこ行つた…自分の子供ことだろ、何してんだか…

俺は匣の研究・調査が忙しく、継承式に行くつもりは無かつただけど、跳ね馬が俺の所ところに来て、好きなかだけ、気の済むまで戦つてやるから、その代わりに継承式に出てくれと言つてきたんだ。

その時の俺は、咬みごたえの無い奴らの相手ばかりで、ストレスが溜まっていたから跳ね馬の提案を受け入れた。

沢田綱吉達を狙っていたヒットマンはいくら送り込んで意味がないと理解したのか、その頃には全く来なくなっていた。まあ、今まで来たヒットマンのお陰で風紀委員達にも、ある程度のマフィアの相手も出来るくらいの強さが身についたのは良かった。

もちろん、リング無しの相手に限るけどね。

ああ、そういえば、継承式中にボンゴレに敵対しているファミリーが襲撃してきてね、まあ、撃退は出来ただけけど、この襲撃のために力を蓄たくわえていたのか、敵はリングと匣兵器を大量に用意していてね。

まあ、沢田綱吉達や跳ね馬、ヴァリアー達もその頃には、リングの炎と匣兵器を使っていたから、そのせいで力の差が開くということは無かったよ。(ヴァリアーといっても原作の継承式編と違って スベルヒ S・スクアーロしか来てなかったけど…) まあ、友好度が違うからね)

沢田綱吉と跳ね馬が使う匣は、大空属性の匣では無かったんだけどね。大空の匣は珍しくて、世界中を飛び回っている俺ですらまだ手に入れた事がないぐらいだから。

継承式後に一度イタリアのボンゴレ本部へ沢田綱吉と守護者全員で行って、前のボス及び守護者がそれぞれがやっていた仕事の説明と引き継ぎおこなを行った。

9代目雲の守護者は白髪でヒゲも生やし頭にサングラスを付けているイカツめのしぶいおっさんだった。

それはどうでもいいんだよ。引き継ぎが終わってすぐ、跳ね馬に戦いのことを念押ししてから俺はすぐに並盛に帰った。

と思わせてイタリアにある匣研究施設に寄ってから日本に行き、日本にある研究施設

もいくつか回ってから並盛に帰った。やらないといけないものがいくつもあつたんだよ。周りが俺のことをどう思ってるかは興味ないけど、俺も結構多忙なんだよね。

沢田綱吉達はしばらくイタリアに滞在してたみたいだ。まあ、僕には関係ないけどね。

今回の件で荨麻疹じんましんが出たのは予想の範囲内だったよ。

## 浮雲 40

ここからは展開が早く動いた。

まずは沢田綱吉がボンゴレリングの破棄を実行に移した

僕の耳に入らなかっただけで、だいぶ前から沢田綱吉は、ボンゴレリングを破棄した方が良いんじゃないか、そう口にしていたと後で聞いた。

その次は、黒曜組による六道骸救出作戦

これも原作通り失敗。その後、黒曜組の3人は消息を絶った。

数年が過ぎ、入江正一が沢田綱吉に接触、計画を持ちかけた

僕がその計画を知ったのは、沢田綱吉が僕に協力を頼んできたから。僕としても、マシマロ野郎に好き勝手されるのは気に入らないから協力することにした

過去の自分達に渡すボンゴレ<sup>ボックス</sup>匣<sup>ボックス</sup>は、沢田綱吉自身で用意すると言っていた。超直感<sup>ちょうちよつかん</sup>を使って、それぞれに合う匣<sup>ボックス</sup>でも見つけるのかな。

そして、その計画の一部として、並盛町にボンゴレのアジトを建設することにした



アジトは今の自分達が使うというよりも、過去から来る自分達の拠点としての意味合いの方が強い。だから、医療室や修行場（トレーニングルーム）を多く造ることにしようだ

過去から来る自分達と関わりやすくなるようにと、風紀財団の施設もそのアジトの隣に建設し、群れるのは今でも嫌いだから、不可侵規定もたてた

そしてある日、妙な噂を耳にした

その噂とは、六道骸が倒された、というものだった

僕はその噂の事を調べた。その結果、噂の発信元と、誰が六道骸を倒したのかはわかったが、それだけだった

原作通り発信元は、ミルフィオーレ、倒したのは第8部隊長 グロ・キシニア

これまで、原作通りにしか世界が動いてないこともあって、六道骸が死んだとは考えられなかった

その後、僕の部下が イタリアの空港である男と接触しているクローム髑髏をカメラで捉えた

クローム髑髏が接触した男の身元調べは、哲に任せた

原作を知っている僕だから、今の段階で考えられる事だけど、六道骸はなんらかの方法で、この計画を知ったんじゃないかと思ってる。それだけ、六道骸の動きはこちらに都合が良すぎる

過去のクローム髑髏がこちらに来た時、霧のボンゴレリングは、マモンチエーンを使った時の様に指輪の力を封印されていた。それを誰がやったんだ、という事になるが、過去から来たばかりのクローム髑髏がそんな事をするとは考えられない、自ずと、六道骸がそうしたと考えられる

だが、何故そんなにもタイミングよくリングを封印出来たのか、と、なり、六道骸が計画を知っていたら出来るんじゃないかという考えに辿り着く

まあ、六道骸は他人の夢に入る事が出来るからね。おおかた、入江正一の夢にでも入り込んで、計画を知ったんじゃないかな。邪魔しないなら、べつにどうでもいいけど：

計画開始まで残り数ヶ月、僕は哲を連れ一度並盛を離れた

目的はいくつかあり、表向きの目的は、様々な場所にある風紀財団の研究施設に置いてある、<sup>ボックス</sup>匣や、その資料や研究結果の回収

ミルフィオーレの動きが活発になってきたからその対策、今までの結果を他人に取られたくはないからね。

裏の目的としては、C E D E Fのバジリコンへの接触

この接触は、沢田綱吉に頼まれたために行ったことになる

沢田綱吉はボンゴレのボス、C E D E Fとさえ、1人で秘密裏に会うということが難

しい立場にある。その点僕は、ボックス 匣の調査などで世界中を回っている。何処に居ようが

僕の勝手、最初は文句を言ってくる奴もいたけど、何年も続けていたら周りは諦めた

まあこれが、雲の守護者だと理解したんだろうね。

バジリコンとの接触は2人きりで行った。この接触の事も哲には秘密で、その時は施

設の方を任せていた

バジリコンには、今回の計画のほんの一部と、計画のために行つて欲しい事を話した。

これですけだちのしよ 助太刀の書なるものが作られるのか…

そんなこんなで目的を全て終わらせ、キャバツローネに顔出して跳ね馬と戦つて、空いた時間で特に目的もなくアメリカカ方面に行つて、ミルフィオーレが突つかかつてきたから咬み殺していたら、ある報告を受けた。

『ボンゴレ本部がかんらく 陥落した』『ボンゴレボスが死んだ』

本部が陥落してすぐ、ミルフィオーレは交渉の席を用意し、沢田綱吉を呼びだした。だが奴らは、その席で一切交渉などせず、沢田綱吉の命を奪った。

それからは、ボンゴレ側の呼びかけにも一切応じず、次々とボンゴレ側の人間を殺し続けている。

奴らの目的は、ボンゴレ側の人間を一人残らず殲滅することらしく、現在、全世界のボンゴレ側の重要拠点が同時に攻撃を受けている。そう報告を受けた。

僕は哲を連れ飛行機に乗り、並盛へと向かった

ここからが本番、クリアしなければいけない課題は多い……な。

## 番外

## 雲と大空

これは、僕が並盛から離れる少し前の出来事。

あの時の僕は離れる前に、まだ静かな　いつも通りの並盛を見ておきたい、そう思い町を回っていた。

ある程度見て回り、最後に並盛山に行き　崖の下で崖の上を見上げていた時、後ろから声をかけられた。

「ヒバリさん!!　奇遇ですね　こんな所で!」

「・・・沢田綱吉・・・」

僕に声をかけてきたのは沢田綱吉だった。

多忙な彼が此処に来たことには、少し驚いた。

「何しに来たの。　君、忙しい忙しいっていつも言っただけだった?」

「あゝゝ　あははは・・・」

彼は困ったように笑った

「えーと・・・抜け出してきちゃいました…。  
せてから来ましたよ！ 大丈夫です！」

あ！ いや！

ちゃんと一区切りさ

「そんなに焦らなくていいよ。君の仕事の進み具合に 僕は興味がないから」

「ヒバリさんらしいですね。ですけど！会議！ いつも出て下さいって言ってますよね  
!!? ヒバリさん、全然来てくれないじゃないですか！」

「僕は君達と群れるつもりはないよ。」

「ハハツ・・・いつも通り、ですね。ヒバリさんは…」

いつもと違う、そう感じた。

いつも、と言える程、彼と会うことは多くはないけれど

「・・・君」「いやー、懐かしいですね ここ！」

僕の言葉を遮るように彼は言葉を紡ぐ

「ヒバリさんには言ったことなかったですよね。オレ、昔この崖で修行していたんです  
よ。」

リング争奪戦でヴァリアーが来ることになった時、リボーンに 修行するぞ って言  
われて、死ぬ気弾撃たれて、気がついたらこの崖登ってて。登りきった後は、崖の上で

バジルさんと修行して、そのあとは 死ぬ気の零地点突破の練習。 リング争奪戦の  
あとも、何かあるとここで修行して。

「……辛いことも、悲しいこともあったけど、あの頃が一番楽しかった。」

「……君」「そういえば ヴァリアーが来た時、ヒバリさんって確か デイノさん  
に連れられて、いろんな場所で修行してたんですっけ？聞きましたよ。」

「沢田綱吉」「？」

「はい、どうしたんですか？」

僕は強い口調で彼の名を呼び、言葉を止めさせた

「……どうしたは こちらのセリフだよ。」

「……君……怖いのか？」

「……え、」

「それで隠してるつもりかい？」

「え……そんなに、わかりやすいですか、？  
……誰にも指摘されたことは無  
いんですけど……」

沢田綱吉は苦笑いをする。

わかりやすいかと問われればわかりやすい。

「作ったような顔で、多弁になって、違和感しかないよ。」

「…僕は計画を知っている。だから、君の抱きいだきのような感情に予想がつくだけさ。」

「ははは… さすがはヒバリさん。」

「…そうですね…怖いです。この計画が失敗してしまったらって考えると。」

「世界が減びるから?」

的外れなことを言ってみる。

「いえ… 世界とか、そんな大きなものは 今でもわかりません。…ただ、計画が失敗してしまつたら、オレの大切な人たちが 全員殺されてしまう。それだけは わかります。」

「…だから、それが…怖い。」



今の彼だと勘のいい誰かが何かに気づいてしまうかもしれない。そう思えるほどの落ち込み具合になってしまった。

余計な事を言ったかもしれない…。面倒だ、おっと、前の感情が強くて出てしまった。だけど、このままにするのもね。

・・・僕は、彼の家庭教師みたいにうまくは言えないけども。

「沢田綱吉、君には何がある？」

「?どういう」君には仲間がいる。君はいつも通り、君の仲間を信じていればいい。」  
「!!?」

それだけ言って 僕はその場を離れた。

・・・似合わないことを言ったのは自覚してる。帰ろ…

「・・・そうですね、オレには信じられる人達が沢山います。京子ちゃんや守護者のみんな、ピアンキ達やディーノさん達、XANNUS<sup>ザ</sup>達も、正一くんも、過去のオレ達も。」

「・・・ありがとうございます　　ヒバリさん。もう　大丈夫です！」

＋＋＋

「・・・」

ヒバリさんの言った言葉・・・君の、仲間……。

ヒバリさん・・・そこには、ちゃんとヒバリさんも入っているんですからね。  
それをわかっていますか？

ちゃんと・・・わかってくれていますか？……

## 未来編

### 浮雲 41

「久しぶりだな……。並盛なみもり」

数ヶ月ぶりに並盛に帰って来た

計画がうまくいっていけば、過去の沢田綱吉がこの時代に来てから3日目になる。

並盛に帰って来てすぐ、黒川花くろかわはなから 笹川京子に対する救援要請きゅうえんようせいの連絡がきた。風紀財団とボンゴレの取り決め通り、SOSエスオーエス信号を発する機械（発信機）を取り付けたヒバードを飛ばした。

僕自身は今、並盛神社に向かっている。今いる場所から一番近い風紀財団の施設への出入口が、並盛神社にあるためだ。

神社に着いた後に戦う事になるのは、ミルファイオーレ、ブラックスペル、電光ガンマのY死ぬ気の炎の属性は雷、匣兵器ボックスへいきは、エレットロ・ヴォールピ狐、2匹の狐だそうだ。

僕が今持っているのは、リングが、雲系リング、ランクCが4つ、ランクDが9つ、ランクEの霧系カモフラージュリングが1つ。匣ボックスは、トンファー、ポルコスピーン雲・ヌーヴオラハ、レプリカの雲ハリネズミを2つ。良いリングの殆どは、ミルフィオーレが持っていつてしまつてね。結局、僕の手持ちは、全て原作通りのものになつた。

あと少しで、並盛神社に着く。まだ小さいけど、戦闘音が聞こえる。

今、γガンマと戦つてるのは、10年前の獄寺隼人と山本武のはず…

じゃあ僕も、そろつとγ戦開始といこうかな。

~~~~~

γ side
ガンマ

ボンゴレの嵐と雨の守護者が若返っていたのには驚いたが、実力は聞いてたのより弱

い……

それにこいつら、まだまだ甘ちゃんじゃねーか、1発くらわせただけ気を緩ませて……

それにしても、気になることを聞いた。ボンゴレ10代目は生きているのか？

……これは、教えてもらわねーとな……

だが、この嵐の守護者、ぜんぜん吐かねーな

それだけ忠誠心が高いってことか……

「そろそろ吐かねーと、とりかえしがつかねーぞ（こんなにボロボロになって……めん

どくせータイプか……）」

「だ……が……」

「何か言ったか？」

「ペッ……」

血を吐きかけられた。

「……………（このまま死ぬってか）なるほどそうかい」

持ち上げていた嵐の守護者を投げ捨て、持っていたキューで殴りつける

「なら、ここで死んでいけ。おまえらをうちの白い連中にくれてやるつもりもないんで

ね」

オレの左右に電狐のコルルとピジエツトが浮かび上がり、雷の死ぬ気の炎を発する
 「雨の守護者も今楽にしてやる。あばよ」

シユツ

!!右側から何か来る。

電狐でその飛んできたものを防ぐ。

!!!ドオンツ!!!オオ…ズウウ…バチバチ

(このパワー………何者………)

なにももの

男の声が聞こえてきた

「君の知りたいことのヒントをあげよう。彼らは過去から来たのさ。僕は愚かじや
 ないから、入れ替わったりはしないけどね」

「(誰だ…) ……何やらあんた、詳しくそうだな…… だがドンパチに混ぜて欲しけりや
 名乗るのがスジってもんだぜ」

「その必要はないよ。僕は今、機嫌が悪いんだ……君はここで… 咬み殺す」

浮雲 42

雲雀恭弥 side

10年前から来た獄寺隼人と山本武にトドメを刺そうとしていた電光のγを匣兵器ガンマボックスヘイキを使って止めた。

今、彼らを殺されるのは、少し、困る。

彼を倒す役は 沢田綱吉にやってもらおうと考えていたんだけどな…。

やはり、

原作通りになるのか…笹川京子の独断行動…

ブラックスペルが、今 此処に来る事は 計画の内

入江正一が 上手く彼らを焚きつける事ができた。そういう事だ。

「んん… 思い出したぜ。 おまえはボンゴレ雲の守護者、雲雀恭弥だ」

「だったら？」

「おまえにはうちの諜報部ちようほうぶも手を焼いててね。ボンゴレの敵か味方か… 行動の真意しんいがつかめないとき。だが、最も有力な噂によれば、この世の七不思議にご執心だとか。匣ボックスのことを嗅かぎ回かってららしいな」

「どうかな」

「得えたい体の知れないものに命を預けたくないってのには同感だぜ。で、こいつは、本ほん当とうには誰がなんのために、どうやって創つくったか、真実がつかめたのか？」

「それにも答えるつもりはないな。僕は、機嫌が悪いと言いったはずだ」

「やはり雲雀恭弥は、ボンゴレ側の人間だったというわけだな。いざ仲間ファミリーが殺やられるとなれば、黙もって見てはいられない」

「(？) 何言いってるの() それはちがうよ。僕ぼくが怒こっているのは、並盛なみもりの風紀ふうきが汚けがさられていることだ」

雲ハリネズミの匣ボックスを用意し、Dランクの雲のリングに炎を灯す

「風紀……？ まあいいさ、敵の守護者げきついきりくの撃墜記録げきついきりくを更新するのはうれしかぎりだ。

オレも…男の子なんでね」

電光ガンマのγガンマも、雷のマーレリングに炎を灯し、電狐ボックスの匣ボックスに注入した

開匣かいこうされた互いの匣ボックスから出た匣ボックスアニマルは、死ぬ気の炎を纏いながら空中でぶつかり合う

「ハリネズミとはかわいいが、何てパワーだ・・・ これだけの匣ボックスムーブメントをよくそんな三流さんりゅうリングで動かせる」

「僕は 君達とは生き物としての性能が違うのさ」
パリ：：ンツ と音を上げ、炎を灯した Dランクのリングが砕ける

次は、Dランクよりも 少しでも石の大きさが大きく 性能も少し上のCランクの雲のリングを指にはめ、炎を灯し、匣ボックスを開匣かいこうする

「さあ 僕らも、始めよう」
匣ボックスから出した雲の死ぬ気の炎を纏ったトンファーを構える

僕と彼はぶつかり合う、空中では匣アニマルが拮抗している。

・・・つまらないな・・・ 電光のγ、僕の力量を探る事に意識をさいて、まったく、

油断しすぎだよ。これだからロリコンは

「ロリコン関係ないやん！　いいやんロリコンでも！　それに相思相愛だから勝手にさせてやって！」

「くっ　・・・　ちっ」

彼はリングの力を使い、雷の炎のシールドをつくった

だけど、そんなもの関係ない。トンファーを使いその炎のシールドを破り、そのまま攻撃をし、殴り飛ばす。

「立ちなよ。うまくダメージを逃したね」

土煙が上がる中、彼が立ち上がる

彼は、攻撃される瞬間に後ろに跳び、攻撃の衝撃を逃していた

「ふっ　さすがだ。もし守護者だったなら最強だつて噂も本当らしいな。い

やー　まいった。　楽しくなってきたやがったぜ」

彼は、キューで雷の炎を纏ったボールを飛ばし、いくつも連鎖させ、攻撃してくる

顔を目掛けて飛んできたボールを避ける

だが、その避けたボールが他のボールに当たり、連鎖し、いくつものボールが様々な方向から飛んで来た

「あいにく、このショットの軌道には、人が生きられるだけの隙間はないんだ」

「へえ、それはどうかな（あとは追い込むだけ……）」

左手に炎を集中して灯し、飛んでくるボールを避けながら、彼の元へ走る

「3番ボール」

左前から飛んできたボールを左手のトンファーで受け止める

「ぐっ」　　「ブシャッ！」

トンファーにヒビが入り、受け止めた腕からは血が吹き出る

「ビンゴ」

だけど、そのまま走る

「たしかに全ては避けきれそうにない。だから、当たるのはこの一球だけって決めたのさ」

たとえ油断していても、彼の實力は本物だからね。僕は彼と違って油断はしない

いきなり原作力が働かなくなる可能性もあるからさ。

ボールが飛び回る地帯を抜け、彼のすぐ前までたどり着く

「もう逃がさないよ」

「ふつ、それとこれとは話が別だ」

トンファーを振るうが、ファイアンマF シューズで宙へと飛ばれる

「残念だな」

「…………… (…かかった)」

(……………) ガフツ!

彼は口から血を吐き出した

「…………… な…………… なんだあ…? こりやあ…」

彼の背後には 球体に沢山の針が付いている物体が、その周りには雲のような形をした物体に針が刺さっているものが浮かんでいた。その球体の針に、彼は突き刺さった。電狐も 球体の針に刺さっているのが見える。

「言ったはずだよ。逃がさないって」

「あの…… ハリネズミか……」

「そう…… 君のキツネの炎を元に 彼がこれだけの針を発生させたんだ。 まる

で雲が、大気中のチリを元に発生して拮^{ひら}がるようにね」

「そーか…… 雲属性^{ホックス}の匣の特徴は…… 増殖^{ぞうじよく}……だったな。だが、こんな量の有機

物を増殖させられるなんて、うちの奴からは聞いていない……ナンセンスな匣^{ホックス}だぜ……

「

「すばらしい力さ、ゆえに興味深い。 さあ、終わらせるよ」

両手のトンファーに炎を灯し、彼にトドメを刺しに走る

そのとき、ガサガサと、近くの茂みから音が聞こえ、そこから沢田綱吉と門外顧問の

ラル・ミルチが顔を出した

「遅すぎるよ君達」

一言声^{ひとこゑ}をかけ、そのまま浮いている雲の形をしているものを足場に アツパーの要領で

彼を倒す

着地し、雲ハリネズミを匣^{ホックス}に戻した。

「雷のリングはいらないな（それに、君にはまだ やってもらうべきことがある）」

浮雲 43

電光のγガンマを倒した。

途中から来た彼らに振り向き、声をかける。

「何してたんだい？ 沢田綱吉」

「ヒバリさん!!」

・・・うるさい……

やはり、若いな。今の彼はこの頃より大分だいぶ落ち着きを持つてる。今との見た目の違いは、身長と声ぐらいか。

「山本武と獄寺隼人は その林の中だ」

「！ え!?!」

過去の沢田綱吉は 林の中へと走っていった

僕と共に来た哲てつが、2人の状態の確認をすませてたようだ。

背後から視線を感じ 目をやると、ラル・ミルチがこちらを見ていた。

・・・ア

ジトに入ろうか

「待て、負傷者もいる。今、彼らを抱え あの距離を引き返し ハツチに戻るのは危険だ」

「その心配はいりません。我々の出入口を使えば」

ラル・ミルチの言葉に哲が答える

指にはめていたリングを外し、石灯籠いしとうろうに向かつて歩き、研究施設に入る。

霧系のカモフラージュリング、もつと性能が良いものが欲しかったんだけど、精製度の低いものしか手に入らなかった。

だけど、精製度が低いものをいくつも手に入れて、使うときは 数個同時に使って効果を上げたから、簡単にはバレないように隠すことはできた。

それに 純度の高い僕の炎を使い その分も上乘せできたから 僕が張ったカモフラージュを見破れる者は少ないだろうね。

・・・左腕、血はもう止まったけど服が汚れた。着替えて来よう…

くくくくく

研究施設内・ヒバリの部屋

キズを消毒し、包帯を巻いた。

防御用に炎を集中させていたから、キズの深さはそれほどでもなかった

動かしても問題ないね

するとそこに、

「恭さん、今よろしいでしょうか」

「(その声は哲か、) 開けていいよ」

「はい、失礼します」

襖ふすまを開けたのは、草壁哲矢

「彼らは？」

「山本武、獄寺隼人の両名の治療は終わりました。2人とも命に別状はありません。時期に目を覚ますと思います。沢田綱吉は、その2人の様子を見に行きました。場所は
第二医療室です」
だいにいりようしつ

「そう、わかった」

哲の報告を聞き、立ち上がる

「行くよ」

哲にそう告げ、ボンゴレアジトに向かう

くくく

ボンゴレ地下アジト・B13F 第二医療室

声が聞こえてきた。

「だが、今は死ななきやそれでいいんだ」

「イタイ間違いにぶつかるたびにぐんぐん伸びるのが、おまえ達の最大の武器だからな」

この声、赤ん坊か…

・・・そうだね、今の彼らには 成長力という武器がある。

それをわかっていたからこそ、この時代の沢田綱吉は 過去の自分達を呼び寄せ、白蘭びやくらんを倒す この計画に協力した。彼には超直感があるから、この計画の成功確率の高さも わかっていたのかもしれない。

「つーか、赤ん坊のおまえに言われたくないよ!!？」

「いいかな。話はなし」

「ひいつ ヒバリさん!!」

「会いたかったぞ、ヒバリ」

「僕もだ、赤ん坊（この時代の君はもう居ないから…）」

僕的には、その尻尾の生えたスーツが気になるよ。その尻尾、意味ないよね？

「あの一」

ひよこつ と、医療室とびらの扉から 顔を出すジャンニーニ

「ちよつとよろしいでしょうか？」

「何だ？」

赤ん坊が問う

「グッドニュースですよ！
情報収集じょうほうしゅうしゅうに出ていた ビアンキさんとフウ太さんが
帰ってきましたよ」

「！ フウ太^{!!}?」「アネキが^{!!}?」

ニツ 「言っただろ? ピンチの次にはいいことがあるってな」

「リポーン!!」

医療室に、毒サソリビアンキとフータ・デツレ・ステツレが入ってきた

.....。

今この部屋には、僕、赤ん坊、沢田綱吉、獄寺隼人、毒サソリ ビアンキ、フータ・デツレ・ステツレの6人が集まっている

.....。

「ヒバリさんも何か知ってそうだし——これ以上群むれれば、咬み殺すよ」

「ひいっ!!」

プチッ

バキッ!

「もういい！」

(*、ω、)

帰る

」

無理・・・ 狭せまい部屋に5人も…

情報提供は哲に任せ、僕は研究施設へ帰る。

他の施設から回収してきた匣ボックスや書類を仕舞わないと…

浮雲 44

ボックス
 匣やら書類を仕舞っている途中、沢田綱吉達との会議を終えた哲がが戻ってきた。

哲から会議の内容の要点だけ聞いたあと、休んでくださいと言われてしまい、片付けを任せ休息をとることにした。

にしても、敵アジトの入口をつきとめた、ね……

入江正一は 上手く情報を流せたようだ。

……自分達の力で 情報を得た。そんな言い方のようだったけど、他人が意図的に流した情報を見つけ、持ち帰り、自分達の手柄てがら？ ……笑わらえるよ。

情報がホンモノかどうかは 確かめただろうけど……滑稽こっけいだね。

まあ それは置いておこう。どうせ、この事で嗤わらえるのは僕だけだ。

僕の次の出番は、13日後

それまでに色々片付けないと。数ヶ月ぶりに帰ってきたから やることが多い。

+++++

僕が並盛に帰ってきてから12日後の夜

この施設に赤ん坊がやって来た
話がある、そう言われた。

和室に通し、話を聞く
座布団に座り、向かい合う。

「夜遅くにわりーな、ヒバリ」

「かまわないよ、他ならぬ君からの頼みだからね。それで、話つて何かな」

「ツナの修行についてだぞ。今のツナは この時代のツナの足元にも及んでないだろ？ このまま修行したところで短時間でのパワーアップは望めないと オレもラル

も判断してな。それでだが、明日 ツナにボンゴレの試練をさせようと考えてるんだ。その試練を お前に任せたいんだぞ」

「ボンゴレの試練、ね。この時代の沢田綱吉も受けていたよ。……うん、いいよ。その代わり……」

「ああ、試練が終わった後は あと 好きにしていぞ。それと、……生死は と 問わねえ」

「……ふうん。それは、彼への信頼からかな」

「……」 ニツ

その後、少し話をし、赤ん坊はアジトへと帰っていった。

生死は問わない、か……そこまでの信頼 しんらい。それを、少し羨ましい うらや と思ってる僕は……
欲深い……のかな……

・それよりも明日のことだ。

ボンゴレの試練については、前に少し調べたことがある

この時代の沢田綱吉は、業 ごう を引き継ぐ つぐ ことで、その試練を 乗り越えた

その時の彼の力は、試練を受ける前と比べて強くなり、死ぬ気の炎の純度も 一気に高くなっていた。

試練後に初めて戦った時は、驚いたのを覚えている

その時はまだ ボンゴレリングを砕いていない時で、たしか、継承式後の仕事の引き継ぎを終えた彼が、並盛に帰ってきた時、だったかな。

帰ってきた彼を見かけたとき、前とは違う感じがしたから 肉弾戦を仕掛けてみた

継承式前にも何度か戦ったことがあったけど、明らかに違っていて・・・強さに、と言うより、心、覚悟の変わりように驚かされた。

10年前の沢田綱吉・・・君は、この試練を乗り越えることができるかい？

この時代の君が変わって、日常を取り戻すことができるかい？

沢田綱吉の超直感も、僕の勤も、この計画の成功確率が高いと言っているけど、勤に任せられるほど、今の状況は 良くないんだ。

石橋 は叩いて進まないね。

縛られている僕にはそもそも、叩ける石橋も、迂回できる道も無いから。

浮雲 45

次の日の朝。沢田綱吉が未来に来てから15日目

忘れていたけど、そういえば昨日だったね。C E D E F^{チエデフ}の彼がフランスで入れ替わるのは。

まあ 彼の事は今考えても仕方がない、今そこに行ける訳じゃないしね。

10年前から来る沢田綱吉らと、(時間の差が広がっていないため)コミユニケーションを簡単に取れる様に、過去に戻った時に 彼との力の差が開き過ぎない様に、態々^{わざわざ}過去から連れて来ることにした彼。

そして、過去の彼らを未来に送るために動いているのは、過去の入江正一

計画が始まり、沢田綱吉達^{さが}がその時代で行方不明になり、その彼らを捜すために日本を数周した笹川了平に十年バズーカを当てた後、漸く^{ようやく}日本(並盛)に来るであろう、対応の遅いC E D E F^{チエデフ}の彼に 十年バズーカを当てるのも、入江正一^彼の行うべき事。

バジリ^彼コンが早い段階で未来に来て、その彼を見る家庭教師が居ないため、彼には未

来での戦い方を覚えると同時に、強くなってもらうことにした。

戦いの場をもうけるため、入江正一が時間などの計算をし、入れ替わる場所をフランスに決めた。

あの頃の彼はもう、基礎が出来ていた筈だから、後は実戦での戦いを身につけてもらう、入江正一はそう言っていたわけ：

+++++

赤ん坊との約束のため、沢田綱吉達が居るトレーニングルームに向かっている。哲にはやることがあるため、後から来ると言っていた。

エレベーターに乗りトレーニングルームに着いた。僕が来たことに中学生^彼らは気づかない。

・・気配も消してないんだ、これぐらい気づいてくれないと：

赤ん坊が銃弾を放った。沢田綱吉は超^{ハイパー}モードに変わる。

ふうん、彼の力も覚悟もまだこの程度か… さて、これがどこまで伸びるかな。

オリジナルの雲ハリネズミを使う

開^{かい}匣^こし、沢田綱吉に向けて放った。

それを飛び上がり避^よける沢田綱吉。だが、避けた先は壁、次の逃げ場はない

！ドオン！ と、大きな音を出しながらも、死ぬ気の炎を両手に纏い 雲ハリネズミを受け止めた。

僕は彼に話しかける。

「 気を抜けば死ぬよ 」「おまえは!!?」

「 君の才能を こじあける 」「

「赤ん坊から聞いたとおりだ。僕の知るこの時代の君には程遠いね 」「

「くっ」

ボ、ボ、ボ、と、彼の額の炎がノッキングしだした

『死ぬ気の零^{ゼロ}地^ち点^{てん}突^{とつ}破^ぱ初^{はつ}代^{だい}エ^エディ^{ディ}シ^ション』

彼は雲ハリネズミを凍らせる

だけど、それは予想通りの行動

完全に凍らされる前に、雲ハリネズミは増殖ぞうしよくしていた

増殖した雲は球状に沢田綱吉彼を囲む。

彼は増殖した雲を凍らせようとするが、増殖するスピードは早く、追いつくことができてない。

そして出来上がった物は、均等に針が生えている球体

それを作るために多くの炎を灯した雲のリングが1つ、砕け散った。

壁に刺さっていたそれは、徐々に針が壁から抜けていき、音を立て、床に落ちる。

「ツ、ツナ!!?」「10代目!!?」

彼を心配する声。彼らは赤ん坊がどうにかするだろう

彼らには彼らの修行をしてもらうためにも この球体の説明をする。

「球針態きゅうしんたい。絶対的遮断力ぜったいてきしゃだんりきよくを持った雲の炎を混合こんごうした密閉球体みつぺいきゆうたい。これを破壊することは、彼の腕力わんりきよくでも炎でも不可能だ。」

球体の中きゅうたいのちゆうにいる彼に聞こえるように話す

「密閉みつぺいされ、内部ないぶの酸素量さんそりやうは限かぎられている。早く脱出だつしゅつしないと、死ぬよ。」

「ふざけんな!! てめーら10日ぶりに現れたと思えば 10代目を殺す気か!!」

出しゃがれ!!

忠犬君ちゆうけんくんが騒さわぐ

・・・分わかかつつててないいね

「弱者じやくしやくが土つちに返かえるのは当然当然のことさ、第一だいいち(この)沢田綱吉さわだつなぐさを殺す理由理由があつても生かしておく理由理由が僕僕にはない。」

過去の沢田綱吉さわだつなぐさが死んだのなら、この計画けい画はここまで。僕は僕僕として動き出すだけだから。

「んじゃあ、オレ達も修行しゆぎやう始めるか」

「!!」

「ま、待つてくださいますか!!?」 このままじゃ10代目が!!?」

「わかってるぞ、だからこそヒバリなんだ。歴代ボスが超えてきたボンゴレの試

練には、混じり気のない本当の殺意が必要だからな」

赤ん坊にたしなめられ、彼らはそれぞれの修行に向かった。

(獄寺隼人は引きずられてだけど…)

さて、彼の試練が終わるまで待とうか。

この彼はどうなるかな…

……100% 原作通りになる気がするの僕のは僕の気のせいかな……いや、そうだったらこれからどうなるかわかるから気が楽になるんだけど……

浮雲 46

球針態きゅうしんたいの中から、今まで聞こえていた音が聞こえなくなった。

そして、

「やめろおお!!」

・・始まったみたいだ。

先ほど来た哲が彼の状態を語る

「酸素量は限界です。精神的にも肉体的にも危険な状態だ」

今まで見守っていたラル・ミルチが怒鳴る

「これでは無駄死むだじに以外の何物でもない！ ただちに修行を中止すべきだ!!」

「君だろ？」

手にリングをつけて戦うよう沢田綱吉に指示したのは。

それは

正しい、そして、君の求める沢田綱吉になれるかどうか、彼は極限状態きよくげんじょうたいの中 器を試されて
 いるんだ。 最ももつとこの若さでこの試練を受けた歴代ボンゴレれきだいはいないそうだが

「試練の結果を確かめに赤ん坊も来たようだ。」

球針態の中から声が聞こえる

「やめろ!!? やめてくれ!!」

「いやだ!! こんなひどいことはできない!!?」

「こんな力ちからなら オレはいらない!!」

「こんな間違いを引き継がせるなら……オレが…… オレがボンゴレをぶつ壊してやる
 !!!」

・やはり、君は君なんだね。

球針態きゅうしんたいがヒビ割れ、そのヒビから光が溢れ出る

「なんだ!?? 何が起きている!??」

「恭きようさん これは!??」

「球針態きゅうしんたいが……壊れる」

カッ! つと、先ほどよりヒビが大きくなった球針態から強い光が一瞬溢れ

!!!ドガッ!! 大きな音を上げ、爆発、爆煙ぼくえんが広がる。

爆煙ぼくえんの中に2つの光が見える。

『イクス
XグローブVer.バージョンボンゴレ
V・R・リング』

爆煙が晴れたそこには、新しいグローブを手に入れた沢田綱吉が現れた

「ふうん」「あれは!!?」「超えたな」

「まさか、試練すえんの未の形態ぎたてだとはな」

「オレも半分自信なかったけどな。飛躍ひやくてき的なパワーアップと言われて、この試練しか思いつかなかったのが正直なところだ。あんな答えで試練を乗り越えたのは、歴代ボンゴレでツナだけだろうがな」

「……………」

フオ… ボウツ

沢田綱吉が自身の目の前に構えた拳に 澄すんだオレンジ色の死ぬ気の炎が灯った。

「ワオ（……）までの変化へんかが……」

混じり気けの少ない純度の高い炎は澄んだ色になり属性で色が変わる

それぞれ、大空 オレンジ・嵐 レッド・雨 ブルー・雷 グリーン・晴 イエ

ロー・雲 バイオレット・霧 インデイゴ

そして純粋な炎ほど 属性の持つ特徴とくちょうをよく引き出してくれる。

「少しだけ僕の知ってる君に似てきたかな。赤ん坊と同じで、僕をワクワクさせる君にね」

だけどその彼には、試練を終えてすぐ、これほどの急激な変化はなかったが…

トンファアのボックスの匣を取り出す。

「ここから先は好きにしていんだろ？」

赤ん坊」

「ああ…：：：そういう約束だからな…：：」

「じゃあ、始めようか」

ボックスの匣を開かい匣ごうし、出したトンファアに雲の炎を纏まとわせる

それと同時に僕は殺気を発する。その殺気に赤ん坊以外は押されていた。

さて、沢田綱吉。君というものを僕に見魅せてくれ。

浮雲 47

さあ、闘たたかいを始めよう

「この闘たたかいにルールはない。君が選べるのは僕に勝つか・・・死ぬかだけだ」

「勝かつつさ」

「(その意気はよし、)来なよ」

まずは、沢田綱吉の炎を使った突進を避よける。

続く、先ほどよりも多くの炎を使つての突進を、逆に近づき、腹部ふくぶをトンファーで叩きつけるというカウンター攻撃をし、空中くうちゆうへと叩き飛ばす。

一瞬の内に、吹き飛んでいる彼の背後を取る。

「体が流れてるよ」

「くっ」

彼が指を動かし、炎を使うのが見えたと思いきや、彼の体は炎に押され、下の方へと

飛んで行った。

彼は床に落ち、！ドゴッ！！と、音と煙を上げている。彼が落ちた場所は、クレーターと呼んでもよいほどへこんでいた。その彼は仰向けに倒れており、落ちた衝撃でダメージを負っている。

「何のマネだい？」

彼は新しい炎をコントロール出来ていない

彼は立ち上がり拳を構える。

「ねえ、君。 僕が言ったこと覚えてる？」

「…………… 勝つしかないんだろ？」

（ …… 来なよ。 君には強くなってもらわないと… ）

沢田綱吉は何かの意図があつてか、また同じ動きを繰り返す。炎を使い飛び、高速で突撃して来る。

それを先ほどと同じ様にカウンターを食らわせる。沢田綱吉は数メートル、床を削りながら吹き飛んだ。

ムス…

原作通り……

「僕のポケットから匣ボックスを盗る。そんなことをする発想が思い浮かぶなんて……若いってことなのかな。」

「君にはガツカリだな。弱い草食動物には興味ないよ」

口が勝手に言葉はっを発する

「直接手をくだす気にもならないよ。匣ボックスで……」

盗られたのはレプリカか……

沢田綱吉は「頼む」と言いながら、僕から盗った匣ボックスに炎を注入する。

カチツ ド シュツ!!?

大空属性の炎を纏ったハリネズミは、速いと言える速度で僕に向かって飛び出してきた。

これだよ、沢田綱吉……今の僕にはない発想……やはり君は面白い。さすが

は物語の主人公。

Cランクの雲のリングを指にはめ、もう1つあるレプリカの雲ハリネズミの匣ボックスを開匣かいこうする。

僕が出したハリネズミは雲属性の炎を纏まとっている。

双方のハリネズミはぶつかり合い拮抗きつこうする。

「気が変わったよ。もつと強い君と戦いたいな。それまで少し(修行に)付き合おう」

「・・・で、君達は…ボックス匣ボックスがどうやってできたのか 知っているの？」

ラル・ミルチが答える

「匣ボックスは、自然の中にある形かたちから兵器を作れないかと、4世紀前の生物学者 ジェペット・ロレンツツイニが残した343編べんの設計書もとが元もとになっている。

だが、そこに描かれていたものは 当時の技術では再現できず、長い間 誰からも相手にされぬまま、ジェペットの死後も設計図は紙キレ同然にそいつの秘密結社の倉庫に、3人の発明家が現れるまで眠っていた。

その3人は同じ秘密結社に所属していた イノチエンテイ、ケーニツヒ、ヴェルデ。

そいつらは匣ボックスの動力源にマフィアに伝わるリングから放射される炎が最適であることをつきとめ、数々の技術的問題をクリアし、わずか5年でプロトタイプを完成させ、生物を模もしたオリジナルの343の匣を作るかたわら、新しいタイプの匣ボックスを、保存用の匣ボックス、道具や武器の匣ボックスを発明・開発した。

つい最近まで、やつらは研究資金調達のために今まででは考えられない安価で多くのマフィアに売っていた。

だが、3人の科学者のうち2人が変死。その後、生き残っているケーニツヒは地下に潜り、今も匣ボックスの研究を続け、できたものを闇の武器商人に流しているという。

これがオレの知る最も有力と思われる匣ボックスの情報の全てだ」

「(それが君の持っている 全て の情報かは置いておくとして、) ああ、間違つてはいないよ。だが、どうして匣ボックスができたかという問いに対する 本質的な答えとは言えないな。

匣ボックスを現在に成り立たせた本当の立役者は ジエペットでも優秀な科学者でもない……偶然だ」

「ぐーぜん？ それって…何となくできちやつたつて…ことですか？」

フータ・デツレ・ステツレの質問に哲が説明する

「こういうことです。」

世界的な大発見や大発明には、発明家の身近に起きた偶

然のひらめきを誘発してできたものが少なくありません。

ニュートンが万有引力ばんゆういんりょくを発見した時のリンゴしかり、ノーベルがダイナマイトを発明した時の珪藻土けいそうどに染み込

んだニトログリセリンしかり、もちろん それらのミラクルには偶然を必然とする受け手の準備と力も当然必要ですが。しかし、それらも含めてそのような偶然はそう簡単に起こることはありません。」

言葉を引き継ぐ

「だが、ボックスこと匣

ボックス

開発においては、それが尋常じんじょうでなく

ひんぱん頻繁に起きている

」

「どういうことだ？？」

「我々はそれを調査しているのです」

「知るほどに謎は深まるばかりだね。」

沢田綱吉、明日も楽しませてくれよ。…

覚えておくといい、大空の炎は全ての匣ボックスを開匣かいこうできるが、他属性たぞくせいの匣ボックスの力を全て引き出すことはできない

キイイイ!!

大空のハリネズミは雲ハリネズミに取り込まれ 砕け散る

「悲観ひかんすることはないよ。大空専用の匣ボックスも 存在するらしい」

今日はこちらにておしまい。施設に戻る。

ウーン…

「あ、こ…小僧見なかったっすか？」

「山本武… さーね」

「お！ 小僧!!」

…意地悪失敗…

浮雲 48

あれから 4日目の朝。施設内の一室、広々とした和室にて、僕と哲は会話をする。

「恭さん、マークしていた例の男が動き出したとの連絡がイタリヤから」

「ここへ来るのかい？」

「まだわかりませんが、油断は禁物きんもつ。この情報は沢田側にも提供すべきかと」

「任せるよ。たしか、あれの写真があつたはずだ」

「へい、ヒバードとの撮影に成功したものが一枚」

+++++

例の男が動き出した： ということは今日、黒曜ランドで クローム髑髏とグロ・キシニアが戦うことになつてははずだ。

(例の男 イコール || グロ・キシニアではない)

僕がイタリヤに滞在していた時に、眉を寄せてしまうような視線を何度も感じた。

その視線が、何かに憑依している六道骸のものだと気づくのに、それほど時間はかからなかった。

ボックス ……それにしても：彼、六道骸は、本当に人間なのか疑うよ。

ボックス 匣 アニマルに憑依するなんて。彼の精神はどうなっているんだろうね。

まあ、それができるといふことは、匣 アニマルにも心があり、普通の動物との違い

は、(匣に入るとかを除いて) その死ぬ^能気の炎^カぐらいなのかもしれないね。

ボックス 匣とは、知るほどに面白い物。それが僕の認識かな。

「づお、おおい!!!」

ボックス ……何処かの鯨^{さめ}が吼^ほえているの聲が聞こえた気がした。

+++++

沢田綱吉達に情報を提供しに行った哲が戻り、新たに進んだ現状を報告してもらった。

ヴァリアーからの緊急暗号通信が来た事

イタリアから笹川了平が帰って来た事

過去からクローム髑髏が来た事

そして、10代目ファミリーに、5日後にミルフィオーレ日本支部の主要施設を破壊するという指示が与えられた事

「私見しけんですが、クロームが黒曜ランドにいるという情報は、六道骸からヴァリアーへもたらされたものかと。 笹川了平は、沢田の決断後にここに来ます。その前にクローム髑髏に会っておきますか？」

「いいよ。骸は、そこにはもういないんだろ？」

「へい、おそらく…… それと恭さん、クロームとイタリアで接触していた例の男の身元が割れました。 な名はグイド・グレコ 17歳 イタリア人

15人を殺した凶悪犯きようあくはんで、1年前に脱獄だつじやくしたらしいです」

「ふうん、それってまるで」

「へい……かつての骸 そのものです」

この話が出たという事は、彼、もうじき やられることになるんだろうね… つ
まり、クローム髑髏の内臓が無くなる。それと、クローム髑髏の鞆かばんの中に 発信機が仕
込まれてるんだったよね。あとで行くことになるから、その時にでも回収して 利用
してあげよう。まあ、これらの情報は 前世まえに得たものなんだけどさ。
前世まえと今世いまの情報合わせて1つ言わせてもらおうと… 骸の潜入、計画外なんだよね…

それと、哲が戻って来る前に入江正一から緊急メッセージが送られてきてた。

その内容は『グロ・キシニアがクローム髑髏に何か仕掛けたかもしれないから気をつ
けて』という人任せなもので、へえ、って言うところなんだけど… ．．．それ、もう
知ってる…

浮雲 49

「恭さん！ クローム髑髏が！」

「！」

~~~~~

パリン

「ク……クローム!! 「ああ!!?」

ガラッ

中が騒がしい部屋の扉を開ける。

「ヒバリさん！」 「邪魔じやまだよ」

青い顔をした沢田綱吉を押しつけ、クローム髑髏に近づく

口もと吐き出した血が付着し、その腹はベコリとへこんでおり中に何も無いことがわかる。

彼女に 僕のことを認識させるため、頭を支え 上半身を少し起こさせる。「死んでもらっては困る」

後ろの方で呆気あっけに取られている沢田綱吉含め、部屋に居た者は外に出た。始めよう

+++++

クロームをヒバリに任せることになり、綱吉達は ブリーフィングルーム 作戦室でそれを待つことになった。

その部屋に草壁が入って来た。

「クローム髑髏いちめいは一命をとりとめました」

「本当!? よかったー!!」

その言葉を受けて皆ほっとした。

「ビーやってあの状態から持ち直したんだ?」

リボンが問う

「ボンゴレリングです。雲雀うなががクロームに促したのは、ボンゴレリングそのものの力を



引き出し、己おのれの力で生きること。現在、クロームは自分の幻覚で 失われた内臓おぎなを補っています。」

「そっそんなこと…可能なのかよ!!?」

「ですが、今の彼女の力では 幻覚は不完全…生命維持がやつとの状態だ…」

「あの…じゃあ… 骸はどーなっちゃったの!!?」

「… 骸の行動については、我々よりも ヴァリアーにいた笹川氏の方が詳しいのは?」

「骸からヴァリアーへの指示は一方的いっぽうてきなものだったと聞いている。オレはその指示を信じ 行動したが、骸がどこで何をしているのかは わからんだ」

「クロームへの力が一切途絶いっさいとえたのよ。最悪の事態も考えるべきだわ」

「!!」 ちっ

「そんなあ!!?」

「10代目! あの子ぶとい骸です。まだわかりませんって」

「だが、どっちみち5日後にクロームは戦えそうにないな」

「…痛いな」

「心配するな。クロームの不足分はオレが補う」

そのラルの言葉にリボーンが口を挟む

「そんなこと任せられるわけねーだろ。お前、今 座ってんのもしんどそうじゃねーか」

「！！！！」

「リボーンツ」「何を言っている！！」

今の体の状態を当てられ、焦る

「無理すんな。顔を見れば、お前の体調ぐらいわかる。お前の体は非・7トゥリニセツテ線を浴びすぎてボロボロなんだろ？」

「黙れ！ 過去から来たお前に何がわかる！」

「オレだって地上に充満してる非・7トゥリニセツテ線を肌で感じたんだ。お前のやろうとしてることの無謀さぐらいわかるぞ」

「だが、非・7トゥリニセツテ線を放出してるのはミルフィオーレだ！！ 奴らを倒さなければこの

世界は 正常には戻らない！！」

その決めつけている言葉にジャンニーニと草壁が現在の情報を口にする

「えーと、それについてなのですが…」

まだ原因は特定できていません…

われるのですが… 決定打がなく…」

「我々も同じく…」

どうして非・7トゥリニセツテ線が地上に漂っているのか、ミルフィオーレとの因果関係は恐らくあると思

「いや!! 奴らの仕業だ!!」

少年達は、その強い物言いに気圧される

「コロネロもバイパーもスカルも… 奴らに殺されたんだ!!」

ズキン…

「ぐっ う」

興奮しすぎたラルは倒れてしまう

「ラル・ミルチ!!?」

「大丈夫ですか!」

「さわるな!! 立てるっ」

駆けつけようとしていた綱吉はラルの言葉で立ち止まってしまった

その綱吉に了平が近づき、話しかける

「沢田…5日後だが… これだけ戦力に悪条件がそろつては、おまえが何とか見当がつく… 作戦中止は オレが上に伝えに行こう」

「ただの貧血だ!!」

「無理するな、ラル……」「いえ、やりましょう」

その言葉に皆、綱吉に注目する

「敵のアジトに行けば、過去に戻ることだけじゃなくって、骸の手がかりも何かつかめると思うんです。それに、そのノン・トゥリニセットのことも わかるかもしれないし……でも、どっちもゆつくりしていると手遅れになっちゃう気がして」

「うむ」

「それに……やっぱりオレ……こんな状況に 1秒でも長くいて欲しくないんだ。」

「並盛の仲間はもちろんだし、クロームやラル・ミルチだって……こんな状況、全然似合わないよ!!?」

はっ「えと……あのっ オレはそんな感じですよ……けど……」

「よく言ったぞ!男だ沢田!!」

「……ガキが」

「とにかく」

綱吉は死ぬ気丸がんを飲み、超ハイパーモードになる。

「5日かしか時間がない。一刻いっせきも無駄にはできないぞ」

「はい!!」 「だな!!?」

## 浮雲 50

幻覚を使い内臓を補うことで落ち着いたクローム髑髏を横目に 彼女の鞆の中に入っていた、グリチネの花の形に似た発信機を取り出す。

鞆の中は、砕けた三叉槍さんさそうのカケラが散らばっていた。

ブリーフィングルーム 作戦室に向かうと、中で沢田綱吉が自身の考えを話していた。それを 壁に寄りかかりながら聞く。

も 原作通りの言葉。これからの事に安心はできるけど、縛られているようでムカつく言葉。

ハイパー 超モードの沢田綱吉に頼まれ トレーニングルームに向かう

+++++

数時間後

ガ！ ガ ガガ！ ズガ！ ガガ!!？

僕と沢田綱吉は殴り合っていた。

炎が灯っているトンファアの横薙ぎの攻撃を 身をかがめ避ける彼、

横薙ぎをした腕を使い、払うように攻撃する

それに当たり、彼は宙に飛ばされたが、すぐに 柔の炎を使い 飛ぶ体を止める

そこに追撃

だが彼は、剛の炎を使い 足から突撃してくる

それを片方のトンファアで受け止め、もう片方で アツパーをするように攻撃する

が、剛の炎で もっと上に飛ばれ 避けられる。

ある程度 距離を離れた彼は、また柔の炎で体を止め、まだ空中にいる僕に向かって

くる

それを蹴り飛ばし床に足をつける。

まだ体勢を整えられていない彼に近づき、顎を狙い下から打ち上げる。

彼が打ち上げられるスピードよりも速い速度で跳び上がり 彼の上にもわる

そして、彼の背をトンファアで殴り、彼を床に叩きつける。

！ドゴ　オ!!　と彼は落ち、叩きつけられた床は崩れている。

「いつまで草食動物の戦い方をするつもりだい？」

「!!?」

「君はまだ武器を使っていないよ。沢田綱吉」

「あつ　え？」

彼の額から炎が消える

「眠くなってきた、そろそろ帰る」

「なっ!!?　ちよつと待つてください　ヒバリさん!!?」

僕を引き止める彼をラル・ミルチが止める

「オレの修行から4時間ぶつつづけだぞ。少し休め　沢田」

「・・・は　あ・・・」

僕は哲を連れてトレーニングルームを去る。

+++++



ここは財団施設の一室

床は畳たたみ、四方しほうの壁は全て水墨画のような絵が描かれている襖ふすまの広々とした和室になっている。

その部屋には3人の男が居た。

1人は壁際かべぎわ（襖ふすまの手を掛ける所の前）に座っており、2人は部屋の中心近くで少し距離を取りながら横並びに立ち、片方は顔ごと、もう片方は視線だけ向けていた。

立っている2人の間には、燃えるような気と、冷めるような気が流れている。

「ならば、拳こぶしと匣ボックスを交まじえるまでだ!!」

「僕は構まわないよ」

立っている男の1人は、この施設の主あるじである雲雀恭弥、もう1人は晴の守護者である笹川了平

笹川了平はここへ、雲雀とこれからの事を話すために来ていた。

だが、彼が連れてきた5歳児達を雲雀が自分のテリトリーに入れるわけもなく・・・それが気にさわった彼が雲雀に意を唱え、不穏な空気になっている。

「極限に止めるもの 何もなし!!」

「いいえ、さつきから私が止めてます！　くだらない理由で守護者同士がバトルなどやめてください」

「どこがくだらぬ理由だ!!　オレは屋敷に入れるのにチビ達は出入り禁止とはどういうことだ!!!」

草壁哲矢が止めるも止まらない

「本当は　君だつて入れたくないんだ。　君を見てると闘争心が萎える」  
「何を!!　極限にプンスカだぞ!!!」

「わかりました、わかりました。私が向こうのアジトで　ランボさんとイーピンさんと遊ばせてもらいます。それで勘弁かんべんしてください」

「しょうがない…　ではーラウンドだけだ」

「僕は構わないよ」  
「ダメです!!?　話し合いをしてください!!?」

そう言い残し、草壁は部屋を出て行った

## 浮雲 5 1

哲が部屋を出た後、諫められた彼は 本来の目的を思い出し 戦うことをやめ、僕はここで戦って部屋が壊れることが嫌だったので戦うことをやめた。

話し合った内容としては、彼や僕が持ち帰った情報の事などで、今回の作戦での本部の動きや、過去から来た彼らの事、自分の妻の事などのいろいろな話も聞かされた。

そして最後に僕から、僕の施設のサーバーに流れ込んでいた敵の情報ファイルの情報を記憶装置にコピーし、それを彼に渡した。

それを渡された彼は焦りながらアジトに戻って行った。

なぜこれを先に言わん!!

とか言われたけど・・・ただの仕返しだよ。僕の前で惚気た、ね…

次に話し合うことになるのは 作戦の前日のはず。

その前に、回収した発信機を他の場所に移しておかないと

場所は生活スペースから離れた場所で、数百人は簡単に入れる広さがある所・・・

2 kmほど離れた場所に、倉庫予定地があるはず、あとで回収するとして今はそこに置

いとおこう

+++++

3日後

ここは3日前に笹川了平と話し合いをした部屋と同じ場所

カ：コン

何となく設置した鹿威ししおどしの音が部屋に響く

今 この部屋に居るのは、僕こと雲雀恭弥、草壁哲矢、笹川了平、ラル・ミルチの4

人  
皆みなで 明日あすの事を話し合うため集まった。

僕は少し距離を取って座っている

笹川了平が口を開く

「いよいよだな。ヒバリ！」

明日あしたは我ら年長組、いいところ見せんとな!!？」

「いやだ」

！ガチャン！！？

「落ち着いて笹川さん！」

「放せ！！ 中坊ん時から成長せん男め！！」

湯飲みを倒しながら こちらに突っかかってきた彼を 哲が羽交い締めで止めた  
君もそれほど成長してないと思うけど。それに

「僕の目的は、君達と群れるところにはない」

「くっ」

「ラル・ミルチ。あなたは明日あす どうするのですか？」

「無論、出る。戦力は多いに越したことはないからな」

「その体調で無理をするな！！？ 小僧だってアジトから出るのを断念しているのだぞ

！！？」

「死にたきや死ねばいいさ（勝手にしなよ）」

「ヒバライ！！ お前には思いやりの心はないのか！！」

「笹川さん！」

またもや吠えた彼を 哲が抑える

するとそこに、

「もりあがってるな」

帽子を取り、着物を着た赤ん坊がやってきた

「どーなんだ、草壁。明日の突入作戦のシミュレーション結果つてのは出たのか？」

そのためにオレを呼んだんだろ？」

「はい、明日の作戦の成功率をハイパーコンピュータで試算しさんしました。敵施設の規

模から人数を割り出し、ミルファイオーレ構成員の平均戦闘力を入力し、他の要素をかけ

合わせた結果・・・成功率、わずか0.0024%

。これはラル・ミ

ルチの戦力も含めて 高く見積もった数字です… 他の要因による補正も考えられるが、どれもこちらに旗色の悪いものばかりだ」

「ま、そんなもんだらうな」

「ちなみに、ヴァリアーは成功率が90%を超えなければミッションを行わないと聞く。

もつとも、ヴァリアークオリティを持つ彼らの基準ですがね」

「一流いちりゅうのプロつてのはそういうもんだ。現実性を最優先とし、無謀な賭けなどしない

……………」

「ふつ、奇跡でも起きなければ成功しない数字か… 沢田達には黙っておけ、士気にか

かわるぞ」

「今更シヨックを与えても、他の選択肢はないのだしな…」

「賛成です……」

「つてより、無意味な数字だな」

赤ん坊のその言葉に 僕以外の3人が反応する

「完成されたプロなら 戦闘力や可能性を数値化することに意味があるだろう。だが、伸びざかりのあいつらを計算に当てはめるなんてバカげてると思うぞ。数値化できねーところに、あいつらの強さはあるからな」

## 浮雲 52

話し合いが終わり彼らは彼らのアジトに戻って行つた。

そしてまた、入江正一から緊急メッセージが送られてきた。

急いでいたか、隙を見てたからか知らないけど、メッセージの文字が所々<sup>とこところ</sup>抜けていた。誤字だと思われる所がいくつかあつて、焦る理由は予想できたけど、イラツときた。

読めない部分もあつたけど、前世<sup>まえ</sup>の情報と合わせ、読み取つたところ、敵が1人増え、そいつが計画の害になるなら倒してほしいという事と、ボンゴレアジトの位置がミルフィオーレにバレ、攻撃を仕掛ける事になつてしまつたという内容だつた。

増えた敵というのは麻呂<sup>まろ</sup>眉<sup>まゆ</sup>こと幻騎<sup>げんき</sup>士<sup>し</sup>だろうね。

まあ、僕にとってそれは計算内だつたから別にいいけどさ。

アジトバレの攻撃に関しては、敵が来るのは夜明け頃になるだろうから、その前に睡眠をとっておこうか

さて、もうすぐだ。



十  
十  
十  
十  
十  
十  
十  
十  
十  
十

夜明け前・風紀施設の自室

カ カカ カ

ん…なんだい？

今まで寝ていたのだが、廊下から聞こえる音で目を覚ました。  
立ち上がり、襖ふすまを開けて廊下を見ると 1匹の猫がフラつきながら歩いていた。

この猫・・獄寺隼人の匣ホツクス兵器・・また逃げ出したのか

この時代の彼も、よく逃げられて 探し歩いていたな

猫に声をかける

「君、こんな所にまでどうしたんだい？」

「にや おくん」ゴロゴロゴロ

猫は僕が出した手に擦り寄り 喉を鳴らす

「酒臭いよ、君。 酔ってるのかい？」

「によおん」

ハア、もう数時間で作戦が開始するのにな。まあ、ちょうどいいか。  
猫の後ろ首を掴み上げ、彼らのアジトへ向かう

というかこれ、原作にあつたよな：

~~~~~

真つ暗な廊下を歩く、ガリガリガリと猫が壁を引つ掻いて暴れている。

彼らの寝室スペースに近づくと、部屋の中から、赤ん坊、沢田綱吉、山本武が出てきた

「酔っぱらって僕の所まで来たよ」

「ヒバリさんと獄寺君の猫ー!？」

うるさいよ

「ああつ!!? てつきりボックス匣に戻ってつかと」

獄寺隼人も部屋から出てきたのを見て、猫を手放す

「何してやがったんだ…瓜うり!!?」

……この時代の君と同じ名を付けたんだ

目の前の彼は猫に引つ搔かれている

「君達……風紀を乱すとどうなるか知ってる？」

トンファーを出して脅すと、赤ん坊以外は焦り出す。でも、

「……眠い……今度ね」

「ま……待てヒバリ!!??」

来た道を引き返していると、獄寺隼人に声をかけられた

「あ……あんがとな……。いずれ、この借りは返す……ぜ」

「期待せずに待つよ。獄寺隼人」

「なっ 期待せずだと!!??」

「あ、ヒバリさん！ 明日……一緒にがんばりましょうね」

「いやだ」

沢田綱吉の言葉を一蹴する

「僕は死んでも君達と群れたり、一緒に戦ったりするつもりはない。強いからね」

「おやすみ」

そう言い今度こそ施設に戻る

そろそろ準備をしようかな

浮雲 53

太陽が顔を出し、辺りを照らし始めた時間

土竜型もぐらの匣ボックス兵器で地面を掘っていくと、土の中から鉄板が現れた

「敵アジトの天井部分と思われる防壁を発見!!?」

「B・C班ビーシーも同じく防壁を確認!!?」

「これより、ボンゴレアジトに攻撃をしかける。カウント3スリーで防壁を爆破し、一斉に突入

せよ!!?」

「了解ラジヤ」

「カウントを開始する」

「3」

「2」

「1」

「爆破!!」

防壁にしかけた爆弾をカウントに合わせて爆破させる

爆弾による火柱が3つ上がった

「全隊突入!!」

その声と共にブラックスペル、ホワイトスペルの双方が開けた穴へと飛び込んでいく
「ボンゴレリングの回収を優先せよ。守護者は生け捕りだ」

「抵抗する場合はいかなさいますか」

「.....殺せ」

「了解!!?」
ラジャ

だが、爆煙が晴れた時、兵隊達は気づく

「なんだここは……?」

「大広間か……?」

その空間には何も無い、ただの四角い部屋

すると、ガシヤン! と、入ってきた穴が 穴の周りから伸びてきた棒によつて

格子状に塞がれた

「なっなんだ!!?」

格子の上に何かがいる

「弱いばかりに 群れをなし、咬み殺される 袋の鼠」

「わ!!? 畏だ!!」

+++++

雲ハリネズミとトンファーで、数百はいる敵を咬み殺していく
雑兵と言ってもリングと匣兵器を所持した相手、こちらもリングを消費する。
だが、所詮は草食動物。僕のような肉食動物に 傷を負わせることなどできない

片が付くのに、それほど時間はかからなかった。

+++++

敵から送られてきた偵察部隊を咬み殺す

こいつらの姿を使い ミルフィオーレ基地に潜入する

基地に向かうのは、僕、草壁哲矢、クローム髑髏、そして 哲の背負うリュックに5
歳児達が入ることになる。

潜入できるまでは おとなしくしてようと思う：

+++++

入江正一 side

「幻騎士と山本武の接触も成功したな。

ガンマ Yは相当 負傷しているようだが、晴の守

護者 笹川了平を倒し、嵐の守護者 獄寺隼人も満身創痍に追い込んだ。充分に役割を果たしたと言える。 やればできるじゃないか。 残りの鼠など、幻騎士さえいればどうともなる」

そんな独り言の多い入江に部下から報告が入る

「入江様、司令室より報告が2つ」

「何だ？」

目の前の大きな画面に通信映像が映る

『入江様！ ボンゴレアジトから偵察部隊が帰りました』

「帰った？ 今まで報告はなかったのか？」

『雲雀に感づかれ 無線を破壊された模様です。ニコラ隊長に代わります』

画面が移り変わる

そこには 負傷し、包帯を巻いている男が3人映っている

『入江様、雲雀恭弥との戦闘は継続中!!? こちらの負傷者は相当な数です。』

で

すが、現時点ではこちらが優勢!!? 雲雀を倒すのは時間の問題です!!?」

「そうか、相手を考えれば満足すべきなのかもな… ご苦労…休め」

その通信を切る

「2つ目の報告は何なんだ?」

『ハッ』

『スパナ氏のモスカの戦闘記録ブラックボックスを調べたところ、スパナ氏の言っていた ボンゴレ10代目が用水路に落下したというデータはありませんでした』

「…何だと? スパナは何と言っているんだ?」

『それが、連絡がつきません!』

「どういうことだ!!? スパナを叩き起こしてでも事情を聞け!!?」

「もうやつてるよ、大将。ところがやつこ奴さんの部屋はもぬけの殻だよ」

画面に新たな映像が映る

そこは酔花スパナと文字が書かれた絵が飾ってある部屋、その部屋にいる白色の服を着た2人

「アイリス!!? ジンジャー・ブレット!!?」

『しっかし、驚いたよ。この基地がビックリパズル構造になってたなんてさ』

「嫌味なら後にくれ!!? スパナはどこだ!!?」

『この基地内のどこかにボンゴレと共にいる可能性が高いです。ボンゴレをかくまっている可能性もある』

「なあ!? スパナが裏切ったというのか!?!?」

『私達は今から奴とボンゴレを搜索するつもりだよ。了解してくれるね?』

『もし、スパナ氏が寝返っていた場合はどうしますよ♪』

「……………抵抗するようなら殺してもかまわない。白蘭さんには僕か報告しておく」

「やっぱ、この基地の大將はあんたしかないね♡^{ch}_u」

浮雲 54

哲達と別れ、ミルファイオーレ基地を 記憶していた地図の通りに歩く。道が無い場所は 壁を壊しながら進む

またもや 壁に当たった

雲ハリネズミの匣ボックスをDランクのリングで開かい匣こする

リングは砕ける

巨大な球体になった雲ハリネズミに 壁に体当たりさせる

ビ キッ！ ゴゴゴゴ ゴゴゴ

!!ド オオツ!!!

空あいた穴から隣の部屋に入る

隣の部屋には数本の剣を腰に差している男がいた

「（幻騎士……）ああ、君…… 丁度いい。白く丸い装置はこの先だったかな？」
 「ボンゴレ雲の守護者、雲雀恭弥か……。その問いに答える必要はない。貴様は
 ここで死ぬのだからな」

雲ハリネズミは匣ボックスに戻る。

相手ボックスが匣かいこうを開匣すると、周りの景色がジャングルのような植物だらけのものに変
 わっていく

「ふうん、どうやら君は霧の幻術使いのようだね。君に個人的な恨みはないけど、
 僕は術士が嫌いだね。 這いつくばらせたくない」

Cランクの雲のリングを指にはめ、炎を灯す

幻術対策として、炎を薄く広範囲に放射し、反射による炎の揺らぎを感知させる。

ほとんどの術師は 目に見えない攻撃を得意とするからね

幻術は五感や機械を騙せるけど、風や炎、水なん何かは、意識せずには術の影響下に置く
 ことができない、そこまで意識する術師はほとんどいない、まあ、一度ネタが割れば

対策されるものではあるけどさ。

「雲雀恭弥……ボンゴレ最強の守護者だという噂は聞いている。それが真かどうか、確かめよう」

放射している炎を切るように動くものを感知

!!? 何かくる

跳び上がりそれを避ける

もといいた場所が爆発した

次は左側から

宙^{ちゆう}では避けられない、匣^{ボックス}を開匣^{かいこう}し、増殖させた雲を盾にしてそれを防ぐ

「よく見えぬはずの攻撃を……まぐれか?」

着地した僕に、幻騎士は霧の炎を全身に纏い、剣を2本構えながら向かってくる

だけど……違う……

トンファアーの匣ボックスを開匣かいこう、上からの攻撃を片手で防ぐ

「幻術には詳しいんだ。嫌いだからこそね」

さきほど開匣かいこうした雲ハリネズミが幻騎士に突進し、壁にめり込むリングが砕ける

「行こう」

移動しようと思ったが

キュウウ!!?

！ド オツ!!?

雲ハリネズミが風船のように割れ、幻騎士が中から出てくる
出てきた幻騎士は足を天井にある蔦つたに絡ませ 逆さまになる

「なるほどできる。貴様ならオレの好敵手になりえるかもしれんな」
無傷な幻騎士が話しかけてきた

「それはどうだろうね。 僕の好敵手には そう簡単にはなれないよ。 君にそ

の資格があるかは、まず、その横行わうぎやう な霧の幻術を 解いてからだ」

一度、雲ハリネズミを匣ボックスに戻し、新たにリングをはめ 2つのレプリカ雲ハリネズミの匣ボックスを開匣かいこうする。

出てきた雲ハリネズミに 幻覚でできた周囲の植物を破壊させる

「君の幻覚は 頭の中の想像を映像化したものだ。映像処理が間に合わない程の負荷を君に与えたら？」

雲を足場にし、高い位置にいる幻騎士を攻撃する

一撃一撃に力を置くのではなく、手数を増やしての、意識を割かせるため攻撃
雲ハリネズミ達は幻覚の植物をドリルのように削っていく

互いに互いを弾き、距離を取る

「・・・縦ほじろびはじめたようだね。これが君の匣兵器」

ポトポトと、何かが落ちてくる

「幻海牛スベットロ・ステイブランキ。姿を見たのはおまえが初めてだ。そして、最後の人間となる」

落ちていた海牛が空中で停止。一斉に僕に向かって霧の炎で姿を隠しながら飛んで

くる

新たなリングをはめ、炎を薄く広範囲に放射し、避ける

幻覚を構築する海牛自体が 破壊力を持った誘導兵器…

次の攻撃を2つの雲ハリネズミで防ぐ

雲ハリネズミは匣に戻り、リングは碎ける

「読めたぞ、リングの炎を レーダーの代わりにしているのだな」

ろっ
ろっ
……残るリングはCランクが2つに Dランクが1つ…時間もない、あれをや

「だが、タネさえわかれば恐くはない、対処すればいいだけの話だ」

「いいや。もう その必要はないな。 君は かつて味わったことのない世界

で、 咬み殺してあげる」

残りのリングを指にはめ、3つ同時に炎を灯す

その炎を全て、1つの匣ボックスに注入する。

無理矢理の注入のため、匣ボックスにはヒビが入っていく

「匣ボックスを殺してしまわぬように炎を注入するのが難しくてね」

グシャツ つと、匣ボックスは注入口が潰れ、パリンと砕けてしまうが、匣ボックス中からは 光を放

ちながら 半透明なハリネズミが姿を現す

「裏うら球針態きゅうしんたい」

半透明なハリネズミは僕を包みながら大きくなっていく

これから行うことを察したヒバードは胸ポケットから飛び立つ

ハリネズミは、幻海牛、鋼鉄の柱、倒れている山本武を弾きながらどんどん大きくなる
弾かれてないのは、僕と彼のみ

「戦う人間以外は、展開される匣兵器もすべて排除する、絶対遮断空間ぜったいしゃだんくうかん。それが、

裏うら 球針態きゅうしんたい。 密閉度の高い雲の炎で作られたこのドームは頑丈にできていてね。

長時間 僕に背を向けて破壊のみ集中しなければ 脱出はできない」

「なるほど… これスベットロ・ステイブランキで幻海 牛の幻覚を封じられたということか……!!? うっ」

幻騎士は急な環境の変化にうめく

「球針態をつくる時は 雲の炎の燃焼に多大な酸素を消費するんだ。そして、これを維持するためにも酸素は急速に減り続けるよ」

「……四方を囲む無数のトゲと 酸欠状態でのデスマッチか」

「手っ取り早く終わらせたくてね。スケジュールがつまってるんだ」

「うそぶくな。貴様の戦い方を見て気づかぬとでも? この空間は リング不足を

補うためのものだ。リングを使い果たし、匣兵器での戦いに不利になる前に残りのリングを全て使いこの空間をつくり、肉体での戦いに持ち込む魂胆だな。よほど体術に自信があると見える」

嘘はついてないよ。君の考察は4分の3正解

「よかろう…。スベットロ・ステイブランキだが 自信があるのが自分だけとは限らんぞ。誤解しているよう

だが、幻海 牛の幻覚は剣技を補うものではない。その強すぎる我が剣を隠すため

のものだ」

「ふうん、つまり、これでやつと君の本気が見れるわけだ」

「貴様のもな」

幻騎士が向かってくる

「奥義・四剣」

ビュ！オツ！！？

彼は足で剣を使い攻撃をくり出す

上段の剣をトンファーで防ぐ

両手でもそれぞれ剣を持ち、攻撃してくる

お互い弾かれる

弾かれた勢いそのままに トゲの先端に頬が触れ、血が垂れる

戦いは続く

打ち合い、斬りつけ、防ぎ、叩き飛ばす
だが 双方とも傷つくことはない

幻騎士は幻術で構築した 鏢ひょうのような物を投げつけてくる

ニッ

僕は構築した物を見て トンファアの仕掛けを使う

トンファアから羽型の刃が立ち上がり 疾風しつぽうを起こしトンファアが回転する。一種のシールド

シールドに弾かれ、投げつけられた物は地に落ちる

双方、一旦距離を取る

幻騎士の息は荒い

「だいぶ息が上がってきたね」

ハア ハア 「なぜ、笑っていられる」

「？」

「裏 球針態とやらは 匣兵器こそ封じたが、リングの力を封じてはいない。リングを

持つ者と持たざる者の力の差は知っていよう。体技がほぼ互角だということは今わかったはず。リングを持たぬ貴様に勝機はないのだぞ」

「確かに君の強さは予想外だったよ。君のおかげでスケジュールにも狂いが出たしね。でも、それ以上に久しぶりに血をしたらさせた姿を見たくなるほどの獲物に出会えてうれしいんだ。これで強力なリングがあれば文句はないんだけどね」

幻騎士はリングに炎を灯し、こちらに向かって走る

「よかろう、手加減せずに葬ってやる」

僕も距離を詰める

武器を合わせたとき、僕のトンファアの先が焼き切れた

「硬度の低い霧の炎も 一点に集中すれば、鋼鉄を焼きちぎるなど造作もない」
ニツ 「知ってるよ」

幻騎士は方向転換をし、またこちらに向かってくる

何度も何度も打ち合う

その度たびにトンファアが焼き切られ 短くなっていく
防ぐ物が無くなっていき、体が斬りつけられていく

「いいね」

「貴様…死を望んでいるのか？」

「どうして僕が？ 咬み殺されることになるのは君なのに」

「!?」 この状況で何を言っている!!？」

最後のトンファーも弾かれた

「（こんな獲物を咬み殺せる彼が）うらやましいな」

「くっ」

幻騎士は恐怖する

雲雀の目に、雲雀恭弥という男に

「ええい!! 死ねい!!!」

トドメを刺すため、左右同時に剣を振り下ろす

まかせたよ…

浮雲 55

「ええい!!? 死ねい!!!」

雲雀恭弥を斬りつける

ズ バツ!!

そうすれば、裏 球針態と言った匣兵器でできたドームが崩壊を始めた

ハア ハア

殺^とった…

確実に雲雀を殺した

これでボンゴレも終焉だ…

あたりにはドームの残骸が残り、煙が漂っている

そこに 頭上から声が聞こえてきた

「ミードーリー タナービクー ナーミーモーリーノー ダーイナーク ショウーナ
ク ナミーガーイイー」

雲雀のトリか…

その鳥を目で追っていると、誰もいないはずの煙の中から出てきたものに 羽を下ろした

「!!」

煙が晴れていく…

「ふあくあ。さわがしいなあ…。 君…誰? 僕の眠りを妨げるとどうなるか

知っているかい?」

…あどけなさの残る顔… あの姿… 10年前の雲雀恭弥!!?

++++
++++
++++
++++
++++
++++
++++
++++
++++
++++
++++

10年前世界・雲雀恭弥

ヴァリアーを退けてから数日後に 沢田綱吉達2年生組が行方不明になったと報告を受けてから、3週間は過ぎた

行方不明になって2週間目ぐらいから、並盛に部外者が増え始めた

まあ、俺はその2週間目から1日のほとんなどを跳ね馬とのバトルに費やしてるから部外者との接触は全く無いんだけどね

どうせあれだろ？

沢田綱吉とリボン探してる ボンゴレとチェデフだろ

接触してないのに知ってる理由は、町の人と風紀委員からの報告を受けたから。

そういえば、バトルの休憩中に跳ね馬からリングの炎についてうるさく言われた。

これからの戦いに重要になると、そして、リングの炎を大きくするのはムカツキだと。

心の中でツッコんだよ。「違う!!?」イコール「つてさ。」

でも、跳ね馬から見たら俺のムカツキイコール「覚悟なんだね。」

…それもそうか、表面は原作雲雀さんと同じで内面を見れる者もない、そりゃあ原作と同じになるか…

そのあとあまりにもしつこい跳ね馬を咬み殺して、その日のバトルは終わった

次の日

跳ね馬は用事があるようでバトルができないと事前に聞いていたから、今日は朝から並んで風紀委員会の仕事をしていた。

昼頃

仕事が一旦終わり、1人 屋上で昼寝をしていた

しかし、

!??……ワオ…

瞬きのように、パツ と視界が明るくなると 周りの景色は先ほどいた場所と全く違っていた。

つまり、

目を覚ましたら俺は、見たことはある神社の前に立っていた。

既視感^{きしかん}…

目の前には、それほど大きくない神社があり、俺が立っているとこの左右には、俺の背の1. 3倍くらいのおおきさの石灯籠^{いしとうろう}が置いてある。

手を見てみたが、いつも通りの 今世の手だ。

辺りを見渡してみると 多くの木が生えていて、石階段が下の方に続いている
よく見ている場所、ここは並盛神社だということがわかった。

俺は、自分が何故ここにいるかは わからない

並中の屋上で昼寝をしていたはずなんだが・・・

夢遊病でも発症したか？ 俺が？笑える

だが、今のこの状況、似たような事は前にもあった。

それに、この状況、前世で読み覚えがある。

そう…今の俺はてんい「ただの夢じゃ」

・ん？「今のおぬしの状況は屋上で昼寝をし、夢、つまり精神世界でワシと再び相
まみえた。という状況じやな。」

聞き覚えのある幼い声が聞こえ、神社の方に目をやると、賽銭箱の上に 金髪ツイン
テールのロリっ子が座っていた。

「幼いとは何じゃ、幼いとは。前は可愛いと言ってくれたのにお。おぬし、ちと冷たくなつたんじやないのかあ？」

「あの時から約10年経つてるんだ。考え方ぐらい変わるさ」

俺は懐かしむように

ロリっ子はニヤリと笑いながら俺を見ている

「そうじゃのお、人の時の流れは速い。前あつた時、おぬしは一度も口を開かんかつた。それが、今はこうしてワシと話しておる。いや〜おもしろいのお」

「それで?何の用があつて現れたんだ、もうすぐ未来に飛ばされるはずなんだが」

「おぬし、今ワシのことを何と呼ぶかで迷つたじやろ」

「うるさい、咬み殺すよ」

賽銭箱の上で、歯を見せながらニヤニヤしだしたロリっ子にイラつとし、トンファーを構える

「まったく、せつかちなのは変わつたらんようじやの。前もパツパツパと話を進めていきおつたし」

「・・・ようけんは？（この年寄り、話が長い…）」

「だーれが年寄りじゃ！」 「いや 年寄りだろ（色々と滲み出てるし…）」
「むう〜！」

ロリっ子は俺に小走りで近づいて来て、ポカポカと効果音が聞こえて来そうな感じで叩いてくる

無論、痛みは無い

〜しばらくお待ちください〜

「それで何じゃが。今回、こうしておぬしの前に現れた理由はな、おぬしと久しぶりに話をしたかったから何じゃよ」「帰っていい？」

「いや!!? 待つんじゃ!!?」 それだけでは無い! 当たり前じゃ!!?」

ロリっ子は涙目になりながら俺を睨みつけてくる

（見た目だけは可愛い）

「うぐつ・・・オホン!!」 もうひとつの理由としてはじやな、おぬしに聞いて

おきたい事があったから何じゃよ むしろそれが本命じゃ」

「聞いておきたい事？」

「そうじゃ。おぬしがこれから行く未来世界。その世界のおぬし、つまり、パラレルワールドに居る 雲雀恭弥に成り代わった10年後のおぬしの記憶に関してじゃ」

「記憶に?それより、未来編の雲雀恭弥は俺何だな」

「そうじゃ。ごありあーと戦った後から分岐しとる。口調などが雲雀寄りになつとるよ」

「ふうん。それで? 記憶つてどういう事だい?」

「お、今のは雲雀ほかったぞ。 記憶というのはじゃな、原作にあつたじゃろ? 未

来編終わりに あるこばれーの が 一緒に戦った仲間達の未来の記憶を過去の者に伝える、というやつじゃ。ワシの力で、未来のおぬしの記憶を 今のおぬしに与えようかと考えているのじゃよ」

「未来の記憶を僕に?」

「そうじゃ。ごありあーとの戦いが終わってから おぬしと入れ替わるまでの記憶を」

「ふうん. . .」

「どうじゃ? 原作では描かれていない視点を楽しめるんじゃないかの? その世

界のおぬしは、けっこう楽しんでたようじゃしのお」

「・・・いらない」

「? 何と言ったんじゃ?」

「いらないと言ったんだ。俺にその記憶は必要ない」

「そ…そうか? おぬしなら欲しがると思ったのじゃがお?」

「そうだな…欲しいとは思うけど、俺の何かが変わってしまう気がしてさ… やめとくよ。 記憶の範囲もわからんし」

「そうか…わかったのじゃ」

「いや、欲しいは欲しいんだけどさ…ほら、今と戦い方も違うし、抱く感情とかも変わるだろ? それに経験した事が違うなら、もうそれは俺じゃねーし…一言で言えば、何かヤダ ってことだな」

「嫌、か… まあ、ワシもムリにとは言わんよ」

（んくもつたない気もするけど、なんかヤなんだよなあ…）

「お! 現実世界で 動きがあつたようじゃ」

「動き?」

「そうじゃ。どんな動きかというとな、おぬしに向かつて 10年バズーカが撃ち込まれたというものじゃ」

「は？？」

「じゃーのー」

ロリっ子はこちらに手を振ってくる

「まー！ シュンツ！」

ロリっ子の目の前から雲雀が一瞬にして消え去る

どうやら未来世界に飛ばされたようだ。

残されたロリっ子は目を細め、雲雀が居た場所を睨みつけてた

「・・・行つたようじゃの・・・」

ハアー

険しい表情のまま深いため息をつく

「あそこで素直に記憶を欲しがってあげればいいものを・・・少しでも拒絶の感情があれば、記憶の統合は出来ん・・・」

目的の為には、あやつに1分でも、1秒でも長く、人生の記憶を与えねばならん……」

ハア―

また、険しい表情のまま深いため息をつく

「……死んだ後にでも、くっ付けておこうかの…」

ロリっ子は空を見上げる

空には、小さな雲が一つ、漂っていた

「うむ、あやつが始まったこの場所。あやつが転生することに雲を増やしていこうかのお。あやつはいつ気づくじやろうか？」

そんな時 テレパシーが届いた

『おば様く？ どこですか？ おせんべいお持ちしましたよ』

「ほう！ 煎餅か！」『今行くのじや。それと おば様と呼ぶないつも言つとるじやろ！』

『お待ちしております！ おば様！』『おい』

浮雲 56

10年前雲雀来る！

ガラガラガラガラ：

煙に包まれながら聞こえる、何かが崩れる音

あのロリっ子・・・そういう事は先に言えつての：

あと、俺にいじられてする ああいう反応、ゼッターわざとやってるよなあれ：

「ミードーリー タナービクー ナーミーモーリーノー ダーイナーク ショウーナ
ク ナミーガーイイー」

声が聞こえた方を見上げてみると、黄色い鳥が飛んでいた

！ 10年後のヒバードか？ 少し大きくなった気がする… 同一個体かは判らんが

止まれるように手を出してやると、そこに止まってくれた
うん、ヒバードだ

煙が晴れていく

「ふあゝあ。さわがしいなあ…。

君…誰？

僕の眠りを妨げるとどうなるか

知っているかい？」

体は今まで寝ていたから あくびが出た

立ち上がり 瓦礫の上から降りる

目線の先に立っているまる眉がこちらを見ている

周りには 所々にトゲが付いている瓦礫が散らばっていた

足下や壁には植物が生えている

壁の一部は何故か溶けている所がある

まろ眉こと幻騎士に近づき話しかける

「ねえ、君。 並中なら その眉毛は校則違反だ」

「!!?」

「(……)これは…」

「まあ いいさ。 しかし、なぜうちの行方不明だった生徒が倒れているんだい？」

「」

「!」

「………山本武はオレが屠った」

「ふうん 君が…。 じゃあ話は早いね。 君の行為を並中への攻撃とみな

し、僕が制裁を加えよう」

トンファーを構える。雲のボンゴレリングは指にはまっている

「いよくよ」

幻騎士に向かって走り出し、トンファーをくり出す

だが、ガツツ！ と、幻騎士の霧の炎を纏わせた柄での攻撃をカウンターにくらい後ろに吹き飛ばされた

吹き飛ばされた俺は、ドオンツ！ と、背後にあつた瓦礫にぶつかる

ガラ ガラ：

ムツ ス

眉間にシワが寄る

野郎……

「刃やいばではなく柄で倒そうなんて、ずいぶんふざけてるね」

立ち上がり、出てきた鼻血を拭う

あいつが油断して 攻撃時の踏み込みが浅くてなつて助かった：

大人雲雀さんと同等の体術＋死ぬ気の炎を使った攻撃を鼻血程度で済ませるこの肉体スゲー。たしか頭蓋を割るつもりの攻撃だったんだよなこれ：

幻騎士が話しかけてくる

「貴様、この時代の戦い方を知っているか？」

「？」

「では、これを見たことはあるか？」

そう言い、ボックス匣を見せてくる

だが、今世でそれを見たのは初めてだ

「……オルゴールかい？」

まだ匣を知らない雲雀が言うには正しい答え

「ならば、圧倒的に倒すのみ」

幻騎士が匣を開かい匣すると、新たに幻覚が作られた

上にパイプやホースなどが多く現れ、そこから複数のミサイルのようなものが出て、浮かびながら俺を囲む

「これは、貴様の置かれた状況をわかりやすく視覚化したものだ……。貴様は何百という誘導弾に囲まれている。更に……」

幻騎士がそう言うのと、俺を囲んでいた誘導弾は全て消える

「我が匣兵器は姿を消し、霧の中の幻まぼろしとなる。成長したおまえは経験によりこれを退けたが、貴様にそれはない。オレと戦うには10年早い」

「さくらばだ、雲雀恭弥」

ヒュオオオオオオオオオオオ

風を切る音がだんだんと迫ってくる

だが…今の俺では まだそれを対処できない

(っ、っ、っつきゅん！ はよ来い!!? 来るよな！ 原作通りだよな、原作通りだよなあ!!)

!!ドド ウツ!!!

誘導弾が何かに、いや、スイ ステ マ シー エイ アイ S I S T E M A C ・ A ・ I によって阻まれた。

多少の爆風は届いたが、俺にダメージが入ることはなかった。

「へ… 借りは返したぜ…。 つつても、てめーじゃわかんねーか…」

「恭さん!!!」

声が出した方には、髪型が少し変わったような草壁副委員長と 5人と1羽の群れがあつた

(言葉からも察せるが、原作通り俺を助けたのは獄寺隼人か……だが、)

「草壁哲矢。 いつ群れていいと言った？ 君には風紀委員を退会してもらう」

俺は草壁に向けてそう言い放った

浮雲 57

眉間にしわを寄せながら草壁が叫ぶ

「恭さん、リングの炎です!!」

ボックス 匣で応戦を!!」

「リングの炎…? ボックス…?」

「そうです!!?」

必死な言葉だが、雲雀^僕はまだ それらを聞き慣れていない

「ボックスが何かは知らないけど…リングの炎…、跳ね馬みたいな口ぶりがイラつくな。あの男も、これからの戦いに重要になるのは、リングの炎だとうるさくてね

「
リングに炎を…ムカツキを炎に…」

(雲雀の心も言っている)

昼寝をしたのに いきなりこんな訳の分からないことになって…敵が現れたのはいいけど、ずいぶんとぶぎけたやつ で…獄寺隼人にも借りを作ってしまうし、

草壁は群れてる…)

ポ オツ!

「君達なんて来なくてもよかつたのに」

リングには炎が灯った。それも、ヒト一人 軽く越すほどの大きな炎が

その炎を見た草壁は

「恭さん、ボックス 匣ハコです!!? 足元あしもとの匣ハコに炎を注入してください!!」

ム スツ 「いつから命令するようになったんだい? 草壁哲矢。やはり君

から咬み殺そう」

「なっ お待ちください委員長!!?」

そんなことをしていると、フクロウが クローム髑髏に何かを教えるように動いた

「…あつ ! 雲の人…後ろ!!」

彼女に言われたのもあるが、原作を知っていた俺はリングの炎を盾にしながら振り向

く

！ドオ！！

（っ！）

幻騎士の匣ボックスによる見えない攻撃を炎を使い防いだ。

雲の炎には絶対遮断力があるため、今の俺でも攻撃を防ぐことができたのだろう
そして、クローム髑髏は体力の限界で倒れた。

俺は幻騎士と向かい合う

「二度も仲間に救われるとは つきがあるな。だが、もう次は……」 仲間？ 誰、それ？
（そんなもの知らない）」

ポ！ウツ！

幻騎士の言葉に反応し、リングに灯る炎がさらに大きく、一気に膨れ上がる

「跳ね馬が言ってた通りだ……リングの炎を大きくするのは……ムカツキ」

（ツツコミが入ってるだろうが気にせず行こう。どうせ何もできないし……）

「副委員長……やはり先に剣士の彼を倒すよ。君の言うことを信じよう」

匣ボックスを拾い上げ 炎を注入する

「やり方は見ていたからわかるさ」

匣ボックスが開かい匣こされた、だが……

ど　しゃっ

「？」

出てきたものは足元に落ちた

「キュ…　　ウプ　　キュウウ…」

出てきたのは　酔っているような様子の、針が銀色をしているハリネズミ。伸び縮みしている針が目立つ

俺はそのハリネズミ、雲ハリネズミの横に片膝をつき　手を差し伸べた

「キュッ♪」

それに雲ハリネズミは反応し振り向く

グサツ！

雲ハリネズミの伸びた針が　差し出していた掌に刺さり　ポタポタと血が垂れる

(ここんぐらい平気だからな、暴走すんなよ。マジで暴走すんなよ？ 大丈夫！)

傷は浅いぞ!!? 貫通してっけど!)

そんな俺の思いとは裏腹に 雲ハリネズミの目は揺れていき、涙が溜まっていった。そして……

「キュウウウ… !キュアアアア!」ボ ボ ボ ボツ!

グ オオ!!

「くっ」 ガキイツ!

一瞬だった。ハリネズミが分裂したと思ったら トゲが付いた球体がどんどん増え、巨大化していった。

その時に俺に迫ってきたトゲをトンファーで防いだ

増殖は止まらない

球体群は壁や天井を壊しながらもまだまだ増えていく。

~~~~~

(ボックス 匣 兵器つてのは、兵器つて付くだけあつてスゲーよなー)

直に ボックス 匣 兵器というのを目にし そんなことを考えながら、天井が崩れる中 球体を駆け上がって行く

そこを草壁に見つかる

「恭さん!! どちらへ!!」

「妙な技を使う 丸い眉毛の彼にやられつばなしだからね」

だが、球体のトゲが伸び出し 移動を阻まれ 球体から落ちる  
 ダツ 「.....」

「この状況では無理です!!?」

「\*\*\*\*\*!!?」「あつちに道あるよ!」



少し離れた所にいた弁髪べんぱつの子と仔牛が、まだ残っている道を見つけた

「よし！　とりあえずそこへ!!？」

草壁は、気を失っている4人を担ぎながら移動する。

しかし、さすがの草壁でも人数が多く、1人落としそうになった

それに肩を貸す。

「この男には借りがあるからね。それに君にここで死なれたら咬み殺せない」

「きよ…恭さん…」

そして、10年後笹川了平にも肩を貸す。草壁の移動速度を少しでも上げるためだ。

（デケーんだよテメーら…。　　フン、俺だつていずれ180cm位には…。前世

の記憶によると、跳ね馬ですら180以上あったはずだ。だったら俺だつて!

…ん？　　人種が違う?…知らんな)「獄寺の身長は雲雀より少し低

い」

そんな理想を考えながら、草壁の言葉を聞き流し　移動をする。

これは閉まるだろうな、と思うような所を過ぎると、案の定。

ガシャン！ と、シャッターのようなものが降りて 来た道が塞がれ、ゴゴゴゴゴと音を立てながら左右の壁がすごいスピードで迫ってきた

「このままでは押しつぶされる!!」  
 恭さん!!? 他に匣兵器ボックスへいきは!!」

「もうないよ」

肩を貸していた2人を落とす、トンファアを取り出す

取り出したトンファアにリングに灯した死ぬ気の炎を纏わせ、迫ってきている壁を殴る

メ キャツ!

炎を纏わせたのにも関わらず、壁は少しへこむだけ

( ! ! . . . 確か: : 対炎性: : だったか . . . これ程とは: : . . . 一般人なら殺せる力だぜ? )

壁の進みは止まらないだが . . . 潰される! とも思っていない。

そして、壁がいきなり ピタつと止まり、プシュー っという音が聞こえたと思った

ときにはもう、意識が闇へと落ちていった…

## 浮雲 58

幻騎士を倒し、白くて丸い装置の元へたどり着いた沢田綱吉

そこに現れた入江正一とチエルベツロ

倒すため拳を構えた沢田綱吉だが守護者達が盾にされ手が出せない

捕まった守護者達のリングと匣ホックスは全て没収されていた

仲間には装置を壊せと言われたが、装置の中にはなんとこの時代の自分達がいた

この装置はこの時代の彼らを10年前に行かせないための物だと言う

やつらの目的はボンゴレリング

沢田綱吉は大空のリングを渡すことを迫られた

チエルベツロに銃を向けられる

カウントダウン

3  
……2  
……1  
……

!!ズガ ガン!!!

……ドサツ!

しかし、倒れたのはチエルベツロ

撃ったのは入江正一

「悪く思わないでくれ、少し眠ってもらっただけだ……」

入江正一は髪型を崩し隊服を脱ぎ捨てた

「沢田綱吉君と仲間ファミリのみなさん……よくここまで来たね。君達を待つてたんだ……僕は君達の味方だよ」

入江正一がとつた行動に 言い出した言葉に、皆みなが 驚く

今の状況が設定したゴール?

入江正一が秘密で仕組んだ計画?

自分達を鍛えるため この時代に連れてきた？

その言葉を簡単に信じることはできない

だが、この計画にはこの時代の沢田綱吉と雲雀恭弥も関わっており、本当の敵は白蘭びやくらんだと言う

入江正一は今を第一段階と、そして、クリアすべき第二段階、イタリアの主戦力の勝利が必要だと言った

~~~~~

イタリアでの結果を待っている間に怪我人の手当てをする
捕らえられていた仲間達は解放された

リボーンが入江に白蘭の能力について質問した

入江は、白蘭の能力は一言で説明するのは難しいが、この時代に起きているありえな

いことの多くが その能力に起因していると言った

くくく

イタリアからの情報が入った

ザンザスが敵の大將を倒したらしい

そして イタリアの敵は撤退をはじめたそうだ

あとは白蘭を倒すだけ

そう思っていた

だが・・・

「いいや、ただの小休止しょうきゅうしだよ」

きゆうに現れた立体映像ホログラムと聞こえてきた音声

それはミルフィオーレのボス 白蘭のものだった

白蘭はイタリアの戦いを前哨戦ぜんしゅうせんと言い

入江が白蘭を裏切っていたことも最初から分かっていたと言った

白蘭はボンゴレフアミリーに7・^{トゥリニセツテ} をかけた正式な力比べを挑んできた
 として告げられた

今まで6弔花^{ちようか}と名乗っていた者が所持していたマーレリング^{リッアル}は偽物
 真6弔花^{ちようか}という者が真のマーレリング^{ホルダー}保持者

白蘭の本当の守護者達

彼らの異常な力も見せられた

戦いは10日後 チョイスと言うものを行うそうだ

そして白蘭は 今いるこのメローネ基地がもうすぐ消えると言う

立体映像^{ホログラム}は消え、辺りが光に包まれていく

視界が白く染まったと思っただら地が揺れた

光と揺れが収まり辺りを見る

そこにはもうメローネ基地は無く、底の見えない大きな穴が空いていた

「どうしてオレ達だけ残れたんだろう？」

「彼が晴のボンゴレリングと共に来たからさ」

綱吉の問いに入江が答えた

「極限にここはどこだー!!？」

彼とはお兄さん。10年前の笹川了平

自分達が移動しなかったのは7つのボンゴレリングがそろい、結界ができたから
入江は白蘭の行いそんなことの何割かは読んでいたと言う

だが、了平が来たところで相手との戦力に差が開き過ぎている
どう考えてても無謀な戦いだということがわかる

しかし！

入江は、成長した自分達なら奴らと渡り合えると言った

そして、この時代のボンゴレボスからの贈り物を渡される

装置の中心が開き、そこから出てきたのはボンゴレの紋章が施されている 守護者そ
れぞれの死ぬ気の炎の色をした匣^{ボックス}

ボンゴレ10代目により託された、ボンゴレ^{ボックス}匣を

浮雲 59

メローネ基地での戦いが終わってから1日が経った

あの後は ヴァリアーから連絡がきて、六道骸が生存している可能性が高いことを教えられ、入江正一とスパナが一応だけどボンゴレ所属となり、全員ではないけどもボンゴレアジトに帰った

そして俺は今、並中の屋上で寝そべっている。

~~~~~

：：10年経っても並中は変わってなかったな：： ここに来る前、昨日と今日で回って見てみた並盛町は少し変化があったけどさ

まあそうだよな、雲雀が並中に手を出させるわけないか、俺も手出しさせるつもりもないしな

それにしても・・・やつとここまで来たか…

ボンゴレボックス 匣も手に入れた。あとは負け戦を見て、晴の敵を倒して、最終戦か

まるまる原作通りでつまらん・・・次は自由を所望する。次があるかは知らんけど

：

そんなことを考えていると、今いる所とは別にある屋上が騒がしくなった

沢田綱吉達が来たようだ

そして、俺の近くから声が聞こえた

「あいつら、いい顔してんな……しばらくほっといても大丈夫そうだ」

急に聞こえた声に 体勢を立て直しトンファーを構える。だがそれは聞こえ慣れた声だった

「まあ待て、恭弥。そうあわてなくても みっちり鍛えてやつから」

「ヤダ」

「まってつての!!」

声の主は跳ね馬ディーノ。俺は今までキッチリ戦えなかった鬱憤を晴らすように

彼との戦闘を始める

だが、今の彼には部下が付いておらずヘナチヨコになっていた

戦闘の「せ」の字にもならず、俺は草壁に案内され 風紀財団の施設に向かい、食事をし、その日はそこで寝た

そして、次の日からチヨイス開催時まで、俺は跳ね馬との修行に明け暮れた。

+++++

11時50分 並盛神社付近

ドス黒い雲が並盛神社の空を覆っていき、その雲から人の顔が 地上に光を放ちながら現われたのが見えた。その顔は ミルフィオーレのボス白蘭のものだった

それは下を向いて話をし始める。その声は俺のところまで届いていた

しばらく話をした後 その目が光ったと思ったら 光線のようなものが発射され

!!ドオンツ!!!

それが着弾した並盛の北山が大爆発した

（俺の並盛く!! いや俺のじゃなく未来の俺のか…）

そんな事を考えながら神社に向かって俺は走る、走る、爆走する……飛び上がる  
!

「何してんの君達？」

「よっ 待たせたな」

俺が神社に到着したと同時に、山本武も反対側から現れる

そして俺達は、ボンゴレボックスを開かい匣こうした

## 浮雲 60

俺達が灯した炎が 転移装置へと吸収される

俺達の炎の量は白蘭の予想を上回り 必要な炎の2倍もの数値に達していた。

獄寺隼人が話しかけ、それに山本武と俺が答える

「てめーら おせーぞ！」

「わりーわりー」

「僕は個人としてきてるんだ。 君達とは関係ないよ」

「ちっ」

「だが沢田。よく来るとわかったな!!？」

「……いや。わかっていたのは 全員揃わなくては白蘭には勝てないということだけだ」

ハイパー 超 モードの沢田綱吉が笹川了平に答える

「うん いいねえ。」

見事500万

ファイアンマホルテージ

F Vを超えて合格だよ。じゃあさっそく、チヨ

イスをはじめよう」

頭上の白蘭がそう言うのと、装置から複数枚のカードが 不自然な形で宙に浮かびながら出てきた

それを沢田綱吉が1枚選ぶと、俺達は装置によって転移させられた。

たどり着いたのは 雷のフィールド・超<sup>ちやうらいえんこうそくそうちやう</sup>雷炎硬層高層ビル

目の前には白蘭と真6弔花

白蘭はジャイロルーレットを取り出し、沢田綱吉と共にそれを回す

出たものは原作通り

ボンゴレファミリー・大空1、雨1、嵐1、無属性2の計5人      ターゲットは無属性

ミルフィオーレファミリー・晴1、霧2、雲1の計4人      ターゲットは晴

だけでも雲雀<sup>鶯</sup>にはそんなもの関係ない

「そんな理由で納得すると思ってるの？ 僕は出るよ」

「ひっ ヒバリさん」

「ちよっ、そんなこと言われても」

雲雀<sup>僕</sup>の言葉に沢田綱吉と入江正一が焦るが、それを止める者もいる

「待てつて恭弥。つたく、しよーがねー奴だなあ」

「デイーノさん！　いつのまに?!?!」

「<sup>ワッブ</sup>転移の時にまぎれこんだんだ。ずっといたぜ。おまえらの家庭教師なんだ、こないわけにはいかねーだろ？」

デイーノが雲雀<sup>僕</sup>に言う

「考えてみるよ。ツナ達がミルフィオーレに勝てば、その後は　どいつとでも好きなか  
け戦えるぜ。少しの辛抱じゃねーか。　なっ」

「．．．．．急いでよ」

「ああ　わかった」

「ひばり　は　まるめこまれた」

そして、　チョイスバトルがスタートする。



！カッツツトオオオ!!!

+++++

主人公のチョイスの感想・・・「原作通りで暇でした」

入江正一の告白後

「ぶお、おいつ!! てめーの相手はオレだあ！ 暴れたくてウズウズしてんだあ

!!」

「じゃまだよ」ぐいつ

チョイスが終わりアルコバレーノの大空 ユニが来て 沢田綱吉に助けを求めた、ユニは白蘭に迫られ、桔梗が攻撃してきたのをS・スクアーロが防いだ。

「スクアーロに…ヒバリさん!!？」

「んだてめえーは!? つつくなっ」

「僕の獲物だ」

「ちよっ…みんな!! どうする気〜!?!」

沢田綱吉は戸惑い困惑していたが、ユニの覚悟を宿した瞳を見て、彼女を守ることが決意した

スクアア口と獄寺隼人と俺以外のボンゴレ側は転移装置に向かって走った

~~~~~

スクアア口と獄寺隼人が匣ボックスを使いながらミルファイオーレに攻撃を仕掛けている
それをいつにも増して不機嫌そうな顔で見ている

(ムス…こんな状況での乱戦なんて望んでないよ)

獄寺隼人が地上から弾を撃ち、スクアア口は匣ボックス兵器の鮫を使いながら宙を舞う

(……めんどくさい…まとめていっちゃまえ)

俺は ボンゴレ^{ボックス} 匣^{かいこう}を開匣する

(ロール！ スクアーロ諸共敵^{もろとも}にダイレクトアタック！)

^{ボックス}

匣から飛び出たロールが 宙にいる敵3人とスクアーロに向かって突っ込んで行く

！ドシューウツ!!

「おっと」「あぶねっ!」「……」

(ロール、そのまま増殖)

突撃自体は避けられたが、ロールは増殖し、浮遊^{ふゆうきらい}機雷の様に敵の動きを制限した

「うおおおい!!てめーら! 乗れ!!?」

スクアーロが 鮫の匣兵器に乗りながら、俺と獄寺隼人の前を通るように進む
俺達はその鮫に乗り、沢田綱吉達を追う

浮雲 61

「よおし!! 出せえ!!」

俺達は沢田綱吉達と合流した

「やったんだね! 獄寺君!!?」

「オレじゃねーつす。ヒバリのバリネズミのトゲが増殖して足止めしてるんす」

その後、オレ達を追いかけて来た白蘭を 10年後六道骸の有幻覚が現れ足止めした

「絶対に 大空のアルコバレーノ ユニを 白蘭に渡してはいけない」

彼はそう言った

俺達は沢田綱吉の掛け声と共に リングに炎を灯し、転移装置を動かした。

+++++

並盛町・並盛神社

並盛に転移したのち、獄寺隼人がボンゴレボックス匣の新兵器の実弾を使い転移装置を攻撃した

だが、転移装置は破壊できておらず 白蘭の元へ行き、敵を乗せて戻って来た。その際に四方に何かが飛び散っていった。

(! 並中方向に・晴属性の敵だったはず)

「恭さん!!? どちらへ!!?」

「 一つ並中の方に落ちた。見てくる 」

「私も行きます!!?」

「恭弥っ オレも行くぜ!!?」

並中に向かう俺に草壁と跳ね馬も付いてくる。

+++++

並盛中学校

並中に落ちたのは真6弔花の1人 デイジーで、俺達は戦闘を開始した。

！ドオン！！

跳ね馬の攻撃が決まった

「どうだ？ 勝ち目がねーのはわかったら？ 降参しとくか？」

「ぼっ…ぼぼっ…僕チンはユニ様の居場所を知りたいんだ… 居場所を吐けば許してあげてもいいよ…」吐いちゃいなよ！」

そう言い、デイジーは匣ボックスを開匣かいこうする

「駆ける スクーデリア！！？」

デイジーの匣兵器ボックスへいき、太陽リフチエロテ・デルセレーノサイと、跳ね馬ボックスへいきの匣兵器カヴァアツロ・アマト、天馬カヴァアツロ・アマトがぶつかる

天馬が 大空属性の炎を纏ひづめった蹄ひづめで太陽サイの額を踏みつける

炎の特性により 太陽サイは石化し、それを俺の匣兵器、雲ハリネズミ Ver. V が体当たりし破壊する。

「ぼぼつ 僕チンの太リノチエロンテ・デル・セレーノ陽 サイが」

「僕のエモノに手を出さないでくれる？」

俺は跳ね馬にそう言いつける

「オレに向かつてきたんだからしよーがねーだろ？」

正当防衛だ」

（過剰防衛だよ……）「お前が破壊したんだろ？」

跳ね馬はデイジーに話しかける

「さあ、もう匣兵器ボックスはないはずだ。リングを地面において手を頭の上にあげろ」

その言葉を聞かずに デイジーはフラフラと立ち上がる

「……ぼつ：僕チンは ユニ様の居場所を知りたいんだ……。 ワープしてすぐにお前

達を見つけて嬉しかったから手加減してたけど…… 居場所を教えてくださいな

僕チンだつて怒るよ」

そう言ったデイジーは自身の服を破り 左胸に埋まっている匣ボックスに炎を注入した。

修羅開匣しゅらかいこ……それをしたデイジーの姿が変わった

両肩付近からはそれぞれ晴の炎が羽のように常時噴射され、髪は浮かび上がり、腕、脇、足にはウロコが現れた。

「デイジーは跳ね馬に向かつて突撃する。それを跳ね馬は跳び上がることで避け、匣を開匣する」

「こうなりや全力でいくぜ!!? スクーデリア!!」

匣から出てきたのは先ほどの天馬と違い炎の翼がはえていた

ベガソ・スーベル・サルト・ウオランテ
天馬 超翔

それはデイジーを攻撃するが全く効いていない。逆に攻撃によって千切れたデイジーの腕が天馬に巻きつき動きを止める

デイジーは腕を再生させ 跳ね馬に向かつて飛んでいく

跳ね馬は鞭による連続攻撃を使うが デイジーにかすることもなく距離を詰められ脇腹を刺された。

浮雲 62

(・・・ハア・・・仕方ない・・・)

バキ!

俺はトンファーでデイジーを殴り飛ばした

「ねえ 君達。並中で暴れるのやめてくれる？」

跳ね馬を蹴り飛ばし端に寄せる。

君達には制裁を与えなきゃね」

「いくよロール。形態変化」
カンピオ・フォルマ

「クピイイイ!!」

ロールの姿が変わる

なにものにも囚われず 我が道をいく浮雲と謳われた アラウデイの手錠

ガシヤン

「覚悟はいいかい？」

手錠の輪の片方から雲の炎をおびたトゲが出る

俺と彼は互いに距離を詰め 戦闘を始めた

手錠のトゲで彼の皮膚を傷つけるが、それは一瞬の内に再生される
彼の拳を避け、その腕を手錠で捉える

「もう逃がさないよ」

片手に持っていたトンファーで殴りつけようとするが、彼は手錠がはめられていた腕の一部だけを切り離し、すぐさま再生させ、俺の顔を殴り 吹き飛ばす。俺は勢いよく校舎に叩きつけられた。

「修羅開匣しゆらかいこは能力の掛け算なんだよ。匣ボックスアニマルの持つ特殊能力と 人間の能力が掛け合わされて あらゆる生命体のリミッターを超えた能力を生み出すことができるんだ。だから、トカゲのしっぽでは考えられないことも」

先ほど切り離された腕が再生していき 俺の首を締めつける
再生し始めのそれはまだ脆く、殴ることで簡単に崩れた

(ウエ… グチャだつて…気持ち悪)

内心の感情をおくびも出さず 俺は立ち上がった

「残念だけど、君のボンゴレボックス 匣は 僕チンと相性最悪さ。もう諦めてユニ様の居場所を吐いちゃいなよ」

「 いらないな。 その程度なら武器トランプはいらな。 校舎を壊した罪で、君を逮捕する 」

手錠を2つ…4つと増殖させる

「面白い手品だね。 でも、手錠をいくつ増やしたところで…同じだよ!!」
彼は前かがみになりながら飛んで来た

「 僕も同感さ。 10や 20ならね 」

腕を突き出しての攻撃をしてきた彼の腕に2つの手錠をはめ、それを雲の炎で増殖させていく

手錠は凄まじい勢いで増殖し、いくつもの手錠が拘束具のように彼の全身を捕えた。

「こんなの…聞いてない!!」

「君……死にたがってみたいけど、そんな甘えは許さないよ。……しめあげよう」

俺が持っている方の手錠をひねると 彼を捕らえている手錠がギリギリと音を上げながら締め付けられ、彼の全身からどンドン血が噴き出る

彼は血を吐きながら叫ぶ

「聞いてない!! 白蘭様に聞いてないよ!!手錠がこんな風になるなんて!!!
チー!!!」

苦くる

「ぼ……ぼふっ」

彼は泡を吹き、仰向きに倒れた

「思ったより情けないね。君が死にたくても死ねないのは、晴の活性の炎が体内を巡っているからだろ? これは風紀委員が没収する」

俺は倒れている彼に近づき、晴のマーレリングを抜き取った。

(
・ ・ ・ さ て …… 次 は 明 日 の 夜 明 け、 未 来 編 最 後 の 戦 い か ……
)

浮雲 63

夜が明けとともに、最後の戦いが始まった。

森の中にある湖。ここには 真6吊花 雲の守護者 桔梗ききょうが居た

最初の不意打ちが失敗し、桔梗ききょうに匣ぼックスを開匣かいかうされてしまう
ヌーヴォラ雲・ヴェロキラプトル

尾の先に雲の炎が灯っている 複数匹の小型肉食恐竜だ。この匣アニマルは 1匹
 1匹が強く、攻撃されるが、こちらの攻撃を当てることができなかつた。

しかし、ランボの持つボンゴレ匣のお陰でそいつらを殲滅することができた。

それを見た桔梗は 修羅開匣しゆらかいかうを行つた

それに対抗すべく、了平は匣ぼックスアニマルの我流ガリユウを形態変化カンビョウ・フォルマさせ戦つた

だが、激しいツラッシュで傷が開き、桔梗を倒すまではいくことができなかつた。

桔梗が誰かに話しかけた。そこにいたのは雲雀恭弥

手を出さないと言った雲雀の言葉に構わず、桔梗は地中からの攻撃を仕掛けた。その攻撃により、雲雀の左腕は噛みちぎられた。

そして、次のフェイントを入れた攻撃により雲雀は倒れた。

そのあと、次々とボンゴレ側の守備が倒され、全滅した

（わけねーだろ）

それらは六道骸による幻覚だった。戦いの最中、幻覚と切り替わっていたのだ。

ボンゴレ守護者、ヴァリアー、真6吊花が集まり、戦いが始まる。

く
く
く
く
く

乱戦の最中 弾けるような光とともに雷のマーレリングをはめている、白蘭に似た巨大な人型が現れた

それは幻覚ではなく、そこに実在している。しかし、それには攻撃が通じなかった。

それが1つの大きな光球に包まれたと思つたら、その光球から幾つもの光が伸びてきた

その巨人、GHOST^{ゴースト}は、敵味方関係なしに死ぬ気の炎を吸収していった。

く
く
く

山本武や跳ね馬、スクアー口達も合流した後、ここにいる敵味方の殆どの炎を吸収したゴーストに 手も足も出せずにいた時、沢田綱吉が救援に駆けつけた。

彼は死ぬ気の零地点突破改を使い、ゴーストと炎の吸収勝負を行った。

沢田綱吉の手に、炎ごとゴーストが吸い込まれた。だが、死ぬ気の炎を吸収し 巨大化するはずの沢田綱吉の炎に ほとんど変化が見られないことで 皆が警戒を始めた。

そこに、白蘭が現れた。白蘭は炎を発さずに空中に浮かんでいた。

ザンザストと六道骸が白蘭に攻撃するが、ゴーストに死ぬ気の炎をほとんど吸われた彼等の攻撃は 全くと言っていいほど通用しなかった。

沢田綱吉が攻撃を始めた。

だが、白蘭にダメージが入っているようには見えない。逆に、たった一度の攻撃で沢田綱吉は地に落とされた

白蘭の背に翼がはえる。その翼からは火の粉のようなものが飛び散っている。彼の体内にはゴーストが吸収した炎が蓄えられていると言う。

そんなことは関係ないと、沢田綱吉は白蘭に立ち向かう

しかし、沢田綱吉の攻撃が白蘭に効くことはなく、白蘭の攻撃で沢田綱吉はボロボロになる。

沢田綱吉は白蘭の挑発を受け、炎圧を上げる。白蘭もそれに合わせて炎圧を上げていく。

どンドン上がる 2人の炎圧

カアアアン カアアアン と音が聞こえ始めた。リングから出る 2人の炎の形状も変わる

大空のリングが共鳴しているようだ。

半円形の炎が大きくなっていく。広がるそれには攻撃が通用しない。

空から同じような炎の球体に包まれたユニが飛んで来た

それは沢田綱吉と白蘭の炎と融合し、1つの大きな結界となった。

ユニのマントの内側から、5つの アルコバレーノのおしゃぶりが落ちた

それらのおしゃぶりからは、メガネやバンドナなど 赤ん坊達の一部がとびだしていった

アルコバレーノの肉体の再構成が始まろうとしている、アルコバレーノが復活しよう

としていると リボーンは言う。

だが、アルコバレーノの復活には時間がかかる。それを見抜いた白蘭は沢田綱吉の首をゴキヤ！と捻った

沢田綱吉は倒れ、超モードも解けた。

そんな沢田綱吉にリボーンは言う。

お前は白蘭を倒さなくてはならない。ユニもお前達を平和な過去に帰すために命を捧げるつもりなんだと。

沢田綱吉は リボーンのその言葉で目を覚ました。

だが、超モードが解けた彼は恐怖により ガタガタと震えており、戦える精神状態ではなくなっていた。

そんな彼に、自分の運命を呪っちゃうだろ？ と、白蘭が言った

しかし彼は、それはちがう気がする。未来こゝろでのことは、全部 大事なオレの時間なんだ と返した。

そう返した彼にトドメをさすため、白蘭は、心臓目掛けて ダーツのように尖ったも

のを投げつけたが、それは彼がランチアから貰い、首から下げていたリングによつて阻まれた。

それにより、沢田綱吉は改めて思い知った

自分は全てに支えられている。皆がいたから 自分はここにいる。技も武器も 皆がないくては完成しなかった。ここでの時間は自分の宝物だと。

沢田綱吉は自らの意志で超モードになった

その心に応えるように、皆のボンゴレリングから 光が放たれ、それと共に、どこからか声が聞こえてきた。

『どうだろうな』

『あの子、言っていることがボスと同じだ』

『血は争えないでござるな』

『究極にいい奴ではないか』

『残念です…。ボンゴレには不要な 軟弱な思考ですよ』

『興味ないな』

『……てめえの好きにすりゃあいいさ。』

いつものようにな』

『そうだな……G』

『Xよ……お前の考えにオレも賛成だ。』

オレの真の後継者に力を貸してやりた

いが、あいにく、それはできない。』

そのかわり……枷をはずしてやろう

』

ボンゴレリングを持つ者達の前に、それぞれの初代が現れた

白蘭はそれを悪趣味だと言うが、ユニはそれらは本人だと言った。

ユニには、生まれた時から記憶に焼きついている詩があると言う。

海はその広がりには限りを知らず

貝は代を重ね、その姿受け継ぎ

虹は時折現れはかなく消える

マーレとは「海」　ボンゴレとは「あさり貝」　アルコバレーノとは「虹」

この詩は、^{うた}7・^{トゥリニセツテ}のそれぞれの大空の在り方を示している。

どこまでも広がる「海」^{マーレ}は、横の時空軸。すなわち、平行に広がる平行世界^{パラレルワールド}に生き代を重ねる「あさり貝」^{ボンゴレ}は、縦の時空軸。すなわち、過去から未来への継承に生き

「^{アルコバレーノ}虹」は、どこにもとどまらず。その両方に、線ではなく点として存在するもの
 そう、ユニは語った。

プリーモは言った。沢田綱吉の枷をはずすと。

『今のボンゴレリングは仮の姿だ。　ボンゴレリングは、ある時より　厳格な継承をするために2つに分割し、ボスと門外顧問の2人が保管することとなった。　だが、分割できる構造を保つために、同じ7・^{トゥリニセツテ}のマーレリングやアルコバレーノのおしゃぶりに比べ、炎の最高出力を抑える必要があった。

しかしもう、その必要もない。おまえになら、このリングの本当の意味と、オレの意志をわかってもらえそうだからな』

大空のリングから炎が溢れ出し、守護者のリングも光に包まれた。それはすぐに収まった、そして収まったとき、ボンゴレリングの形が変わっていた。

『^{デーモン}X。』

マーレの小僧に一泡吹かせてこい』

そう言ってプリーモは消えた。

ここから沢田綱吉の反撃が始まった

彼のパワーもスピードもケタ違いに上がっていた。

沢田綱吉は白蘭の白い翼をもぎ取った。

「どうした白蘭。翼がなければただの人か？」

だが、落ちた白蘭は狂ったように笑った。そして白蘭の背からは噴き出た血のようにも見える黒い翼がはえた。

2人は、それぞれの「こころ」のために戦う。

白蘭の攻撃がユニに落ちた

だがそれは、ユニの全身から発されている大空の炎によって弾かれた。

ユニは、おしやぶりに命の炎を灯す

おしやぶりに命を捧げ、アルコバレーノを復活させることが自分の運命さだめだと言った。

それを止めようとする白蘭を沢田綱吉が止めている。

死への恐怖により、一度は炎が小さくなったが、再び、先ほどよりも大きな炎が灯る。

そんな時、結界の外に居た者達が、結界に攻撃し、ひとり人入れるだけの隙間が開き、

その隙間から ガンマγが 結界の中に入った。

ガンマγは、自分の炎も使ってくれと、ユニを抱きしめる。

2人は微笑みながら肉体を消滅させた。

沢田綱吉と白蘭は怒りに身を任せ 本気の技を撃ち合った
その結果 リングを残し消滅したのは白蘭だった

最期さいごの表情・・・彼の すがりつくような目とあの笑顔： あれを見た者は、原作を知っている俺以外、誰も居ないだろう

白蘭が消滅したことに喜んだ者、悲鳴のような声を上げた者。ユニとγガンマが消えたことを悲しみ、涙を流す者。残った敵にトドメをさそうとした者。そんな彼等を 俺は 一歩後ろから観ていた。

そして、アルコバレーノ達が復活し、俺達は過去へと帰った。

終わる世界

浮雲 64

俺の人生は続き、原作通りに進んでいった……原作通りにしか進まなかった。『継承式編』『虹の呪い編』と そのままに……

原作終了後も、人前では『俺』の意思を微塵も出すことができないまま、俺は……いや僕は、雲雀恭弥としての人生を終えた……。

+++++

…ワオ… 久しぶりだな…

瞬きのように、パツ と視界が明るくなると 周りの景色は先ほどいた場所と全く違っていた。

つ ま り 、

目を覚ましたら僕は、見たことはある神社の前に立っていた。

3 度目だね。慣れた。前から時間が大分空いたけど

目の前には、それほど大きくない神社があり、僕が立っているとこの左右には、僕の背の1.5倍くらいのおおきさの石灯籠いしとうろうが置いてある。

辺りを見渡してみると 多くの木が生えていて、石階段が下の方に続いている。ここは並盛神社だということがわかった。

自分が何故ここにいるかは、ある程度予想がつくけど…

原作終了後も、一応 10代目雲の守護者として、大空の彼にたまに手を貸しながら、

できる範囲で好きに動きながら生きたのは覚えてる。

年をとるにつれ 体が思うように動かなくなっていく、最期は……

ハア：
まあいいさ、動かなくなった肉体に執着はない。

それに、ここに來たと言うことは、

「ねえ、君。出てきなよ」

そう言うのと、賽銭箱の上に 小さな光がいくつも集まり、それが人の形をとったと思つた時、一瞬にして、その光の集合体が見たことのある 金髪ツインテールのロリっ子へと姿を変えた。それは賽銭箱の上に座る。

そのロリっ子は、慈しむような目で 僕のことを見つめながら、ゆつくりと声を發した

「久しぶりじゃのお。元氣にしておつたか？」

「その目、跳ね馬みたいで氣持ち悪いから潰してもいいかい？」

「はあ!?」 うお！
……い、いきなり何を言つとるんじやおぬしは!!?」

僕の突拍子もない言葉に、ロリっ子は賽銭箱からずり落ち 目を見開きながら怒鳴つ

てきた

「大袈裟な反応だね。冗談だよ。」

「…10%ほどは…」

「聞こえとるからの！ ボソツと言つても聞こえとるからの!!」

ロリっ子のツツコミはスルーし、僕は彼女に問う

「それで？ 何故、僕はまた此処に来る事になったんだい？」

僕は 自分が死

んだという記憶があるけど、それは確かかな？」

「確かじゃよ。おぬしは確かに死んだ。死んだ後に此処に来た。ほれ、姿も原作時のものになつとるじゃろう」

指を指され、自身の体を見てみると、確かに若返つていた。だが、今 それは関係ない

「ちやんと答えてくれないかな？」

「わかつとるわかつとる。(たく、相変わらずじゃのお) そうじゃなあ… まああれじゃ。おぬしには また転生してもらおうと思つとるんじゃよ。だから、此処に呼んだのじゃ」

「…転生…またかい？ 一体何のまねだい？」

「うむ…… 理由はまだ話せんのだじゃ……まあ……こちらの不手際としか言いようがないのう」

「へえ…… 雲雀恭弥としての転生も含めてかい？」

「そうじゃ。……理由は話せんが、これだけは言っておく……おぬしには……しばらくの間、転生を繰り返してもらわんといかんのじゃ」

その言葉に 雲雀は不機嫌になりながらも返答する

「……ふうん……。 何故？ 君は。僕に。また。あんな窮屈な生せいをおくれ

というのかい」

「いや！ 違ちがい！ 大丈夫じゃ！ 一応 それ用に世界を整えておいたのでな、前よか自由に動けるじゃろう！

：次の世界は、おぬしの言う 原作力は少しは抑えられとるはずじゃ。それに、次は成り代わりではなく、新たにおぬしという人間を追加する予定じゃから、だいぶマシになるじゃろう」

ロリっ子の言い分を黙って聞いていたヒバリは口を開く

「君……だろう」とか「はずだ」とか……バカにしてるのかい？ 理由も聞かさ

れず、そんな言葉を並べられて、僕が納得するだけでも？ だいたい君は「パチンツ！

ロリっ子が ヒバリの言葉を遮るようにフィンガースナップ指パッチンをする、彼は次の言葉を発する間も無く、一瞬にして光に包まれ、この場から消え去った。

「……あ……… 面d oではなく、まだ理由を話せないからと言って、急に飛ばすのは気が早かったかのお……」

ロリっ子は腕を組みながら空を見上げた。空には浮き雲が2つ浮かんでいる。

「うむ…… 今回、あやつには ワシが手を加えた世界に飛んでもらったが…… 一体、どうなることやら……」

ハアー

うつむき、ため息を零す

「憂鬱じゃ。今のあやつを飛ばす前に、別世界に呑み込まれてしまった、未来編のあやつ
の監視もある…… おっと、監視と言っけしもうた……見守りじゃ見守り」

ロリっ子は 片手を顎に当てながら考える

今飛ばした、もとい送ったあやつは 記憶が戻るまでかんと、ではなく見守つとけば良いじゃろ？ あやつを入れるため、新たに創つた世界じゃから、少し不安定じゃが、

その世界に造つたあやつのも、統合された記憶が定着し、所謂記憶が戻つた状態になれば、ある程度目を離しても大丈夫になるじゃろう。始まりの時みたく、前世の記憶が戻る前の記憶が消えてしまつたら、その時はその時じゃな。

それと未来編のあやつの説明は、まあ その時したからいいじゃろ。どうせ別世界だし。

・・・ハア

あやつを繰り返し転生させる原因となつたあの若造共には、もつとキツクイお仕置きが必要じゃのお。 はてさて、何をさせようかの

そんな事を考えている時 テレパシーが届く

『おば様、おせんべいをお持ちしました』

『お、わかつたのじゃ。今行くぞ』

「よし、考え事は煎餅を食べながらでいいじゃろ。・・・あやつには…いずれ謝らないと

いかんのお」

ロリっ子がそう零した次の瞬間にはすでに、彼女の姿は何処にも見当たらなかった。此処にあるのは、並盛神社とその周辺に似た場所と、空に浮かんでいる2つの雲だけだった。

番外編

雲は漂う

(10年後 大人雲雀)

白蘭を倒した事によりマーレリングの力が無効化された。それにより白蘭がマーレリングを使い引き起こした出来事は全て、全パラレルワールドのあらゆる過去に遡り抹消された。

抹消とは、(ぬりつぶして)消してしまうこと

僕達の世界は、マーレリングが封じられているという過去が存在する世界に塗り潰さ

れた。

+++++
+++++
+++++
+++++
+++++
+++++
+++++
+++++
+++++
+++++

!?.....ワオ。 一体何だい？

一瞬で周りの景色が変わった。 先程居た場所と全く違う所に移動している

今の今まで、他の守護者達と共に地下に移動してた 白くて丸い装置の前に居たんだ
けど.....

僕は今、並盛神社の前に立っている。

（幻術.....ではないようだね。 転移装置、とも違うかな.....あれは多くの炎が必要なはず。

誰も炎を使ってなかった。炎が貯めてあったのなら別だが。そもそも此処に僕しか居ないから、転移装置という可能性は除外していい。あれは白蘭でも、まだ縮小化に到っていないだろう。

復讐者の夜の炎？ 復讐者が僕に接触する理由が分からない。可能せは低いけど、復讐者だったら厄介だな、今の僕は 彼らに手も足もでないだろう。 他の可能性は………)

現状把握をしながら、敵が居る可能性も考え 周囲の気配を探りつつ、持っている武器を思い出す(この間0.2秒ほど)

(雲のリングを切らしてるから匣兵器は使えない。炎を灯せないトンファーは有るにはあるが……!!)

仕込みトンファーを取り出そうとしたものの、トンファーが無いことに気付いた

(……いつの間に……どこかに落とした？ ……なら、現状使えるものは身体が1番か……)

だが、人の気配どころか、動物の気配でさえも全く感じない。これは異状だ危険だが、目を閉じて気配を探ることに集中する。

此処には生き物1匹存在してない。。。。。。あれ…？

僕の気配もない

バツ と勢いよく目を開けて自分の体を確認する

(有る。有る。有る。いつも通りの僕の体)

だが無かった。正確には無くなっていた

(? 幻騎士に付けられた傷が無い)

そして 傷を確認するために体に触れていて気が付いた

(あ……れ……?? ……脈が、無い……心臓が動いてない。あ……いつから……呼吸をしていない……っ！)

視界が揺れる。意識が朦朧としていく。何も考えられない。

「

……

……

……！

「……っ……!!」

「!しっかりせい!!!」

「っ! ……あ……」

いつのまにか閉じていた瞼を開けると、鮮やかな赤がこちらを覗いていた

「……」

僕は何も考えずにそれを見ていたが、次第に赤色が離れていき、僕はそれが人の目だということに気づいた。その目の持ち主は金色の髪の毛のしよう、いや少女だった。

「ハァー……正直すまん……ワシの配慮不足じゃった。まさかおぬしがS A N チェックに失敗するとは思わなんだ。創ったばかりで設定が甘い、早急に設定の見直しをせんとな……。あやつが大丈夫だったんで、少し油断しとった」

早口でボソつと言った言葉は聞き取れなかつたけど、どうにか正気を取り戻すことができた。そして僕の腰ほどの背もない彼女と、この場所のことも思い出した。

僕はまだ少し違和感の残る頭を片手で押さえながら、彼女との会話を進める

「……随分と久しぶりだけど、今の事も含めて説明してくれるよね」

「疑問形じゃないのお。まあ、説明するがの…。まずは今おぬしに起こったものについてじゃが、簡単に言うと、おぬしが気づかなくてもよいことを連続で気づいてしまったために起こってしまった現象じゃな。一時的狂気とも言う」

「ああ。ニヤルや黄衣とか出てくる系にあるあれかな」

「そうじゃ。じゃがもう起こらないようにとく、じゃからこれへの詮索はなしにしとくれ。」

それでおぬしが今此処に居ることに關してじゃが。まず、おぬしが今までいた世界は消えてしまったのじゃ。少し違うが 例えは、2つのセーブデータがあるとするじゃろ。その2つには別々のデータが保存されておった。じゃが、片方のデータがもう片方より良いルートに入ったため、良いデータを悪いデータの方にも上書き保存し、悪いデータは良いデータに消された。…：という感じかのお。上書き保存した理由は、良いルートを進めてる時に 選択肢を間違え、悪い方に行った時に少し前からやり直しするため。保存できる場所は2つしかなく、交互に保存するために悪いルートを消した。

その悪いルートがおぬしが居た世界じゃったとを考えてくれ」

「何それムカつく」

「例え話じゃよ。おぬしが居た世界がそうじゃっただけで、消えずに進む未来世界だっ

「であるはずじゃ」

「次に、この場所が繋がつとる世界は、おぬしが元いた世界とは異なる世界なんじゃよ」